

あ が は た
揚 り 畑 遺 跡

－ 7 次 ・ 8 次 調 査 報 告 書 －

2019

東温市教育委員会



揚り畑遺跡7次調査出土分銅形土製品



揚リ畑遺跡7次調査出土分銅形土製品



揚リ畑遺跡7次調査出土動物形土製品



揚リ畑遺跡7次調査出土長頸壺



- | | | | |
|---|--------|---|-----------|
|  | ……1次調査 |  | ……5次調査 |
|  | ……2次調査 |  | ……6次・確認調査 |
|  | ……3次調査 |  | ……7次調査 |
|  | ……4次調査 |  | ……8次調査 |

西

(平成8年度撮影)

調査地および周辺遺跡位置図

序

本書は、平成 24 年度から平成 25 年度に揚り畑遺跡で実施した発掘調査報告書です。

揚り畑遺跡は、川内町ふるさと交流館（現：東温市ふるさと交流館）建設に先立ち、平成 8 年度に川内町教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代中期から後期にかけての遺跡が確認されました。その後、町道拡幅工事等による周辺整備工事に伴い、平成 13 年度までに 6 次調査までが実施されました。

この調査の中で、4 次調査・5 次調査で検出された大溝は、集落を取り囲む環濠としての可能性が考えられたほか、その埋土中からは 2 万点を超える土器片が検出されたことも含め、揚り畑遺跡は大規模な集落だった可能性が考えられるようになりました。

今回の調査は 11 年ぶりの発掘調査となりました。限られた調査範囲でありましたが、貴重な遺跡の記録ができたと考えております。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を頂きました方々に厚くお礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

東温市教育委員会
教育長 池川 仁志

例 言

- 1 本書は、東温市が平成24・25年度に北方地区で実施した中山間地域総合整備事業東温地区北方農業集落排水路工事に伴う揚り畑遺跡7次調査・8次調査の報告書である。
- 2 本文中では遺構名を略号化し、竪穴住居：S I、掘立柱建物：S B、土坑：S K、柱穴・ピット：S P、遺構内の柱穴：Pで記述した。
- 3 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 4 本調査の整理作業・報告書作成は、東温市教育委員会の指導の下で国際文化財株式会社が行った。
- 5 本書の編集は国際文化財株式会社が担当した。執筆分担は樋口康裕(東温市教育委員会)及び大塚正樹(国際文化財株式会社)が行った。
- 6 第4章自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- 7 本書に掲載した写真は、国際文化財株式会社が撮影した。
- 8 挿図及び遺物実測図の縮尺は縮尺値をスケール下に付した。
- 9 本調査に関わる遺物・実測図面・写真等は、東温市立歴史民俗資料館に保管している。
- 10 調査及び概要報告書作成においては、下記の方々にご指導、ご教示いただいたことを付記して感謝申し上げます。

梅木謙一 岡田敏彦 小笠原善治 沖野実 柴田昌兎 多田仁 前園實知雄

(五十音順 敬称略)

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査体制	
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 揚り畑遺跡7次調査	5
第1節 調査区の立地	
第2節 層位	
第3節 A区調査区	
第4節 B区調査区	
第5節 C1区調査区	
第6節 C2区調査区	
第7節 D区調査区	
第8節 E区調査区	
第4章 自然科学分析	65
第5章 揚り畑遺跡8次調査	71
第1節 調査に至る経緯	
第2節 層位	
第3節 遺構と遺物	
第6章 総括	85
図 版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第2章 遺跡の立地と環境

第1図 川内地区地質図…………… 3

第2図 周辺の遺跡分布図
(縮尺1:20,000)…………… 4

第3章 揚り畑遺跡7次調査

第3図 調査地位置図および区割り図
(縮尺1:2,500)…………… 5

第4図 A区調査区全体図
(縮尺1:400)…………… 5

A区座標グリッド・A区遺構番号図

第5図 B区調査区全体図(縮尺1:300) …… 6

B区座標グリッド・B区遺構番号図

第6図 C1区調査区全体図(縮尺1:150) …… 6

C1区座標グリッド・C I区遺構番号図

第7図 C2区調査区全体図(縮尺1:300) …… 7

C2区座標グリッド・C II区遺構番号図

第8図 D区調査区全体図(縮尺1:250) …… 7

D区座標グリッド・D区座標遺構番号図

第9図 E区調査区全体図(縮尺1:300) …… 8

E区座標グリッド・E区座標遺構番号図

第10図 各調査区の土層柱状図
(縮尺1:80)…………… 9

第11図 A区北壁土層測量図1
(縮尺1:40)…………… 11

第12図 A区北壁土層測量図2
(縮尺1:40)…………… 12

第13図 B区北壁土層測量図1
(縮尺1:20)…………… 13

第14図 B区北壁土層測量図2
(縮尺1:40)…………… 14

第15図 B区北壁土層測量図3
(縮尺1:40)…………… 15

第16図 C1区北壁土層測量図
(縮尺1:40)…………… 16

第17図 C2区北壁土層測量図
(縮尺1:40)…………… 17

第18図 C2区北壁土層測量図2
(縮尺1:40)…………… 18

第19図 C2区北壁土層測量図3
(縮尺1:40)…………… 19

第20図 D区北壁土層測量図1
(縮尺1:40)…………… 20

第21図 D区北壁土層測量図2
(縮尺1:40)…………… 21

第22図 E区北壁土層測量図1
(縮尺1:40)…………… 22

第23図 E区北壁土層測量図2
(縮尺1:40)…………… 23

第24図 A区コンタ図
(縮尺1:300)…………… 24

第25図 S I 1測量図
(縮尺1/40)…………… 25

第26図 S I 1出土遺物実測図
(縮尺1/2)…………… 25

第27図 S B 1測量図
(縮尺1/40)…………… 26

第28図 S B 2測量図
(縮尺1/40)…………… 27

第29図 S K 2測量図
(縮尺1/40)…………… 27

第30図 S K 2出土遺物実測図
(縮尺1/4、1/2、1/6)…………… 28

第31図 S K 5測量図(縮尺1/20) …… 29

第 32 図	S K 5 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	29	第 52 図	試掘トレンチ・遺構検出面および表土 出土遺物実測図(縮尺 1/4、1/2) ……	46
第 33 図	S P 13 測量図(縮尺 1/10) ……	30	第 53 図	C 2 区コンタ図 (縮尺 1/350)……………	47
第 34 図	S P 13 遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	30	第 54 図	S I 1 測量図(縮尺 1/50) ……	48
第 35 図	S P 18 測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/10、縮尺 1/2)……………	31	第 55 図	S I 3・4 測量図 (縮尺 1/60)……………	49
第 36 図	A 区試掘調査出土遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	32	第 56 図	S I 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	50
第 37 図	B 区コンタ図 (縮尺 1/250)……………	33	第 57 図	S I 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/2、縮尺 1/4)……………	51
第 38 図	S K 3 測量図および出土遺物実測図 (縮尺 1/20、縮尺 1/4)……………	34	第 58 図	S K 4 測量図 (縮尺 1/20)……………	52
第 39 図	S K 4 測量図および遺物出土状況 (縮尺 1/60)……………	35	第 59 図	S K 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/2)……………	52
第 40 図	S K 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	36	第 60 図	S P 15・包含層・表土出土遺物 (縮尺 1/4、縮尺 1/2)……………	53
第 41 図	S P 8 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20、縮尺 1/4)……………	37	第 61 図	D 区コンタ図 (縮尺 1/200)……………	54
第 42 図	焼土範囲測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20、縮尺 1/2)……………	38	第 62 図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)……………	54
第 43 図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/2)……………	38	第 63 図	S I 1 測量図 (縮尺 1/30)……………	55
第 44 図	C 1 区コンタ図 (縮尺 1/150)……………	39	第 64 図	E 区コンタ図 (縮尺 1/250)……………	56
第 45 図	S I 1 測量図(縮尺 1/80) ……	40	第 65 図	S K 1 測量図 (縮尺 1/40)……………	57
第 46 図	S I 1 出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4、縮尺 1/2)……………	40	第 66 図	S K 2 測量図 (縮尺 1/40)……………	57
第 47 図	S I 1 出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4、縮尺 1/2)……………	41	第 67 図	S P 1 測量図 (縮尺 1/20)……………	57
第 48 図	S I I 出土遺物実測図 3 (縮尺 1/6)……………	42	第 68 図	S P 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/2)……………	57
第 49 図	S K 4 測量図(縮尺 1/30) ……	43	第 69 図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4、縮尺 1/2)……………	58
第 50 図	S K 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、縮尺 1/6)……………	44	第 70 図	表土・表採出土遺物実測図 (縮尺 1/2)……………	58
第 51 図	S K 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30、1/4)……………	45			

第4章 自然科学分析

第71図 炭化材・種実遺体……………	67	第72図 暦年較正曲線図……………	68
--------------------	----	-------------------	----

第5章 揚り畑遺跡第8次調査

第73図 調査地遺構全測図 (縮尺1/350)……………	71	第80図 S I 1 測量図 (縮尺1/40)……………	78
第74図 遺構配置図 (縮尺1/250)……………	72	第81図 S I 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4)……………	79
第75図 調査区土層図1 (縮尺1/40)……………	73	第82図 S K 1 測量図 (縮尺1/20)……………	79
第76図 調査区土層図2 (縮尺1/40)……………	74	第83図 S K 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4)……………	80
第77図 調査区土層図3 (縮尺1/40)……………	75	第84図 S K 2 測量図 (縮尺1/20)……………	80
第78図 調査区土層図4 (縮尺1/40)……………	76	第85図 S K 3 測量図 (縮尺1/30)……………	81
第79図 調査地コンタ図 (縮尺1/350)……………	77	第86図 包含層一括・北壁および表土出土遺物 実測図(縮尺1/4、1/2)……………	82

表 目 次

第1章 調査に至る経緯

表1 調査地一覧……………	1
---------------	---

第3章 揚り畑遺跡7次調査

表2 竪穴住居一覧……………	59	表7 出土遺物観察表 (土製品) (1)……………	61
表3 掘立柱建物一覧……………	59	表8 出土遺物観察表 (土製品) (2)……………	62
表4 土坑一覧 (1)……………	59	表9 出土遺物観察表 (土製品) (3)……………	63
表5 土坑一覧 (2)……………	60	表10 出土遺物観察表 (石製品) (1)……………	63
表6 柱穴一覧……………	60	表11 出土遺物観察表 (石製品) (2)……………	64

第4章 自然科学分析

表12 放射性炭素年代測定及び樹種同定・種実同定結果……………	68
---------------------------------	----

第5章 揚り畑遺跡8次調査

表13 竪穴住居一覧……………	83	表15 S I 1 出土遺物観察表 (土製品)……………	83
表14 土坑一覧……………	83	表16 S I 1 出土遺物観察表 (石製品)……………	83

表 17 S K 1 出土遺物観察表 (土製品) …… 84
 表 18 包含層一括遺物観察表 (土製品) …… 84
 表 19 包含層一括遺物観察表 (石製品) …… 84

表 20 北壁出土遺物観察表 (土製品) …… 84
 表 21 表土出土遺物観察表 (土製品) …… 84

写真図版目次

巻頭図版 1 揚り畑遺跡 7 次調査出土分銅形土製品
 巻頭図版 2 揚り畑遺跡 7 次調査出土分銅形土製品
 揚り畑遺跡 7 次調査出土動物形土製品
 揚り畑遺跡 7 次調査出土長頸壺
 巻頭図版 3 調査地および周辺遺跡位置図

揚り畑遺跡 7 次調査遺構図版

図版 1	1. A・B 区調査前全景(東より) 2. A 区遺構検出状況(西より)	図版 11	1. C 1 区 SI1 完掘状況(東より) 2. C 1 区 SK4 完掘状況(北より)
図版 2	1. A 区 SI1 完掘 1(南より) 2. A 区 SB1 検出状況(西より)	図版 12	1. C 1 区 SK5 完掘状況(北より) 2. C 2 区調査前全景(西より)
図版 3	1. A 区 SK2・SP17 検出状況(北より) 2. A 区 SK2 遺物出土状況(北より)	図版 13	1. C 2 区遺構検出状況(東より) 2. C 2 区 SI1 完掘状況(南より)
図版 4	1. A 区 SK2 南北ベルト(西より) 2. A 区 SK5 分銅形土製品・遺物出土状況(北西より)	図版 14	1. C 2 区 SI3・4 遺物出土状況(東より) 2. C 2 区 SI3 北壁トレンチ 分銅形土製品出土状況(南より)
図版 5	1. A 区完掘状況(西より) 2. B 区遺構検出状況(東より)	図版 15	1. C 2 区 SI3 完掘状況(北より) 2. C 2 区 SI4 完掘状況(北より)
図版 6	1. B 区 SK3 長頸壺出土状況(南東より) 2. B 区 SK3 長頸壺出土状況(南より)	図版 16	1. C 2 区 SK4 遺物出土状況(南より) 2. C 2 区完掘状況(東より)
図版 7	1. B 区 SK4 遺物出土状況(東より) 2. B 区 SP8 遺物出土状況(西より)	図版 17	1. D 区遺構検出状況(西より) 2. D 区 SI1 完掘状況(南より)
図版 8	1. B 区焼土断面状況(南より) 2. B 区完掘状況(東より)	図版 18	1. D・E 区調査前全景(西より) 2. E 区遺構検出状況(東より)
図版 9	1. C 1・2 区調査前全景(西より) 2. C 1 区遺構検出状況(東より)	図版 19	1. E 区 SK1 完掘状況(南西より) 2. E 区 SP1 完掘(南より)
図版 10	1. C 1 区 SI1 遺物出土状況(東より) 2. C 1 区 SI1 柱状片刃石斧出土状況(南より)	図版 20	1. 東温市文化財審議会委員見学 2. 現地説明会

揚り畑遺跡 8 次調査遺構図版

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 図版 21 | 1. 調査区遺構検出状況 (東より) | 図版 27 | 1. SK1・SK2 検出状況 (西より) |
| 図版 22 | 1. 調査前状況 (東より) | | 2. SK1 断面 (西より) |
| | 2. 遺構検出 (東より) | 図版 28 | 1. SK2 断面 (北より) |
| 図版 23 | 1. SI1 検出状況 (南西より) | | 2. SK1・SK2 完掘状況 (西より) |
| | 2. SI1 床面検出状況 (南西より) | 図版 29 | 1. SK3 検出状況 (南より) |
| 図版 24 | 1. SI1 P5 砥石出土状況 (南より) | | 2. SK1 断面状況 (西より) |
| | 2. SI1 焼土検出状況 (西より) | 図版 30 | 1. SK3 完掘状況 (南より) |
| 図版 25 | 1. SI1 遺物出土状況 1 (南西より) | | 2. 調査完掘全景 (東より) |
| | 2. SI1 遺物出土状況 2 (南西より) | | |
| 図版 26 | 1. SI1 遺物出土状況 3 (南西より) | | |
| | 2. SI1 完掘 (南西より) | | |

揚り畑遺跡 7 次・8 次調査遺物図版

- | | |
|-------|---|
| 図版 31 | 1. A 区 SI2 出土遺物・A 区 SK2 出土遺物 |
| 図版 32 | 1. A 区 SK2 出土遺物・A 区 SK5 出土遺物・A 区 SP18 出土遺物 |
| 図版 33 | 1. A 区 SK5 出土遺物・A 区 SP13 出土遺物・A 区試掘調査出土遺物 |
| 図版 34 | 1. B 区 SK3 出土遺物・B 区 SK4 出土遺物 |
| 図版 35 | 1. B 区 SK4 出土遺物 |
| 図版 36 | 1. B 区 SK4 出土遺物 |
| 図版 37 | 1. B 区 SP8 出土遺物・B 区焼土出土遺物・B 区包含層出土遺物・C 1 区 SI1 出土遺物 |
| 図版 38 | 1. C 1 区 SI1 出土遺物 |
| 図版 39 | 1. C 1 区 SI1 出土遺物・C 1 区 SK4 出土遺物・C 1 区 SK5 出土遺物 |
| 図版 40 | 1. C 1 区 SK4 出土遺物・C 1 区包含層出土遺物 |
| 図版 41 | 1. C 1 区試掘調査出土遺物・C 2 区 SI3 出土遺物 |
| 図版 42 | 1. C 2 区 SI4 出土遺物 |
| 図版 43 | 1. C 2 区 SI4 出土遺物・C 2 区 SK4 出土遺物・C 2 区包含層出土遺物・C 2 区表土出土遺物 |
| 図版 44 | 1. C 2 区 SP15 出土遺物・D 区包含層出土遺物・E 区包含層出土遺物 |
| 図版 45 | 1. E 区 SP1 出土遺物・E 区包含層出土遺物・E 区表土・表採遺物 |
| 図版 46 | 1. 8 次調査 SI1 出土遺物 |
| 図版 47 | 1. 8 次調査 SK1 出土遺物 |
| 図版 48 | 1. 8 次調査 SK1 出土遺物・8 次調査包含層出土遺物 |
| 図版 49 | 1. 8 次調査包含層出土遺物 (1) |
| 図版 50 | 1. 8 次調査包含層出土遺物 (2) |

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

愛媛県中予地方局産業建設部農村整備第二課（以下、「中予地方局農村整備第二課」）は、中山間地域総合整備事業にて東温市北方地区で農業集落排水路及び管理道路の新設工事を計画していたが、工事計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地「川上古墳群」及び「揚り畑遺跡」に該当していたため、東温市教育委員会へ文化財保護法第94条第1項に基づく通知が申請された。

この申請を受け、東温市教育委員会は平成22年度に工事計画地の試掘調査を実施し、工事計画地の大部分で弥生時代の遺物包含層、遺物及び遺構を確認した。この調査結果に基づき、愛媛県教育委員会より遺跡が確認された箇所に対し発掘調査指示勧告が出された。

この後、中予地方局農村整備第二課と東温市教育委員会との間で遺跡の取り扱いについて協議を行い、愛媛県中予地方局より東温市が発掘調査に関する委託を受け、東温市教育委員会（東温市立歴史民俗資料館）が発掘調査を実施することとなった。

また、調査に関する事前協議の結果、発掘調査は二年度に分けて実施することとなった。このため、調査対象範囲の西より約220m区間を7次調査、その東約50m区間を8次調査区とし、平成24年度に7次調査、平成25年度に8次調査を実施した。

表1 調査地一覧

調査名	所在地	調査期間	調査対象面積 (㎡)
揚り畑遺跡7次調査	東温市北方甲1977番2、外31筆	H24.09.13～H25.02.02	1,078.00
揚り畑遺跡8次調査	東温市北方甲2048番4、外2筆	H25.10.31～H26.01.14	266.47

第2節 調査体制

7次調査（平成24年度）

事業主体者	愛媛県中予地方局
東温市教育委員会	教育長 菅野邦彦 事務局長 野口泰治
東温市立歴史民俗資料館	館長 宮崎良輔 副館長 近藤昭弘 主査 樋口康裕（調査員）
国際文化財株式会社	調査補助員 鶴久森彬

8次調査（平成25年度）

事業主体者	愛媛県中予地方局
東温市教育委員会	教育長 菅野邦彦 事務局長 宮崎良輔

東温市立歴史民俗資料館	館長	中矢淳
	副館長	渡部光長
	主査	樋口康裕（調査員）
国際文化財株式会社	調査補助員	波多野芳郎
		吾妻俊典
発掘作業員	稲荷正明 岩川久雄 宇根岡栄 江戸秀行 大西弘 梶上愼路 上山功市 久保裕司 桑原聡 高須賀操子 高橋宋典 玉井寿 露口省二 徳永幸治 利屋エミ 中島博美 長廣美明 橋本重 美 橋本太 兵頭正治 松本利雪 松本なぎさ 山本勝行 山 本尚 弓矢英明	

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境（図1）

東温市は、愛媛県のほぼ中央、松山平野の東端部に位置する。北は高縄山塊、東は石鎚山地、南に皿ヶ峰連峰を望み、三方の山間部と西の松山平野へと広がる扇状地などから形成されている。北部は高縄山塊の連山を境にして今治市、南部は皿ヶ峰連峰を境として久万高原町、西部は松山平野を通じて松山市、西部は西条市へ接している。市の中央部を流れる重信川をはじめ、これに合流する表川など多くの河川がある。

地質的には、東温市の77%を占める山地のほとんどは砂岩及び頁岩におおわれている。この砂岩層は、大阪平野の泉砂岩と同じ和泉砂岩層である。また中央構造線が西条市鞍瀬から塩ヶ森、番駄ヶ森の頂上南側を通り、砥部町、伊予市へと抜けている。

揚り畑遺跡が立地する丘陵地は、重信川の支流である表川の北側に位置し、西を渋谷川、東側を宝泉川の三河川に囲まれ、北側は高縄山塊へと続いている。

第2節 歴史的環境（図2）

揚り畑遺跡周辺の遺跡には、北西約700mに弥生時代の遺跡である宝泉遺跡が立地している。宝泉遺跡は昭和62年に川内町教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居をはじめとする遺構や多数の遺物が検出され、集落が形成されていたと考えられている。また、同地区の個人宅に文政年間に出土した弥生時代の中細型銅銚1点が伝わっている。

古墳時代後期には丘陵地上に古墳が築かれるようになる。周囲には揚り畑1号墳、揚り畑2号墳、揚り畑3号墳、西組1号墳を確認することができる。また、南約270mには古墳時代終末期の川上神社古墳が位置している。本古墳は大正2年に調査が行われ、南向きに開口した2基の横穴式石室が確認されている。当時の調査で多数の須恵器、馬具、鉄器等が出土したことが記録されている。特に馬具の杏葉は鐘形杏葉で、奈良県藤ノ木古墳出土のBセットと同様のものであることから、被葬者が畿内との関連を持つ人物の可能性も考えられる。



(川内町「川内町新誌」1992より一部改変の上転載)

第1図 川内地区地質図



(国土地理院2万5千分の1 伊予川内を一部改変して使用)

- | | | |
|-----------------|-------------|---------------|
| 1: 揚り畑遺跡7次・8次調査 | 11: 表川西遺跡 | 21: 三島神社御旅所古墳 |
| 2: 則之内焼窯跡 | 12: 表川東遺跡 | 22: 北方古墳 |
| 3: 安国寺跡 | 13: 南方広見1号墳 | 23: 物部塚古墳 |
| 4: 川上古墳群 | 14: 南方広見2号墳 | 24: 揚塚古墳 |
| 5: 西法寺墓地 | 15: 南方広見3号墳 | 25: 西組金毘羅さん古墳 |
| 6: 苔谷焼窯跡 | 16: 旦之上1号墳 | 26: 西組1号墳 |
| 7: 宝泉・新池周辺遺跡 | 17: 旦之上2号墳 | 27: 揚り畑遺跡 |
| 8: 宝泉遺跡 | 18: 西之側古墳 | 28: 保免遺跡 |
| 9: 川上神社古墳 | 19: 揚り畑1号墳 | 29: 松尾城跡 |
| 10: 竹之鼻遺跡 | 20: 揚り畑2号墳 | 30: 揚り畑3号墳 |

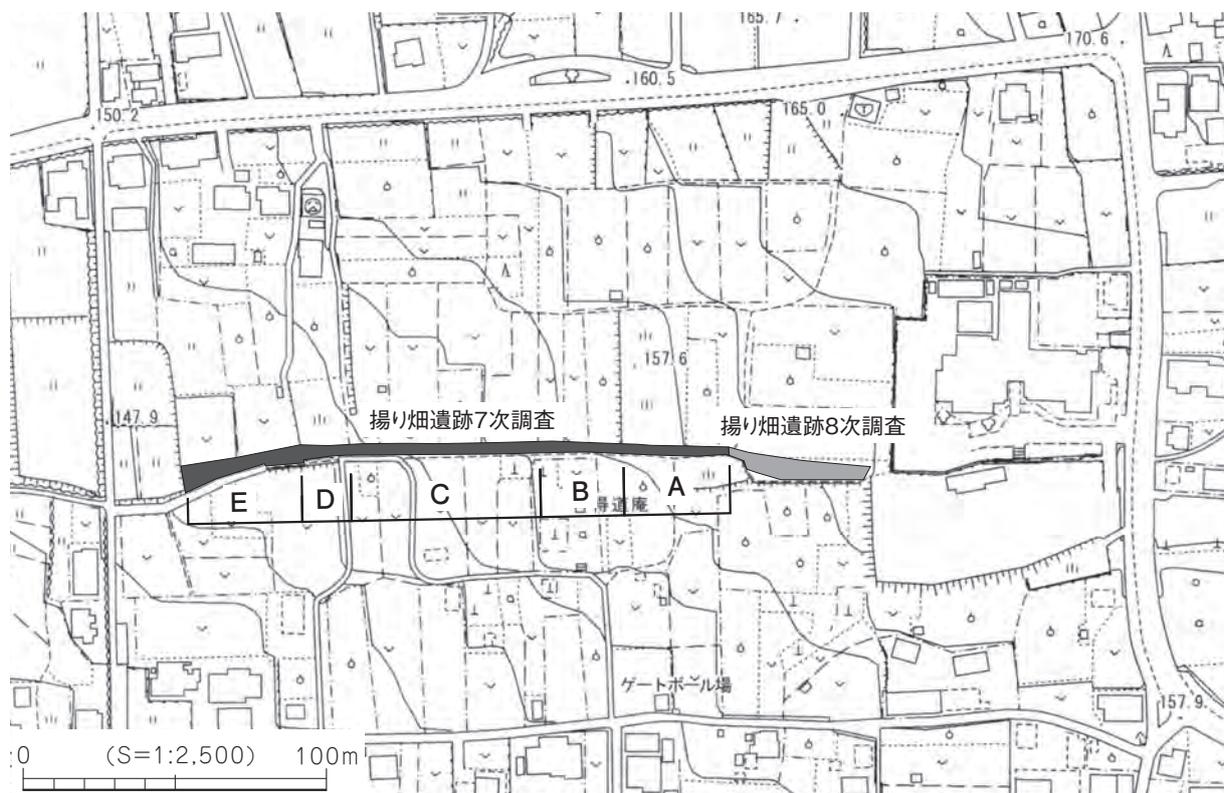
第2図 周辺の遺跡分布図

第3章 揚り畑遺跡7次調査

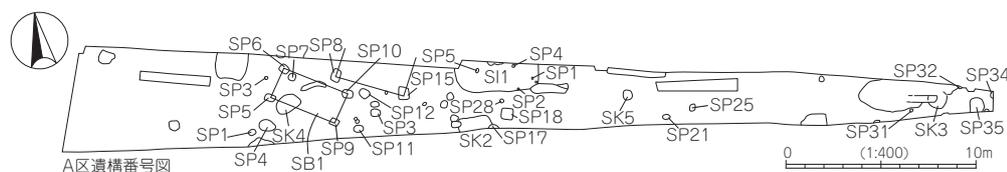
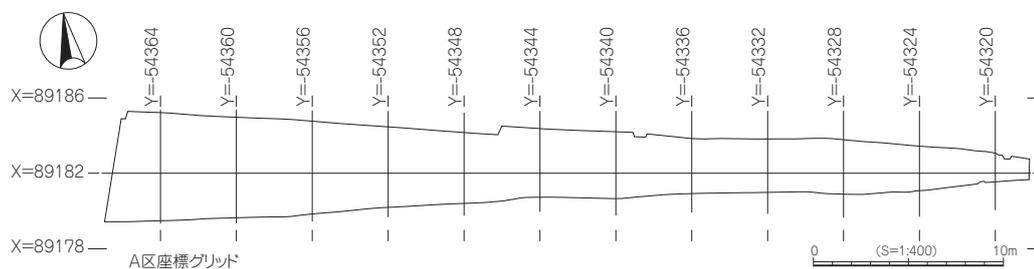
第1節 調査区の立地

揚り畑遺跡7次調査区域は、東西長約220m、南北幅は中央付近で約5mとなる。標高は調査区東端部が約158m、西端部が約148mとなる。本調査は東西に細長い調査区となるため、調査区を5つに分け調査を行った。調査区東側をA区、西側をE区として設定した。ただし、C区のみ東側をC1区、西側をC2区とした。調査区全体の調査面積は1,078.00㎡である。

調査期間は平成24年9月13日から平成25年2月2日まで実施した。

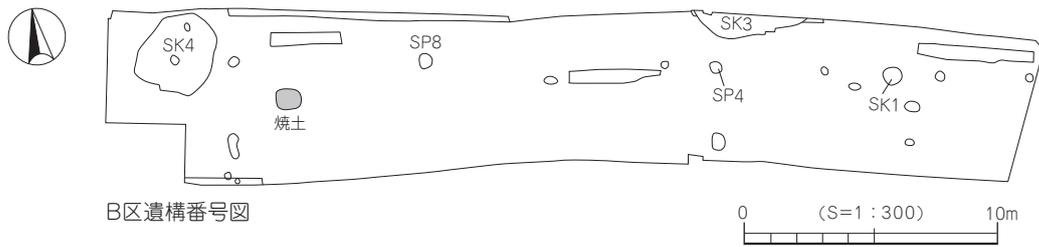
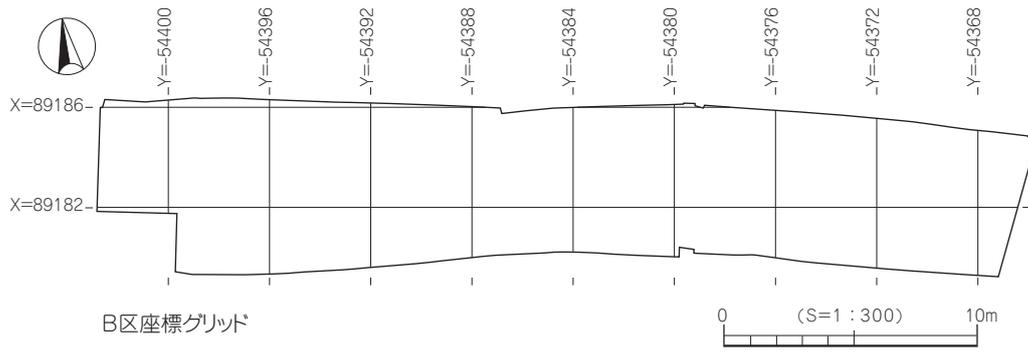


第3図 調査地位置図および区割り図

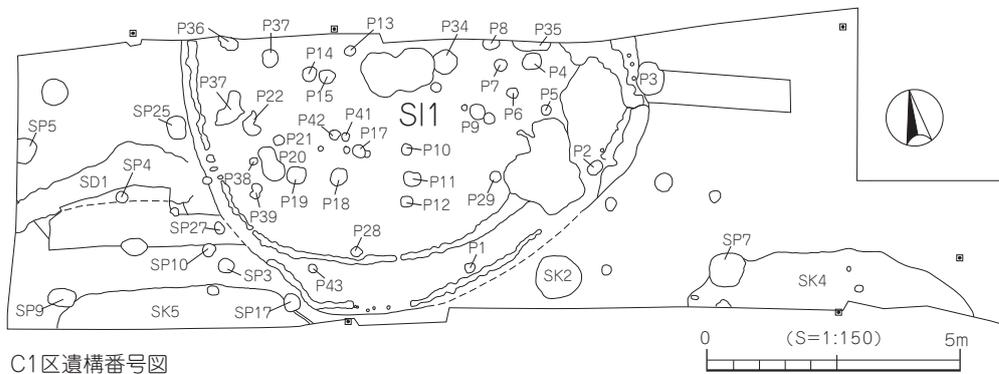
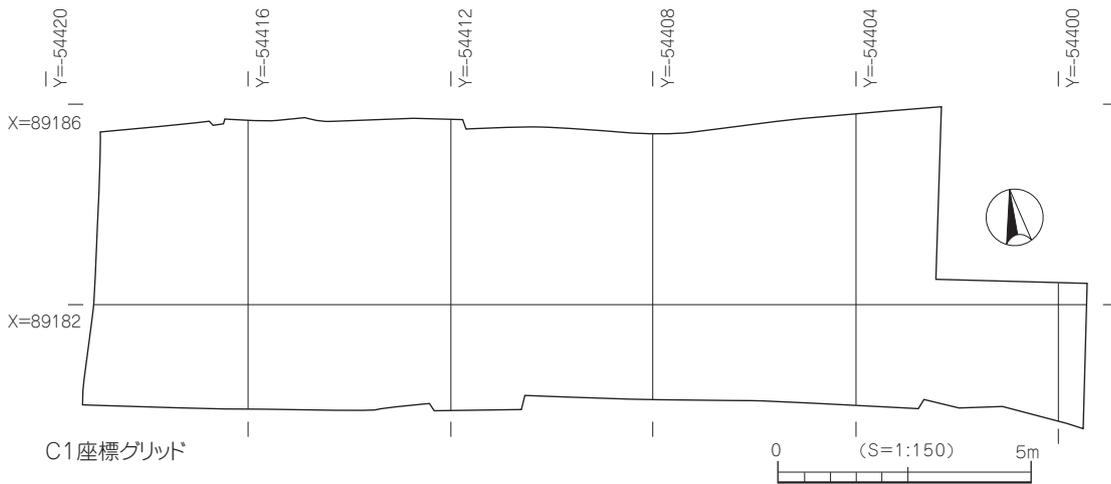


第4図 A区調査区全体図

揚り畑遺跡7次調査

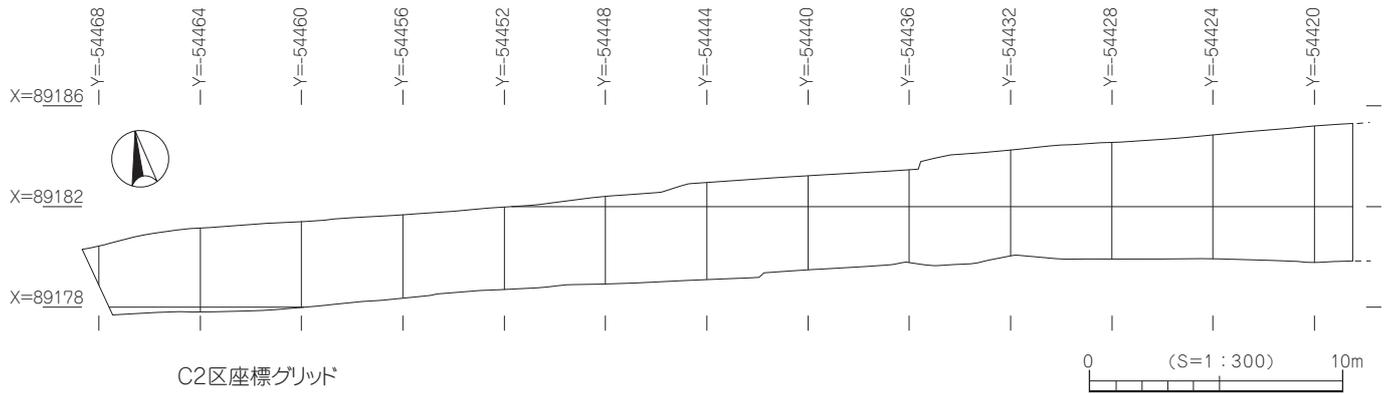


第5図 B区調査区全体図

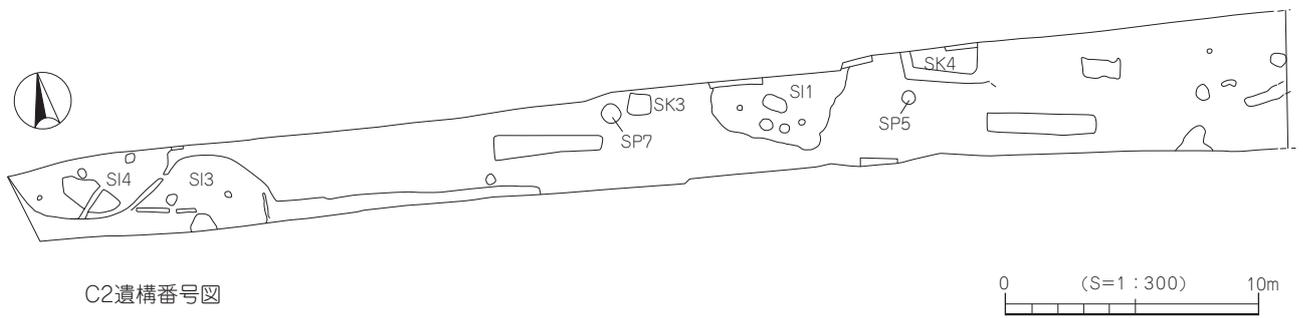


第6図 C1区調査区全体図

調査区の立地

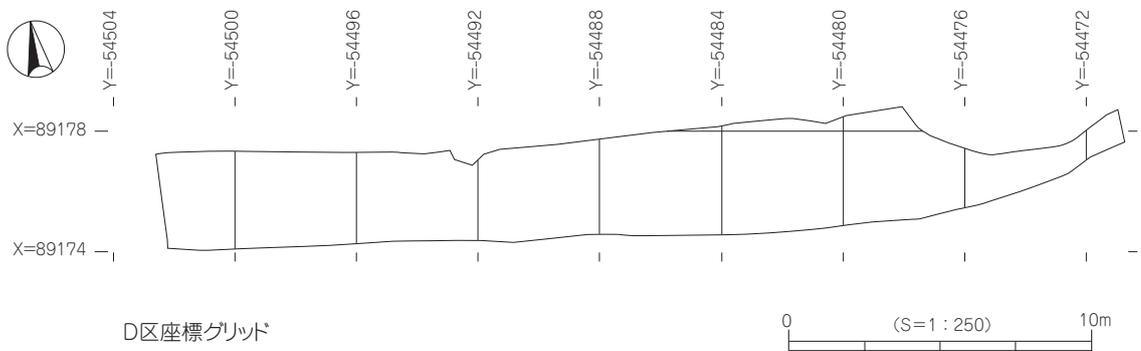


C2区座標グリッド

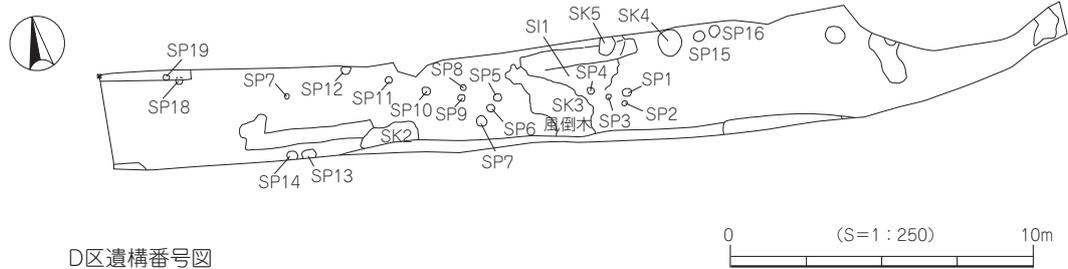


C2遺構番号図

第7図 C2区調査区全体図



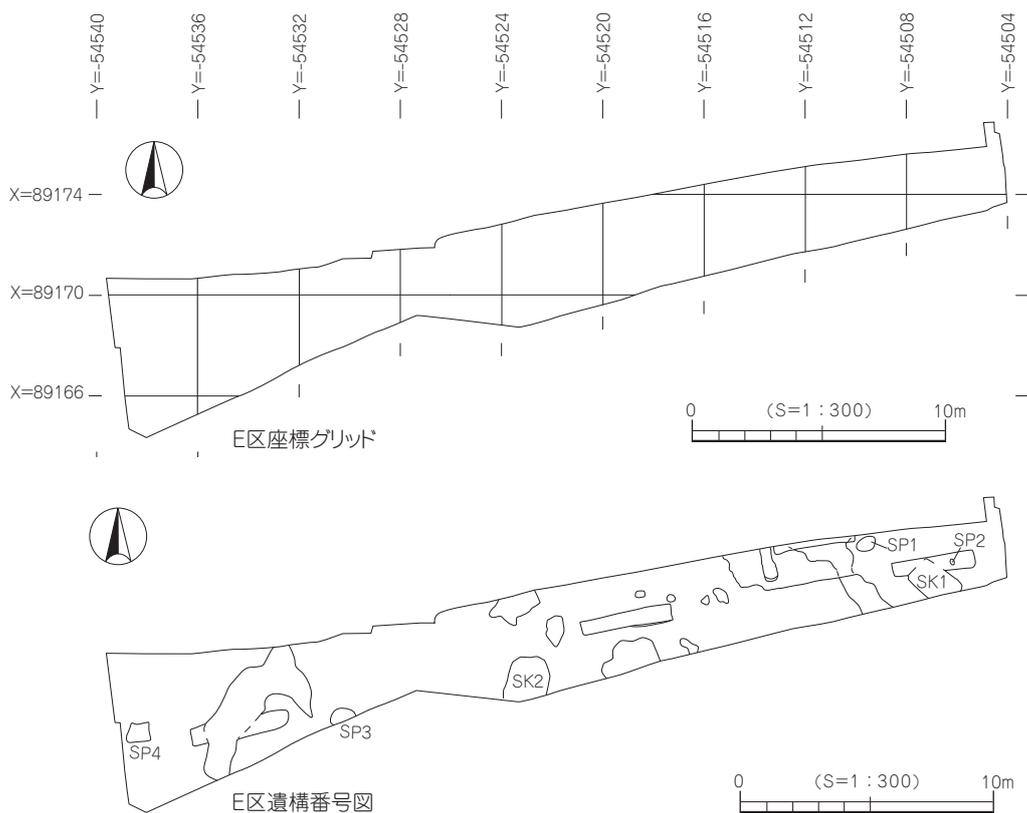
D区座標グリッド



D区遺構番号図

第8図 D区調査区全体図

揚り畑遺跡7次調査



第9図 E区調査区全体図

第2節 層位 (図10～23)

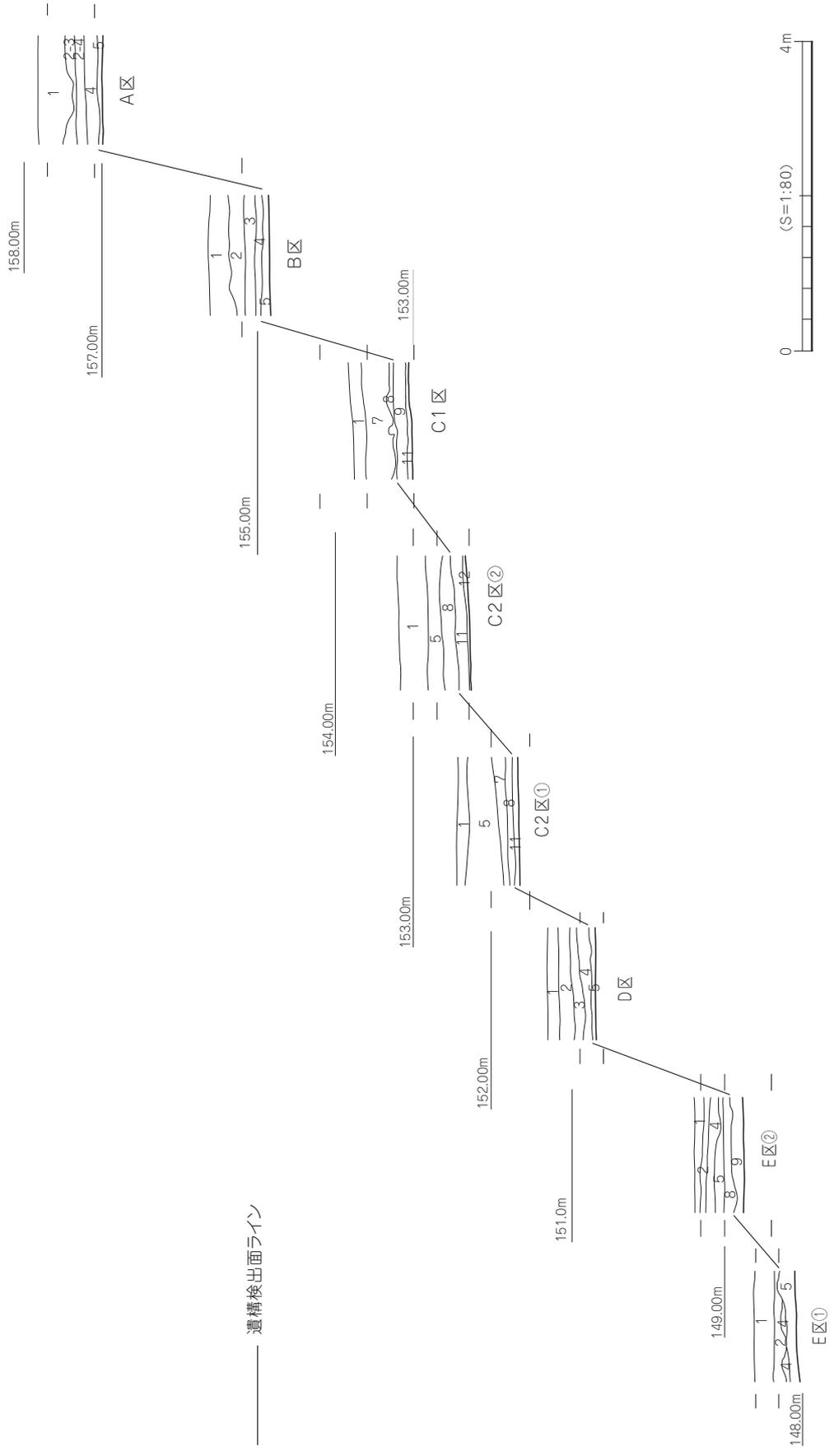
調査区はそのほとんどが畑地や果樹畑として使用されて、南側の南北間約1mは農道となっていた。事前に実施した試掘調査の結果、農道から南側の工事予定範囲では削平による影響が著しく、遺跡は確認されていない。本調査区は東西間で約220mの距離があることから、調査区東部と西部では約10mの標高差が生じている。調査区の間にあたるC1区からC2区にかけては東から西へかけて緩やかに標高は下がっているが、A区からC1区、D区からE区間は地形的に急激に下がっている。

基本的な層位は調査区の範囲が幅広いため、各地区の土層に差異があるが基本的な層位は耕作土、造成土、遺物包含層（黒色シルト層）、遺構検出面（赤色シルト層）、地山（和泉砂岩層）となっている。調査区全体でみられる造成土は、畑地を形成する際ならかな丘陵地を削り生じた土を使用している。このため、各調査区東側に比べ西側の造成土が厚くなる。また、各調査区の遺物包含層および遺構検出面も耕作や造成の影響を受けていた。

各調査区の層位については、測量図の一部を柱状化したものが第10図で、土層測量図全体は第4図～第23図に掲載している。

A区: 本調査区は調査地の東に位置し3筆の畑地及び果樹畑からなる。遺物包含層は第4層、遺構検出面は第5層である。これより上層の第1層から第3層は、耕作土や畑地を形成する際に行われた造成によるものである。調査区西側部分及び中央部付近では約25cm程度の安定した遺物包含層の堆積を確認したが、果樹畑として使用されていた西側部や東側部では遺物包含層は堆

層位



第10図 各調査区の土層柱状図

積が薄く確認できない箇所もあった。これらは、造成に伴う削平や耕作等による影響を受けたことによるものである。遺構検出面は全体的に確認されており、調査区東西間の標高差は約2mと地形的に西に向けなだらかに下がっていることを確認した。

B区： 本調査区は調査地の東に位置し4筆の畑地及び栗畑からなる。A区と同様に遺物包含層は第4層、遺構検出面は第5層である。第1層から第3層は耕作土や畑地を形成する際に行われた造成によるものであるが、調査区の西側部分はそれらの厚さが増している。遺物包含層は調査区の東部では認められないが、調査区中央部から西側にかけて約20cmの遺物包含層の堆積が確認できた。

遺構検出面も調査区東部の一部で削平や耕作による影響が見られたが、それ以外は安定した状況である。調査区東西間の標高差は約1.5mと地形的に西に向けなだらかに下がっているが、調査区中央部からやや西側にて地形が急に落ち込む箇所が認められた。なお、調査区西端部では以前の畑地形成時に積まれた石積みを確認した。土層から遺物包含層は石積み西側で消滅している。なお、土層西側部は調査区拡張後に測量したため、C1土層東側部とは一致しない。

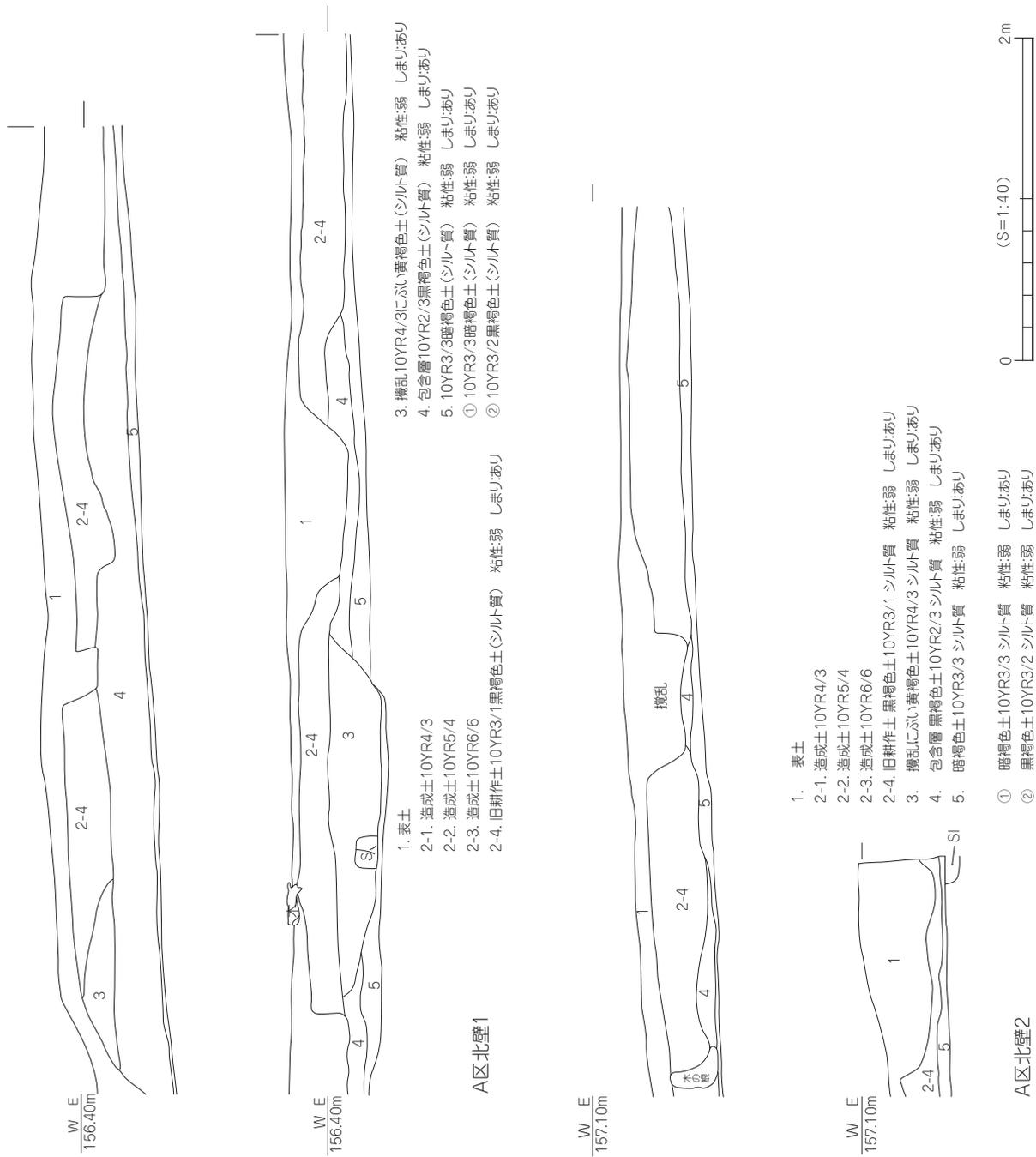
C1区： 本調査区は調査区のほぼ中央に位置し3筆の畑地からなる。本調査区東側にあたるB区と比較すると一段低く、平坦な地形となっている。第1層から第7層は耕作土や造成土である。遺物包含層は第8層、遺構検出面は第9層である。検出された第11層は土色が異なるため第9層と分層しているが、土質等から第9層と同様のものと判断した。本調査区の遺物包含層は、中央部においては部分的に西側部でわずかに堆積しているのが確認されるが、東側部分では遺物包含層を確認することはできない。土層状況から東部では大規模な削平が行われたことによりその影響が遺構検出面にまで及んだことが確認できる。

C2区： C1区西側に位置する調査区で2筆の栗畑及び果樹畑からなる。本調査区東側のC1区と同様で、第1層から第7層までが耕作土及び造成土、遺物包含層が第8層、遺構検出面が第9層、第11層となる。調査区西側部では1mを超える造成が行われているが遺物包含層の残りは悪く、約15cm程度の厚さで調査区西側から中央部にかけての範囲のみ残る程度である。

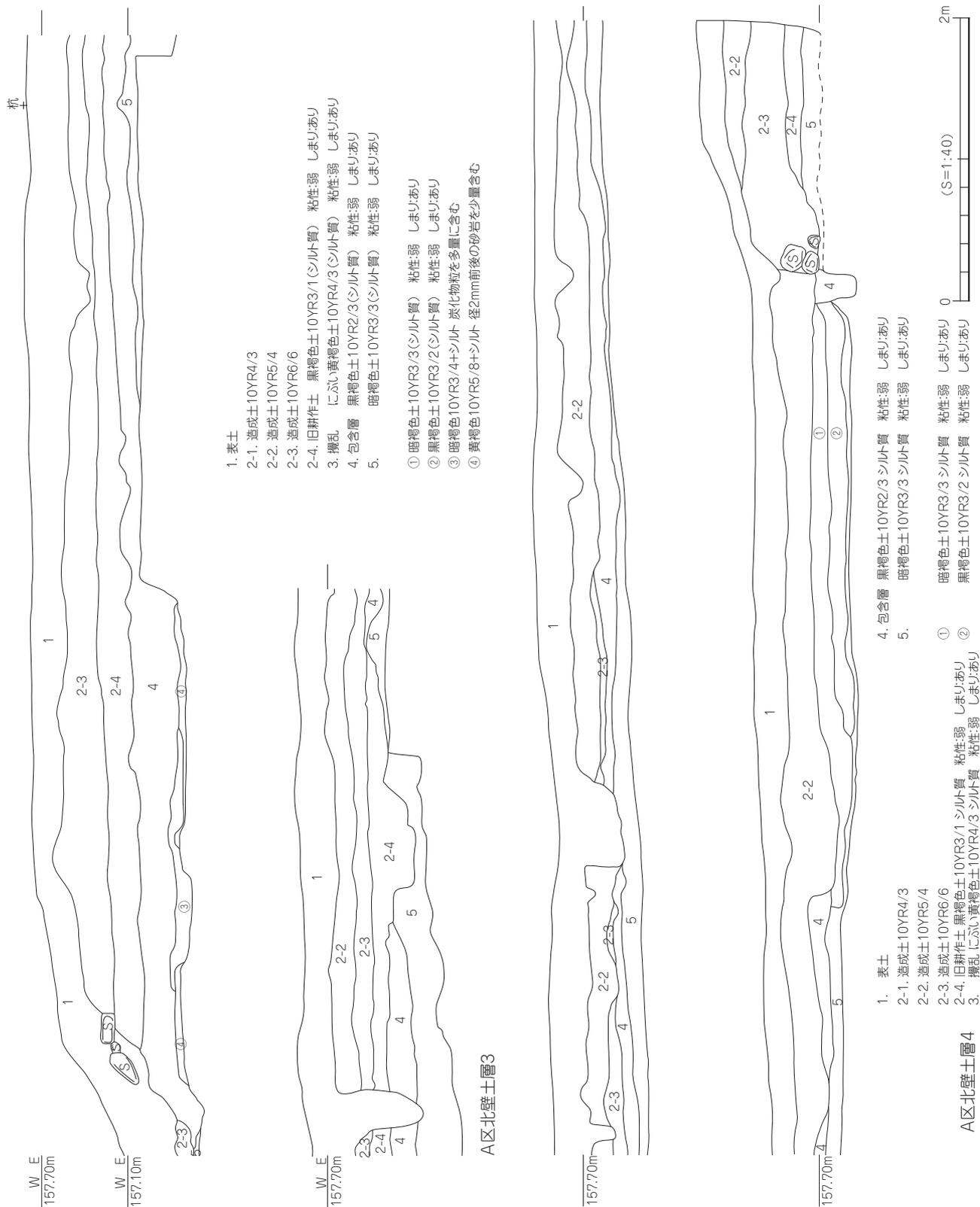
D区： C2区の西側に位置する調査区で2筆の果樹畑及び畑地からなる。第1層から第3層までが耕作土及び造成土、遺物包含層が第4層、遺構検出面が第5層となる。遺物包含層は調査区全体的に約15cm程度の厚さで堆積しているが、調査区西側は削平により消失している。また、中央部は後世の攪乱等により消失している。

E区： 本調査の最西部に位置する調査区で、調査区東側は2筆の畑地からなる。第1層から第7層までが耕作土及び造成土、遺物包含層が第8層、遺構検出面が第9層となる。調査区西側部分には遺物包含層はほとんど確認することができず、中央部付近に約15cm程度の堆積が確認できるのみである。なお、調査区西部から中央部にて掘り込みの跡を確認したが、土層状況から遺跡が形成される以前の風倒木跡であることを確認した。

調査西部は1筆の水田からなる。調査区西側のE1区とは境界である石垣を隔て一段下がる。第1層から第3層までが耕作土及び造成土、第3層が遺物包含層、第5層が遺構検出面となる。遺物包含層は耕作や造成の影響により調査区西側でわずかに確認できるのみで、中央部から西側部にかけてはそれらの影響が遺構検出面にまで及んでいることが確認された。また、調査区西側から約1.5m付近にて第4層及び第5層が急激に落ち込んでいる。この落ち込みは揚り畑遺跡が立地する丘陵の端にあたると思われる。

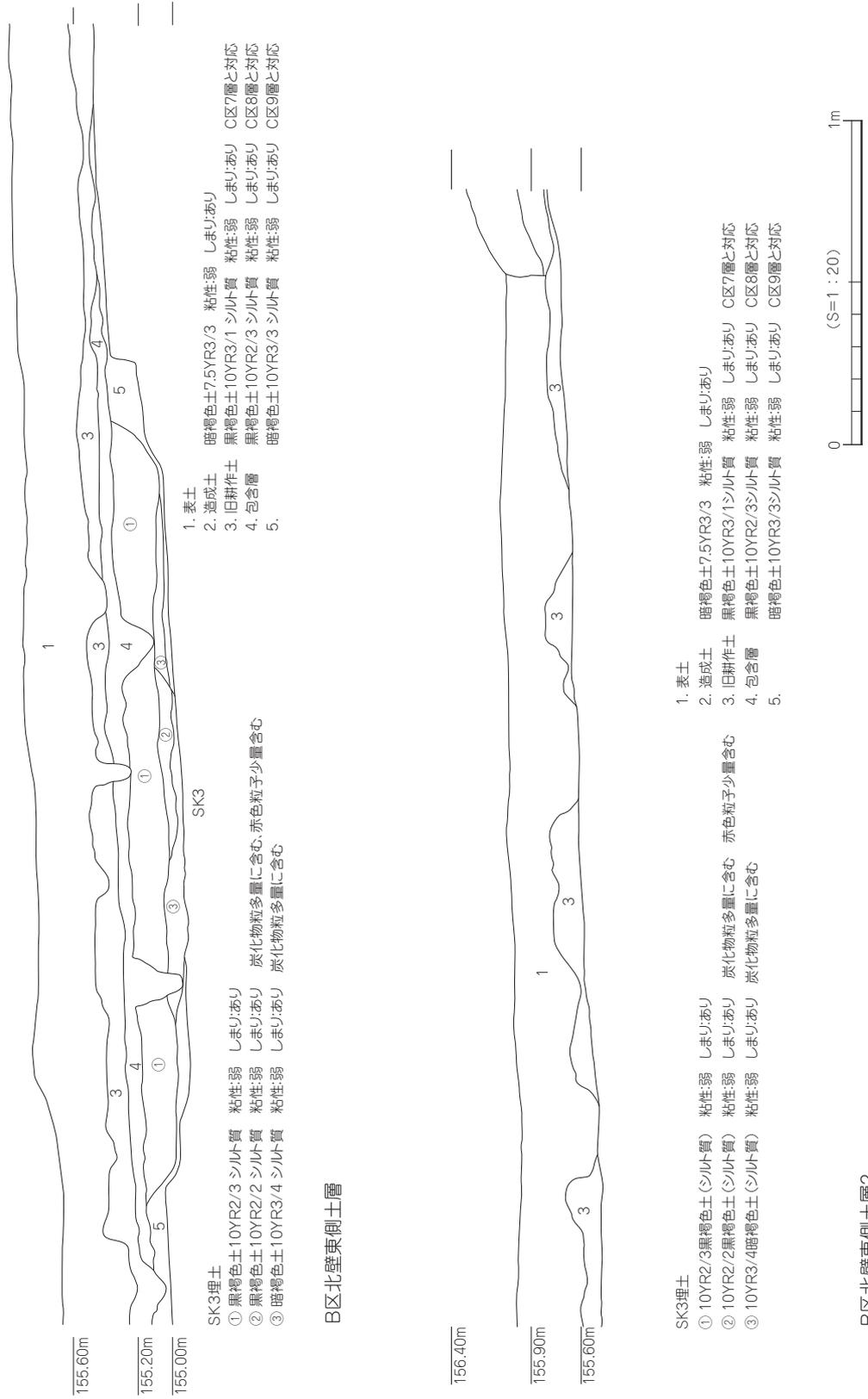


第11図 A区北壁土層測量図1

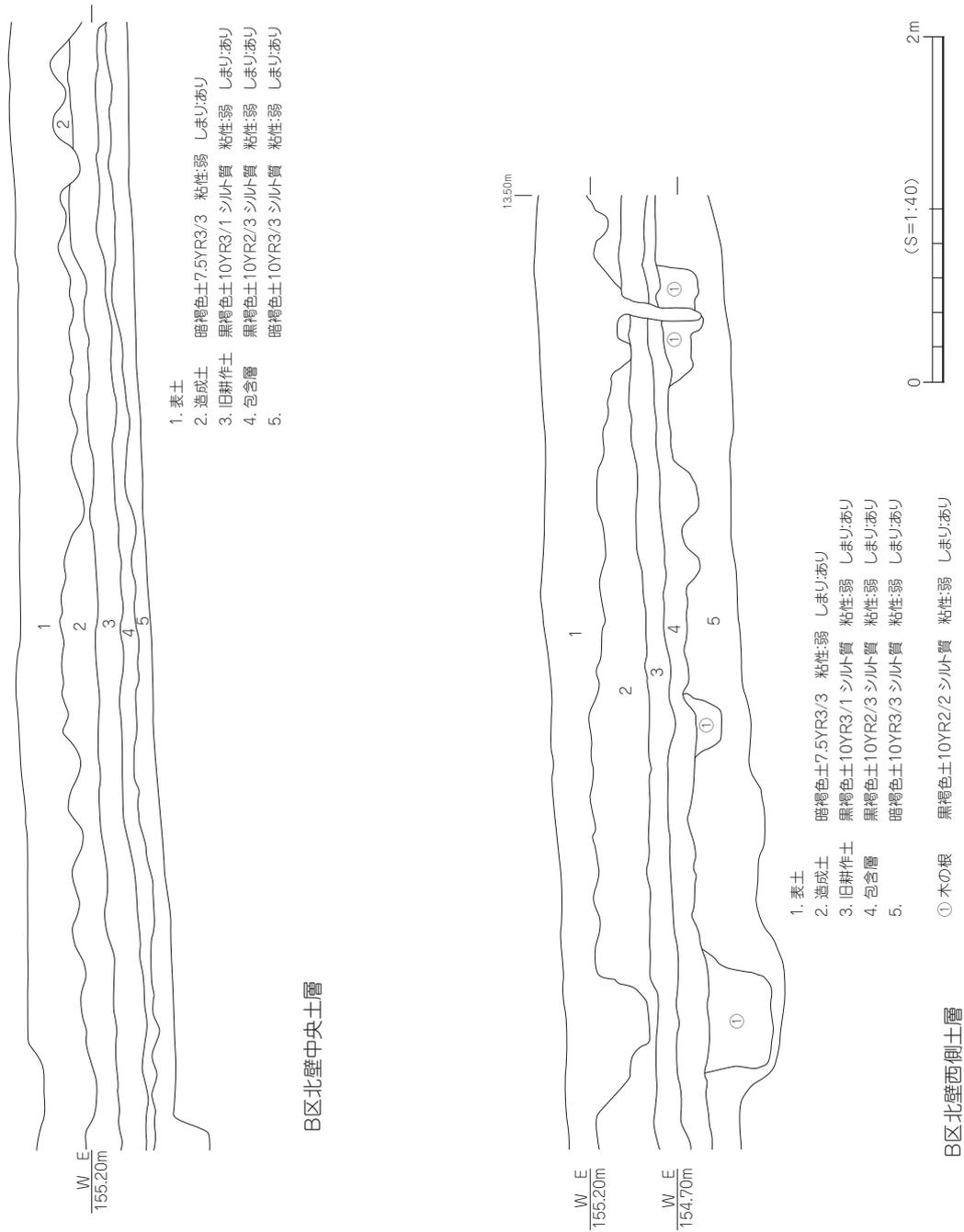


第12図 A区北壁土層測量図2

層位

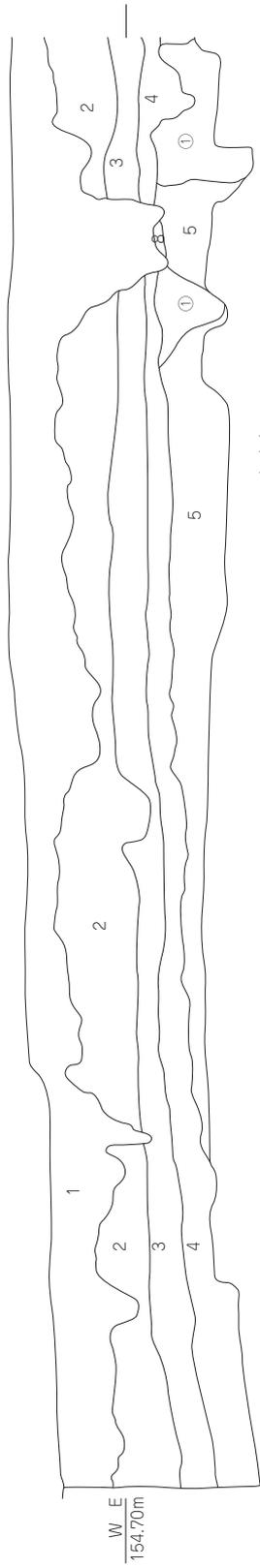


第13図 B区北壁土層測圖図1



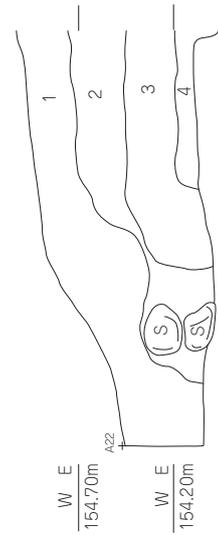
第14図 B区北壁土層測量図2

層位



- 1. 表土
- 2. 造成土7.5YR3/3暗褐色土 粘性:弱 しまり:あり
- 3. 旧耕作土10YR3/1黒褐色土(シルト質) 粘性:弱 しまり:あり
- 4. 包合層10YR2/3黒褐色土(シルト質) 粘性:弱 しまり:あり
- 5. 10YR3/3暗褐色土(シルト質) 粘性:弱 しまり:あり
- ① 木の根10YR2/2黒褐色土(シルト質) 粘性:弱 しまり:あり

B区北壁土層1

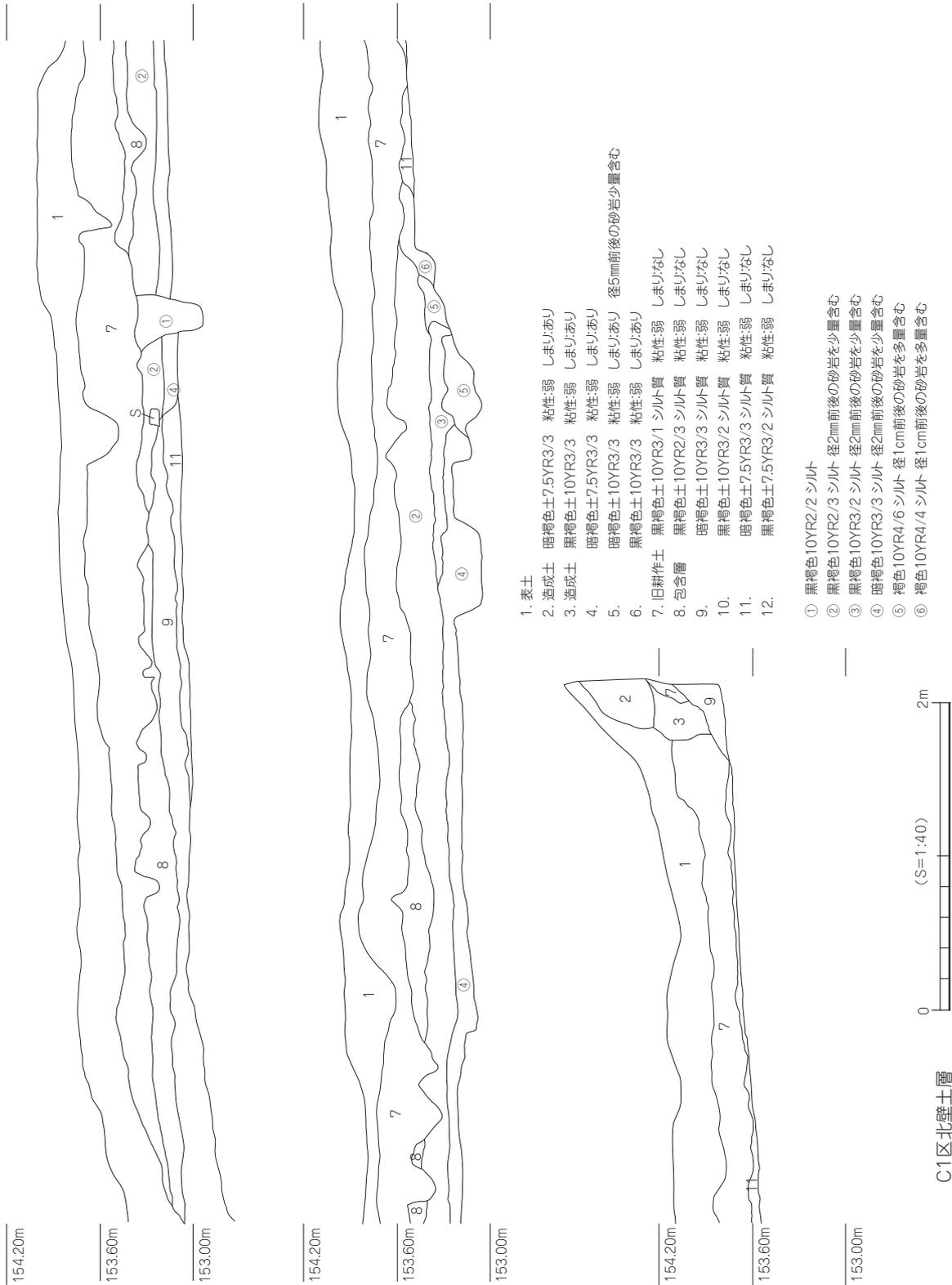


- 1. 表土
- 2. 造成土 暗褐色土7.5YR3/3 粘性:弱 しまり:あり
- 3. 旧耕作土 黒褐色土10YR3/1 シルト質 粘性:弱 しまり:あり
- 4. 包合層 黒褐色土10YR2/3 シルト質 粘性:弱 しまり:あり
- 5. 暗褐色土10YR3/3 シルト質 粘性:弱 しまり:あり
- ① 木の根 黒褐色土10YR2/2 シルト質 粘性:弱 しまり:あり

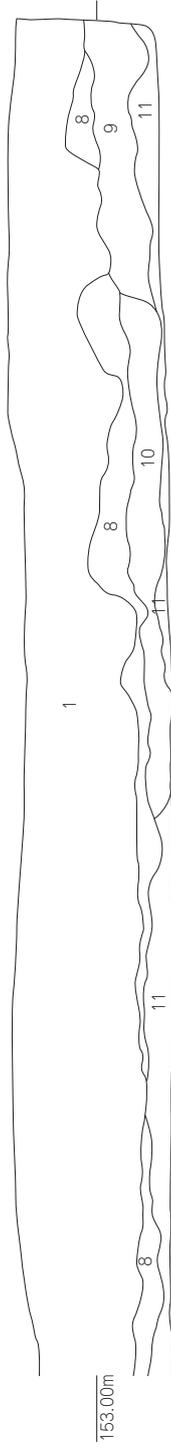
B区北壁西側土層3



第15図 B区北壁土層測量図3

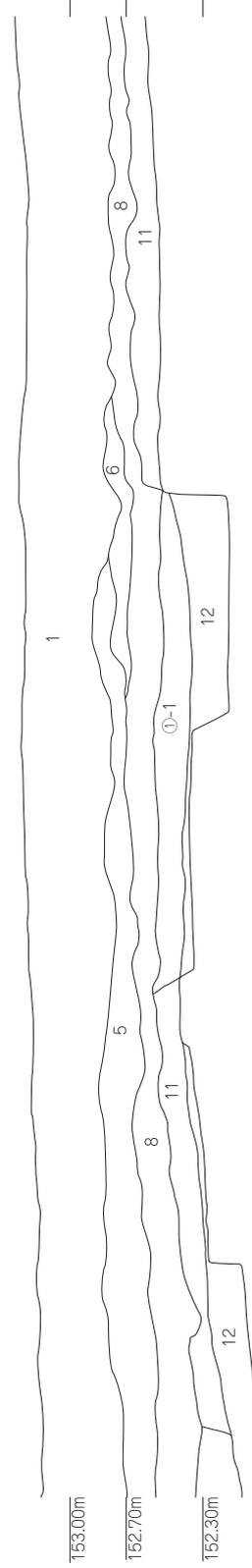


第16図 C1区北壁土層測量図



- | | | |
|---------|-------------------|-------------------------|
| 1. 表土 | 暗褐色土7.5YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 2. 造成土 | 暗褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 3. 造成土 | 暗褐色土7.5YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 4. | 暗褐色土7.5YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 5. | 暗褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| | 径5mm前後の砂岩少量含む | |
| 6. | 黒褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 7. 旧耕作土 | 黒褐色土10YR3/1 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 8. 包含層 | 黒褐色土10YR2/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 9. | 暗褐色土10YR3/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 10. | 黒褐色土10YR3/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 11. | 暗褐色土7.5YR3/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 12. | 黒褐色土7.5YR3/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| ①-1 | 黒褐色土10YR2/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| ②-1 | 暗褐色土10YR3/4 粘性弱 | しまりあり |
| ②-2 | 黒褐色土10YR2/3 粘性弱 | しまりなし 木炭片焼土多数含む |
| ②-3 | 黒褐色土10YR2/3 粘性弱 | しまりなし 木炭片焼土多数含む |
| ②-4 | 暗褐色土10YR3/4 シルト質 | 粘性なし しまりなし 径5mm大の砂岩少量含む |
| ②-5 | 黒褐色土10YR2/3 シルト質 | 粘性なし しまりなし |
| ③-1 | 黒褐色土10YR2/2 シルト質 | 粘性なし しまりなし 径2mm大の砂岩少量含む |

C2北壁東側土層2

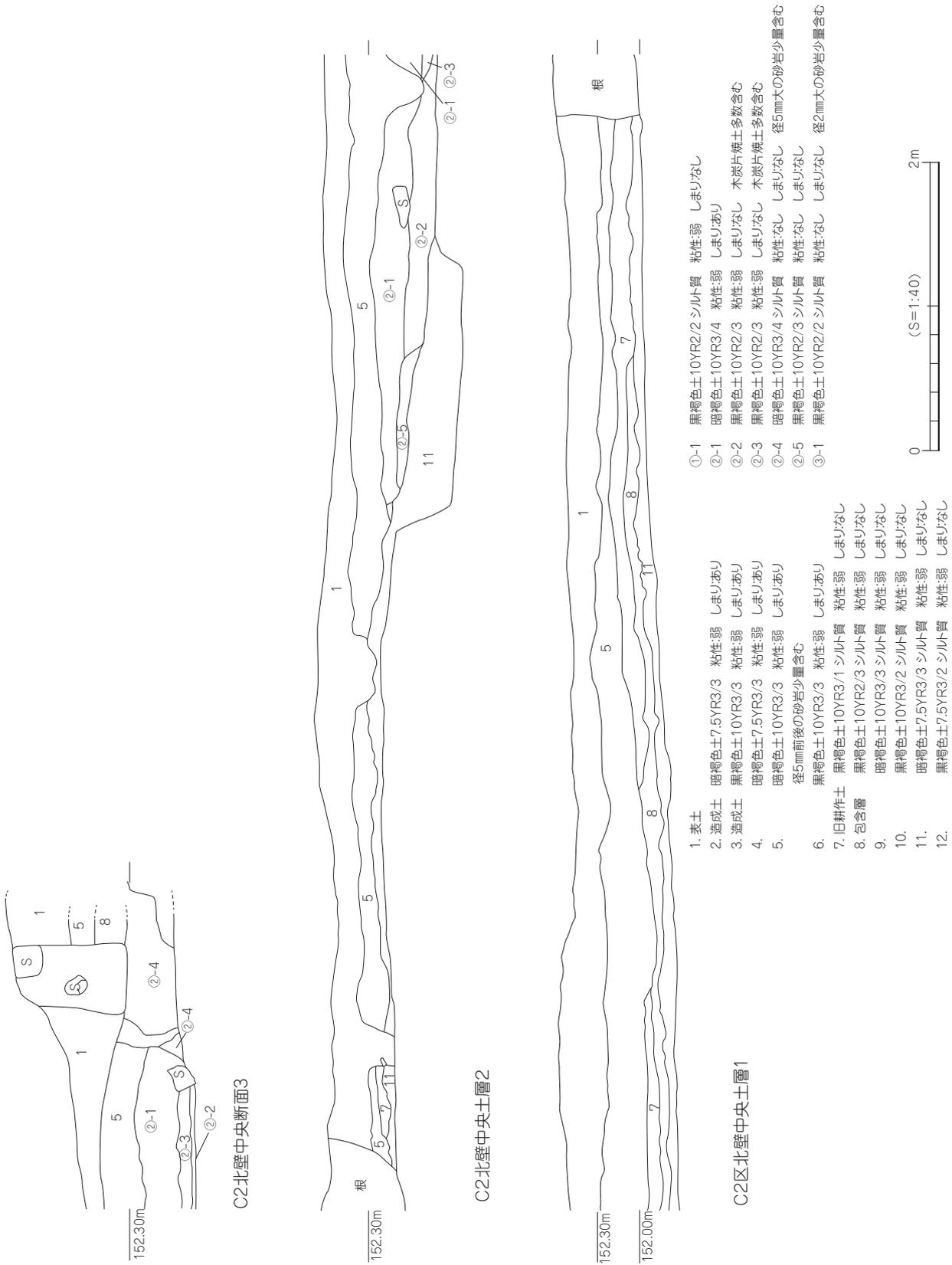


- | | | |
|---------|-------------------|-------------------------|
| 1. 表土 | 暗褐色土7.5YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 2. 造成土 | 暗褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 3. 造成土 | 暗褐色土7.5YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 4. | 暗褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 5. | 暗褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| | 径5mm前後の砂岩少量含む | |
| 6. | 黒褐色土10YR3/3 粘性弱 | しまりあり |
| 7. 旧耕作土 | 黒褐色土10YR3/1 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 8. 包含層 | 黒褐色土10YR2/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 9. | 暗褐色土10YR3/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 10. | 黒褐色土10YR3/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 11. | 暗褐色土7.5YR3/3 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| 12. | 黒褐色土7.5YR3/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| ①-1 | 暗褐色土10YR2/2 シルト質 | 粘性弱 しまりなし |
| ②-1 | 暗褐色土10YR3/4 粘性弱 | しまりあり |
| ②-2 | 黒褐色土10YR2/3 粘性弱 | しまりなし 木炭片焼土多数含む |
| ②-3 | 黒褐色土10YR2/3 粘性弱 | しまりなし 木炭片焼土多数含む |
| ②-4 | 暗褐色土10YR3/4 シルト質 | 粘性なし しまりなし 径5mm大の砂岩少量含む |
| ②-5 | 黒褐色土10YR2/3 シルト質 | 粘性なし しまりなし |
| ③-1 | 黒褐色土10YR2/2 シルト質 | 粘性なし しまりなし 径2mm大の砂岩少量含む |

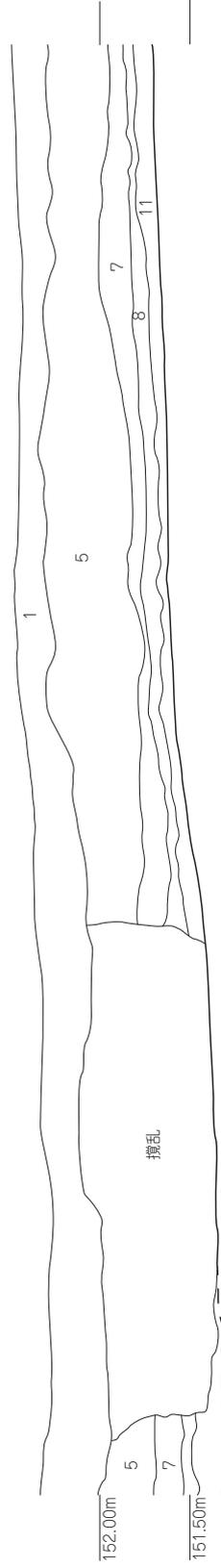
C2北壁東側土層



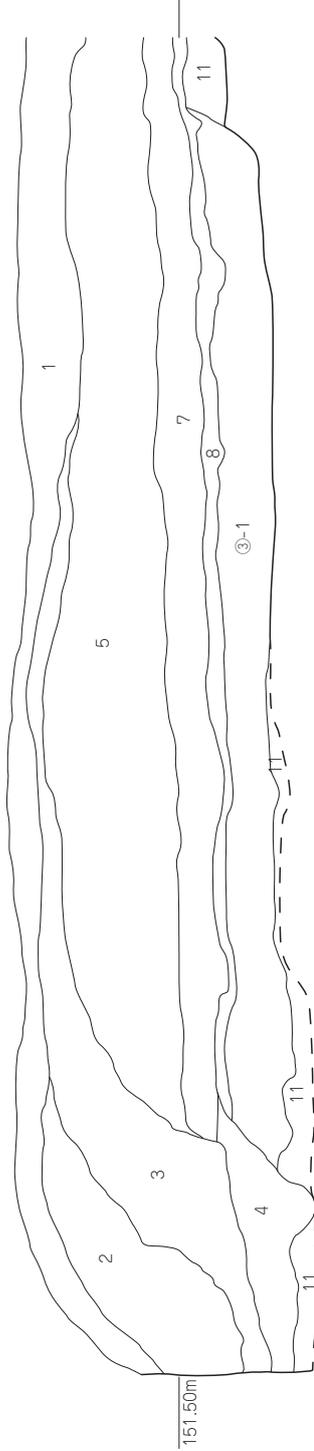
第17図 C2区北壁土層測圖1



第18図 C2区北壁土層測圖図2



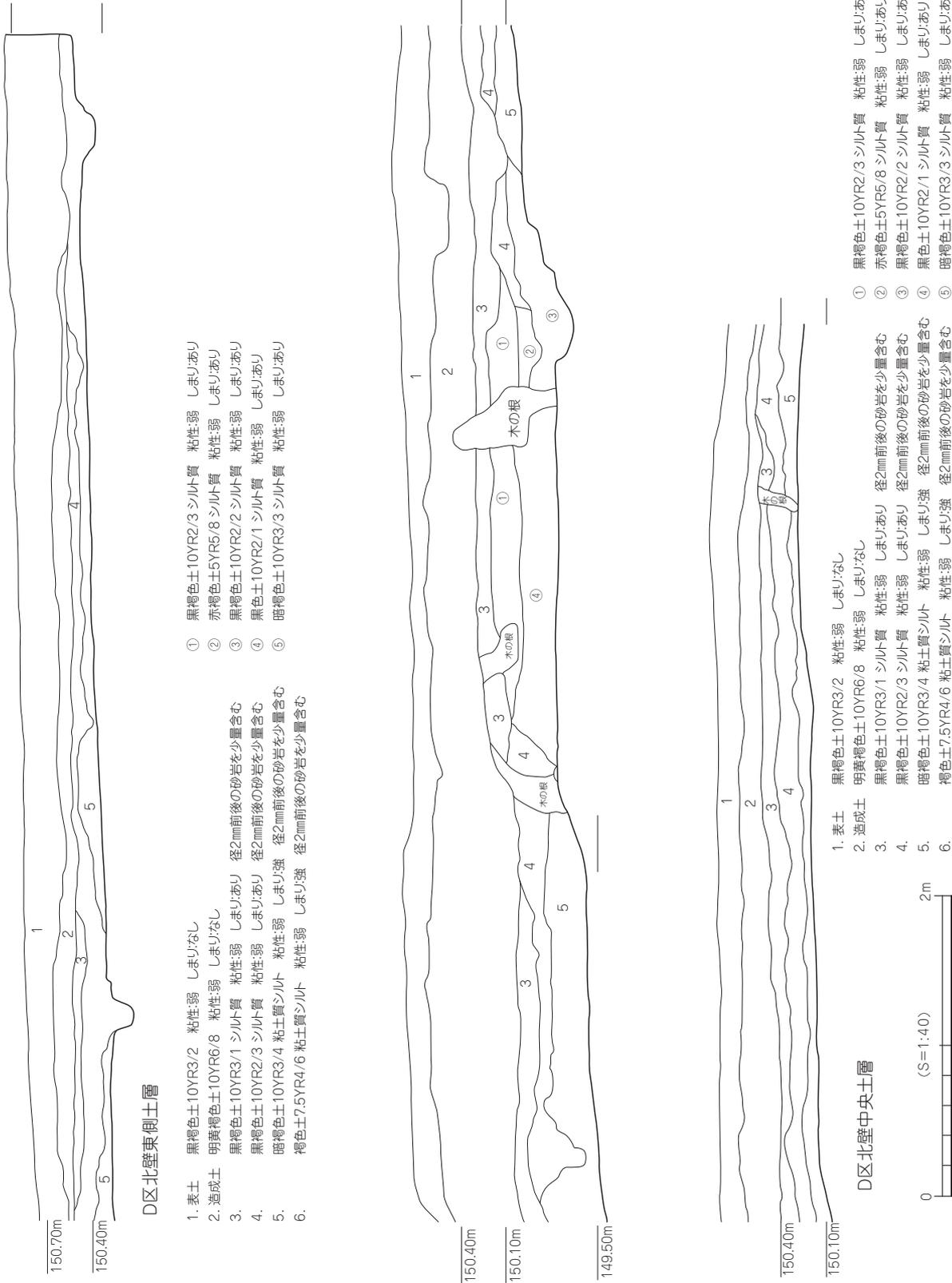
C2北壁西側土層



C2北壁西側土層

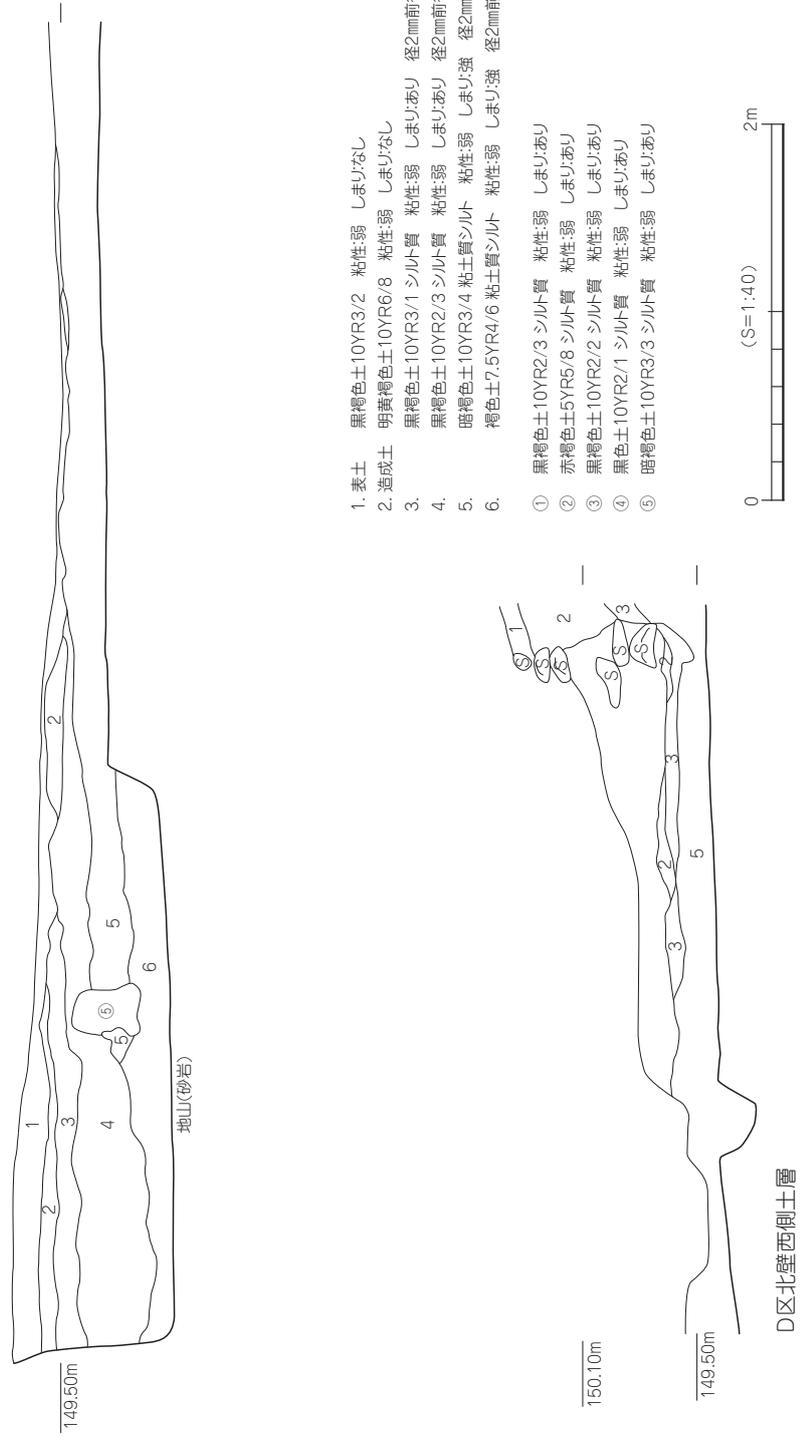
- | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---------------|-----|-------|--------|--------------|------|-----|-------|-----|-------------|------|-------|-----------|--------------|
| 1. 表土 | 暗褐色土7.5YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | 7.旧耕作土 | 黒褐色土10YR3/1 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ①-1 | 黒褐色土10YR2/2 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | |
| 2. 造成土 | 暗褐色土7.5YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | 8. 包含層 | 黒褐色土10YR2/3 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ②-1 | 暗褐色土10YR3/4 | 粘性弱 | しまりあり | | |
| 3. 造成土 | 黒褐色土10YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | 9. | 暗褐色土10YR3/3 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ②-2 | 黒褐色土10YR2/3 | 粘性弱 | しまりなし | 本炭片焼土多数含む | |
| 4. | 暗褐色土7.5YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | 10. | 黒褐色土10YR3/2 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ②-3 | 暗褐色土10YR2/3 | 粘性弱 | しまりなし | 木炭片焼土多数含む | |
| 5. | 暗褐色土10YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | 11. | 暗褐色土7.5YR3/3 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ②-4 | 暗褐色土10YR3/4 | シルト質 | 粘性なし | しまりなし | 径5mm大の砂岩少量含む |
| 6. | 径5mm前後の砂岩少量含む | | | 12. | 黒褐色土7.5YR3/2 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ②-5 | 黒褐色土10YR2/3 | シルト質 | 粘性なし | しまりなし | |
| | 黒褐色土10YR3/3 | 粘性弱 | しまりあり | | 黒褐色土7.5YR3/2 | シルト質 | 粘性弱 | しまりなし | ③-1 | 黒褐色土10YR2/2 | シルト質 | 粘性なし | しまりなし | 径2mm大の砂岩少量含む |

第19図 C2区北壁土層測量図3

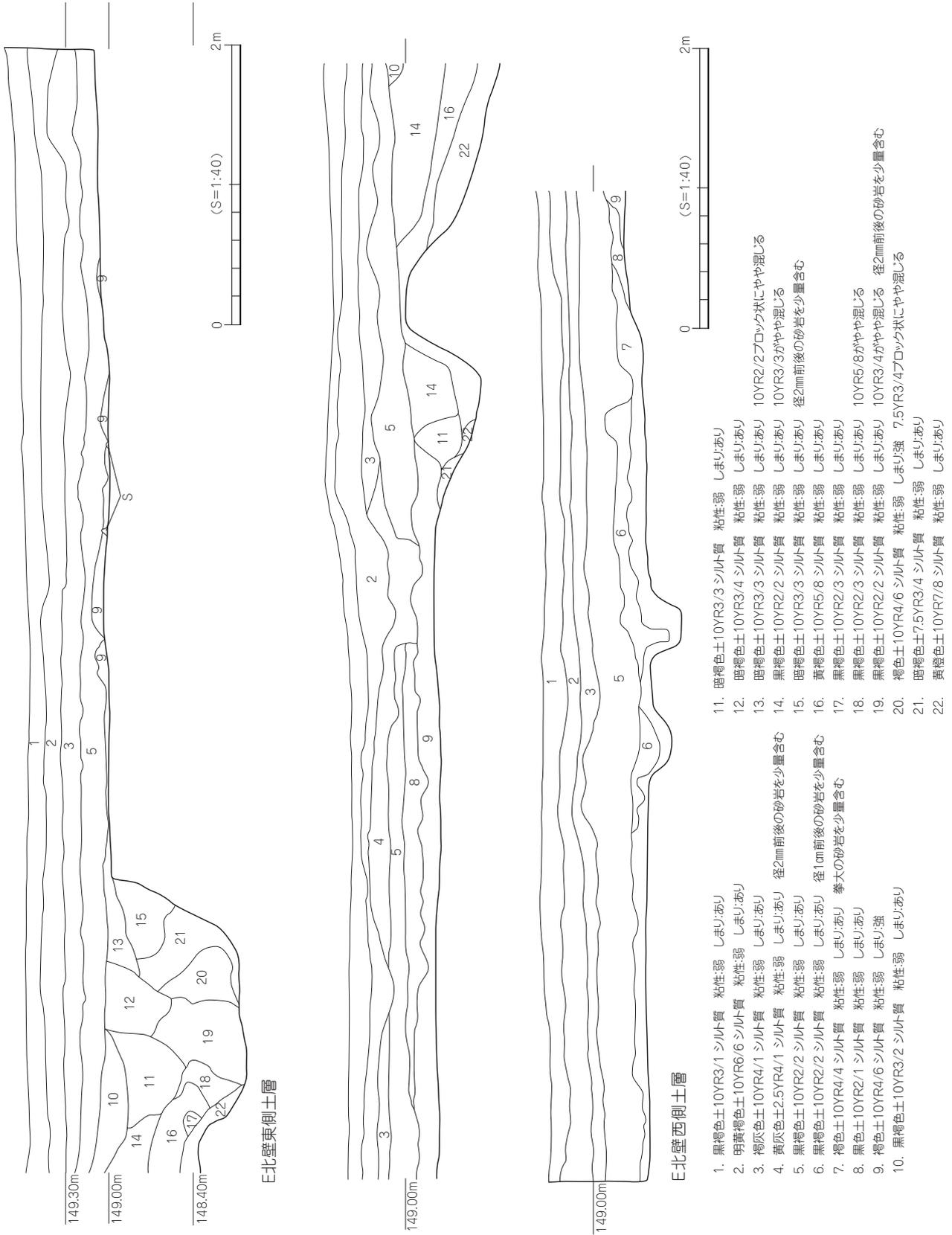


第20図 D区北壁土層測量図1

層位

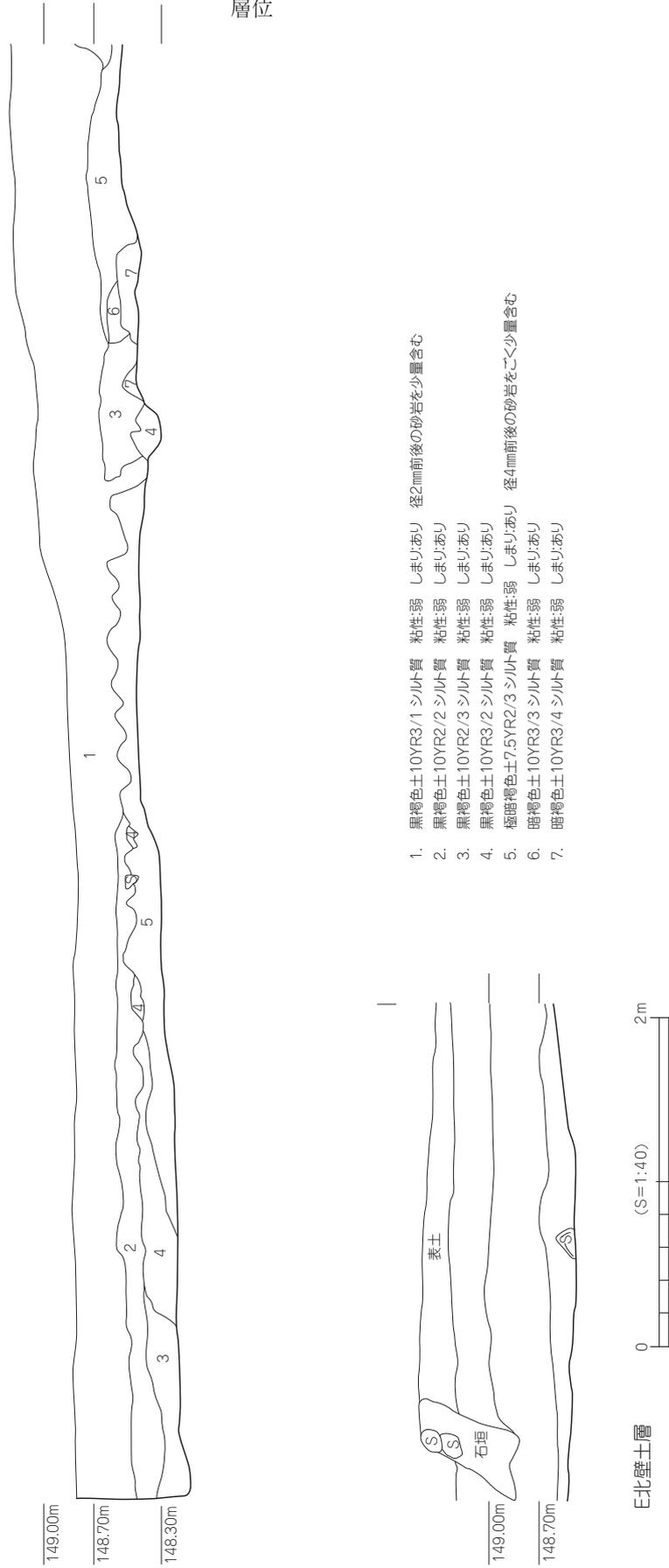


第21図 D区北壁土層測量図2



第22図 E区北壁土層測量図1

層位

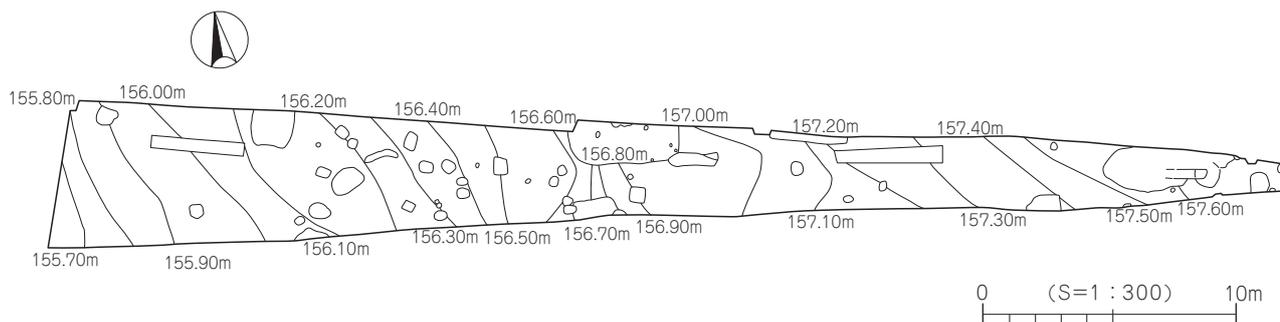


第23図 E区北壁土層測量図2

第3節 A区調査区

1 調査区の概要

本調査区は7次調査区域の東端部に位置する。調査区の範囲は東西約47m、調査区東側の標高が約157m、調査区西側の標高が約155mとなる。



第24図 A区コンタ図

2 遺構と遺物について

調査区全域において耕作による影響が遺構まで及んでいたが、調査区中央付近にて弥生時代後期後葉の竪穴住居や弥生時代中期後葉の掘立柱建物を検出している。また、SK5からは弥生時代中期後葉の土器片と共に分銅形土製品が出土している。遺構番号のSK1は欠番である。

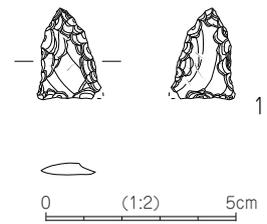
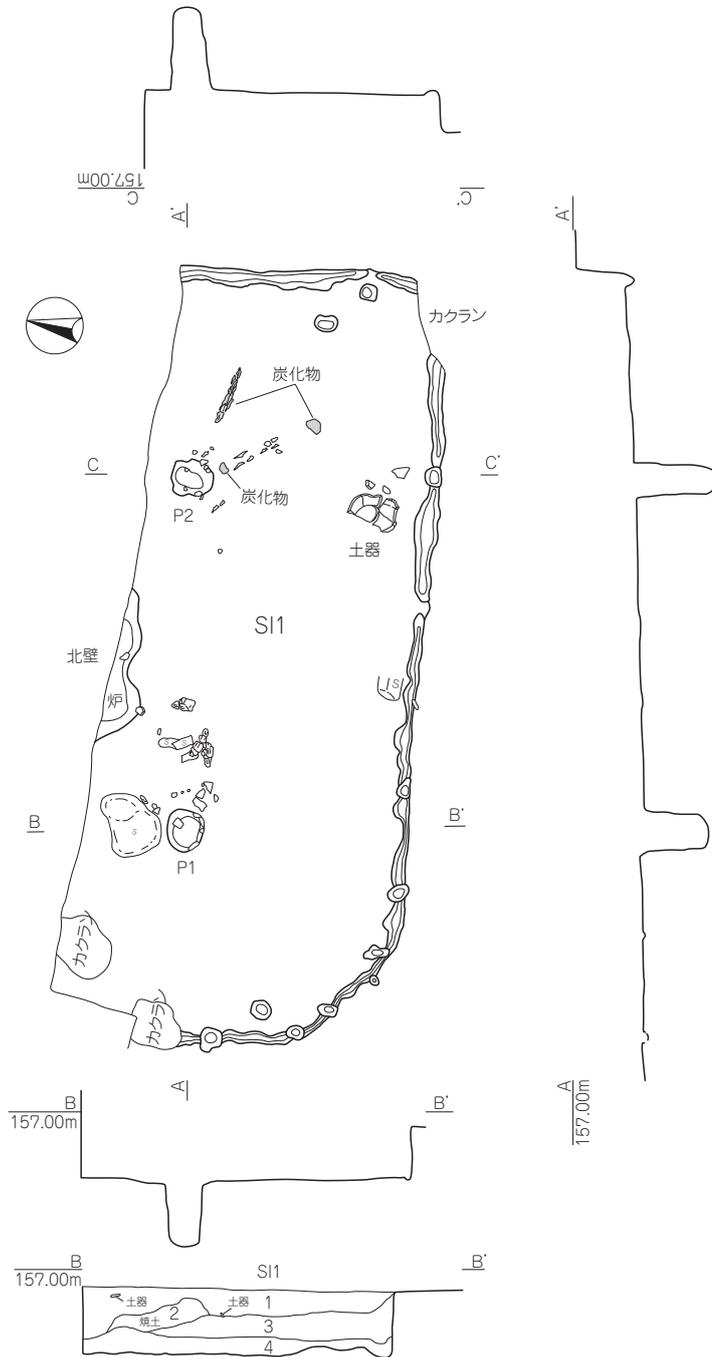
(1) S11 (図25、図版2)

調査区中央の北側に位置している。調査区の関係から南側部分のみの検出となった。遺構の北西から西側にかけては削平による影響が見られた。遺構の検出規模は東西約4.2m、南北約1.7m、壁高は東側約30cm、西側約6cmを測る。平面形は隅丸方形と考えられる。内部からは柱穴2基、炉1基、周壁溝を検出した。柱穴はP1が直径約22cm、深さ約35cm、P2が直径約22cm、深さ約42cmを測る。炉は柱穴2基のほぼ中央に位置しており、調査区の関係から南側の一部分のみの検出となった。炉の検出部分は東西約84cm、南北約21cm、掘り込みの深さは約5～6cmを測る。平面形は検出部分が一部であるため不明である。埋土は上層より第1層黒褐色10YR2/3シルト径2mm前後の砂岩を少量含む。第2層明赤褐色5YR5/8シルトで炭化物粒を少量含む。第3層暗褐色10YR3/4シルトに黄褐色10YR5/8ブロックを少量含む、径2mm前後の砂岩を少量含む。第4層黄褐色10YR5/8シルト、径2mm前後の砂岩を少量含む。埋土からは焼土及びカーボン片を多数検出している。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。また、遺構東側の床面で見つかった木炭片を放射性炭素年代による化学分析を行った。結果、樹種はハイノキ科の植物であり、補正年代で $1,980 \pm 20BP$ という結果を得ている。

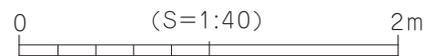
S11出土遺物 (図26、図版31)

遺構内部からは少数の弥生時代後期後葉の弥生土器片が出土したが、図化できるものはなかった。1はサヌカイト製の平基式石鏃である。一部欠損するがほぼ完形品である。



第26図 SI1出土遺物実測図

1. 黒褐色10YR2/3 シルト 径2mm前後の砂岩を少量含む
2. 明赤褐色5YR5/8 シルト 炭化物粒を少量含む
3. 暗褐色10YR3/4 シルト 10YR5/8黄褐色ブロックを少量含む、径2mm前後の砂岩を少量含む
4. 黄褐色10YR5/8 シルト 径2mm前後の砂岩を少量含む

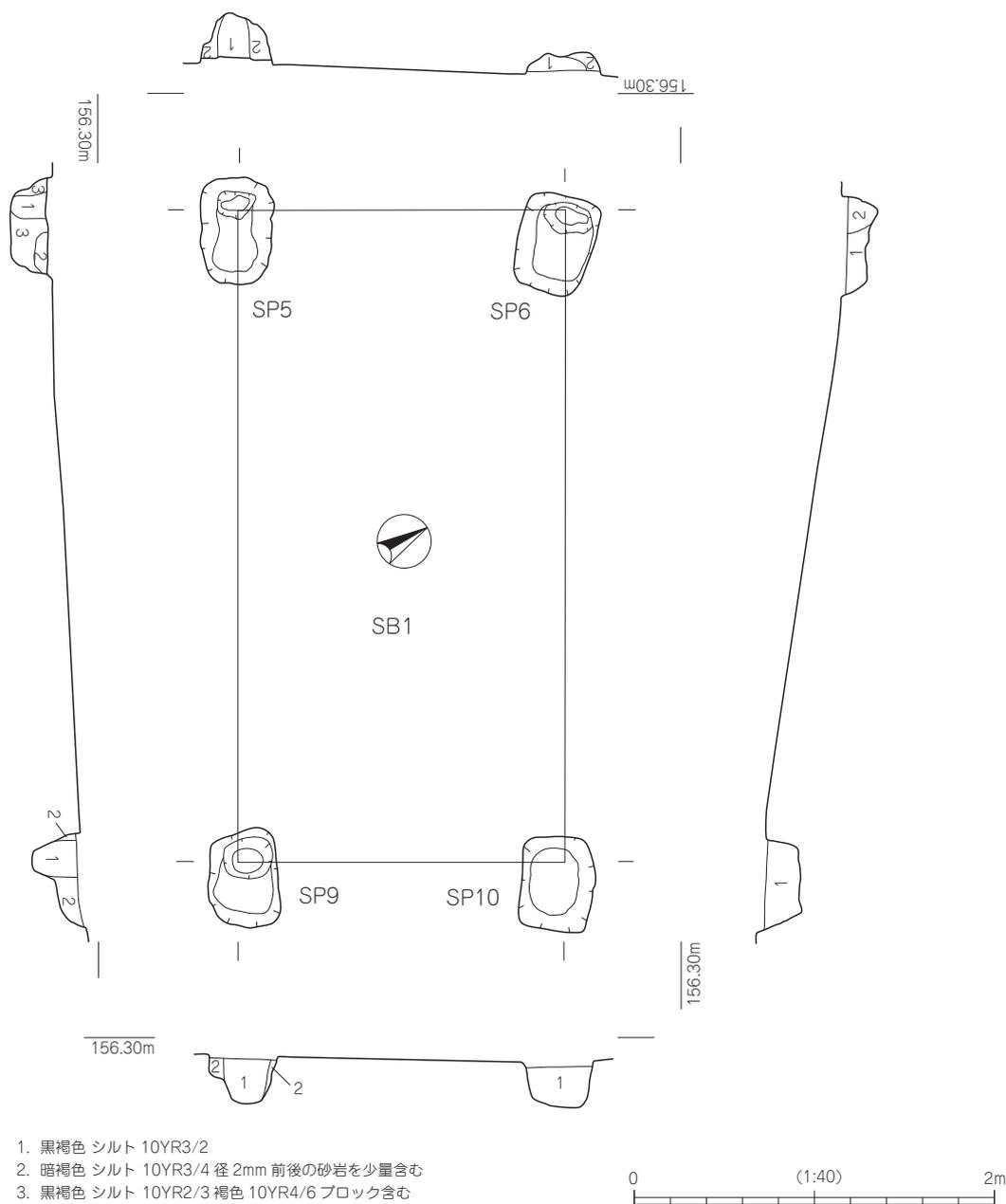


第25図 SI1測量図

(2) SB1 (図27、図版2、5)

調査区中央よりやや東側に位置している。建物は北西-南東方向で4基の柱穴で構成されている。規模は桁行1間×梁行1間で、桁行約3.7m、梁行約2.7mを測る。柱穴の規模は長軸約54cm～約60cm、短軸約40cm～43cm、深さは約14cm～約29cmを測る。平面形は4基とも隅丸方形である。柱穴の埋土は第1層黒褐色10YR3/2シルト、第2層暗褐色10YR3/4シルト、径2mm前後の砂岩を少量含む。第3層黒褐色10YR2/3シルト、褐色10YR4/6ブロックを含む。SP10及びSP9の埋土から弥生土器片が出土したが、いずれも図化できるものはなかった。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

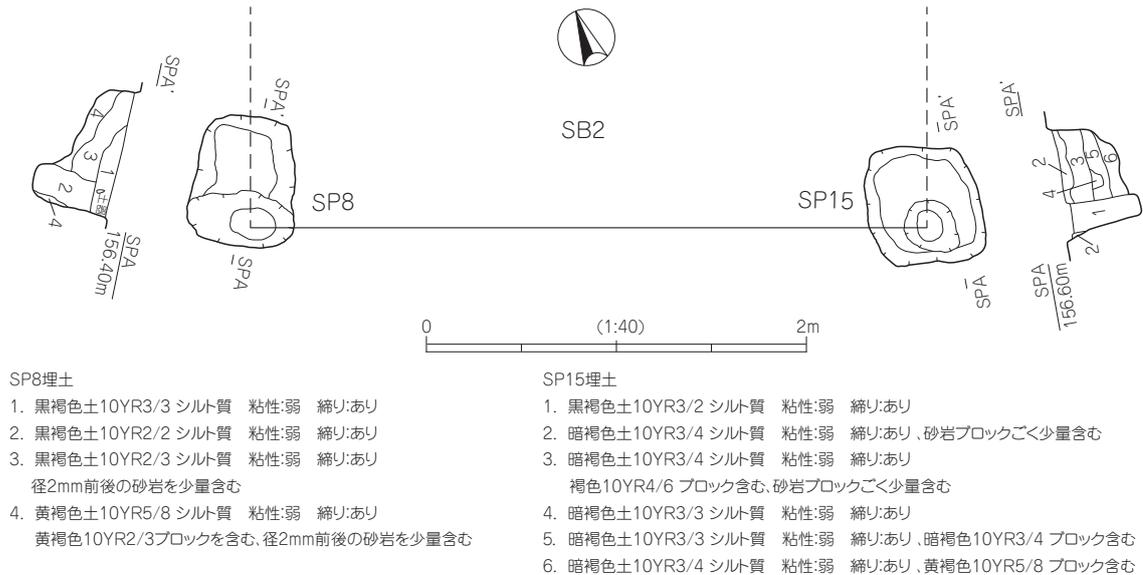


第27図 SB1測量図

(3) SB2 (図28)

調査区中央よりやや西側、SB1の北東に位置している。調査区の関係で柱穴2基、1間のみの検出となった。柱間は約3.6mを測る。柱穴の規模は長軸約67cm～約70cm、短軸約57cm～61cm、深さは約42cmを測る。平面形は2基とも隅丸方形となる。

SP8及びSP15の埋土から弥生土器片が出土したが、いずれも図化することはできなかった。遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

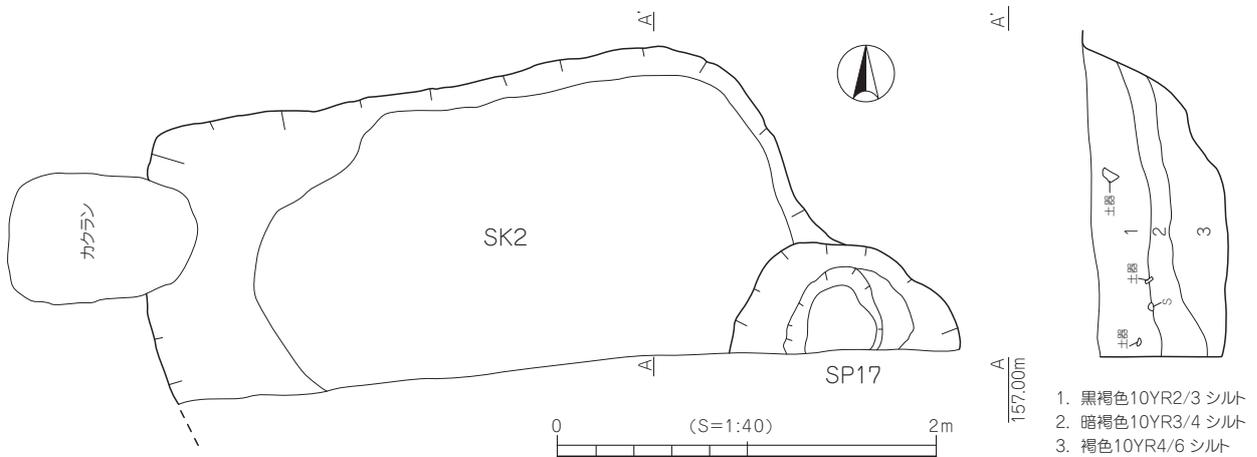


第28図 SB2測量図

(4) SK2 (図29、図版3、4、5)

調査区中央のSI1の南側に位置している。調査区の関係から北側部分のみの検出となった。遺構の検出部分は東西約1.8m、南北約92cm、深さは約38cmを測る。平面形は隅丸方形の可能性が考えられるが詳細は不明である。遺構内部からは1・2層を中心に多数の弥生土器片が出土した。

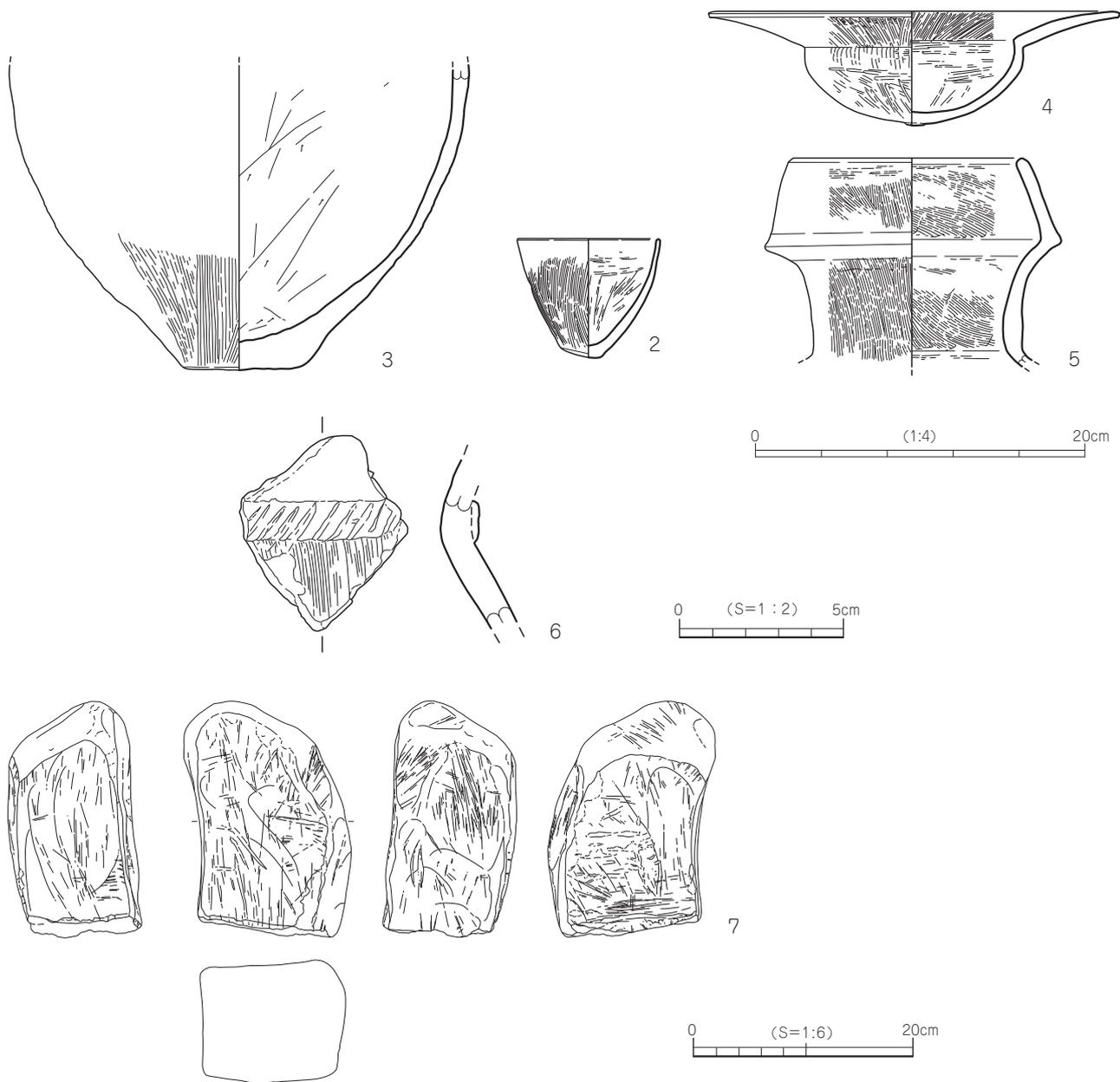
遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。



第29図 SK2測量図

SK 2 出土遺物 (図 30、図版 31、32)

2は小型の鉢形土器である。やや傾斜した底部から立ち上がった薄い体部はやや内湾し口縁は直口する。3は甕形土器である。底部から胴部半までの残存である。突出した厚手の底部から立ち上がり、胴部は張る。4は鉢形土器である。底部は径1cmの円形ボタン状の突起を貼り付ける。半円状の体部から立ち上がり、頸部は外反して口縁部は長く伸びる。内外ともに丁寧な磨きが施される。弥生時代後期後葉。5は壺形土器の複合口縁壺である。頸部から口縁のみの残存である。頸部から垂直に立ち上がり、外反する一次口縁端部から内傾して二次口縁が張り付き外面は無文。弥生時代後期中葉。6は、壺形土器の頸部片である。刻目突帯が貼り付けられる。7は砂岩製の砥石である。側面の4面に摩耗した使用痕が見られ、特に1面のみ深く抉るように使用されている。



第30図 SK 2 出土遺物実測図

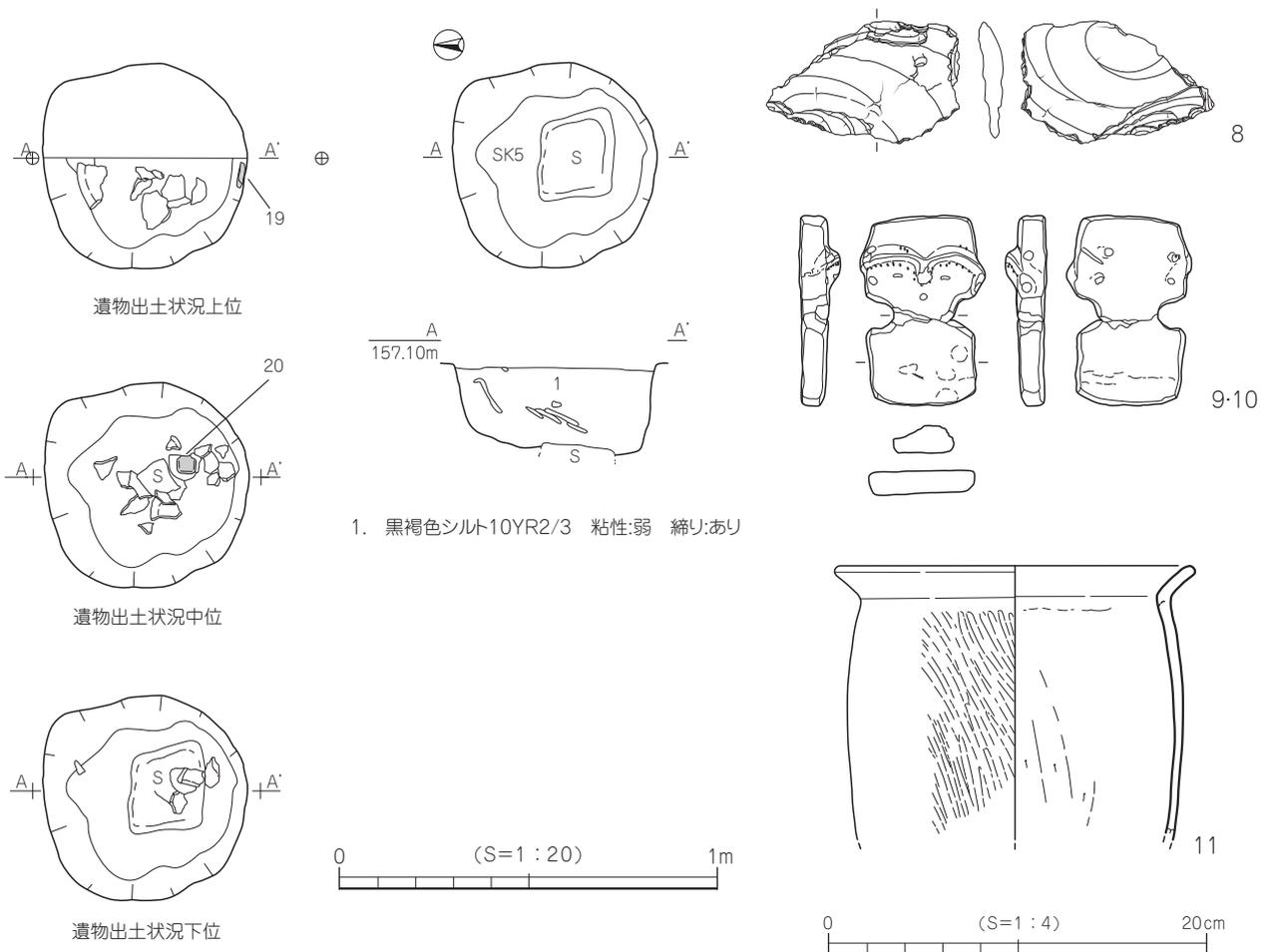
(5) SK5 (図31、図版4)

調査区中央のやや東に位置する。平面形は円形で東西約55cm、南北約54cm、深さ約24cmを測る。平面形はほぼ円形である。遺構内からは甕、緑泥片岩製の二次加工剥片、分銅形土製品が出土している。分銅形土製品は中央で2つに折られた状態で出土した。下部分は甕片に混じり、上部分は遺構南側の壁面にて上部を下斜め方向、正面側を壁面に押し付けた状態であった。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

SK5出土遺物 (図32、図版32、33)

8は緑色片岩の二次加工剥片である。荒割段階のもので剥片下部に二次加工痕が見られる。9・10は分銅形土製品である。9は土製品下部、10は土製品上部となり、二片で完形となるものである。土製品の形状は全体的に方形を呈し中央部でくびれ持ち、いわゆる分銅形である。上部前面にT字状に細く盛りあげ眉と鼻を表現し、左右の側面を通り背面まで達する。また両眼に位置する部分は短い横長の刺突で表現する。口は単孔で表現され、土製品の両側は眉を境として縦に二カ所の穿孔を持ち、背面まで貫通する。11は甕形土器である。胴部上半から口縁にかけての残存で、やや張りの弱い胴部に口縁は「く」の字状に外反し端面はやや肥厚しながら丸く仕上げる。



第31図 SK5測量図

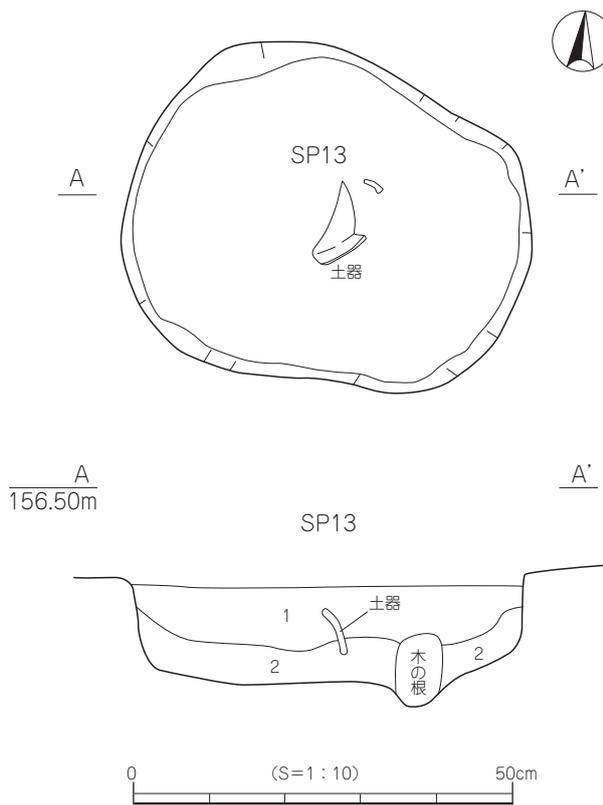
第32図 SK5出土遺物実測図

(6) SP 13 (図 33)

調査区中央部、S B 1 の東に位置する。遺構の規模は長軸約 55cm、短軸約 46cm、深さ約 13cm を測る。平面形は楕円形である。遺構内部からは弥生土器片を検出した。遺構の時期は出土した土器から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

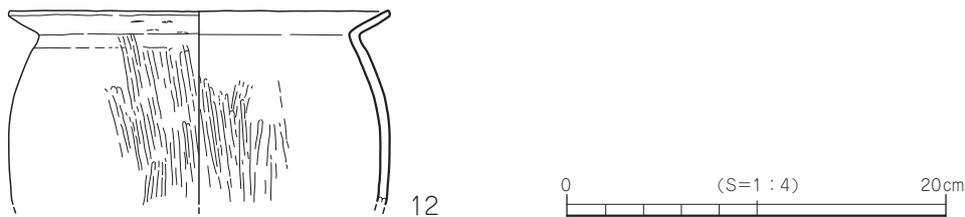
SP 13出土遺物 (図 34、図版 32、33)

12は甕形土器である。胴部から口縁部までの残存である。やや張った胴部から「く」の字状に外反する。



1. 暗褐色シルト10YR3/4 粘性:弱 締り:あり 径2mm前後の砂岩をごく少量含む
2. 黒褐色シルト10YR2/3 粘性:弱 締り:あり 径2mmの砂岩をごく少量含む

第33図 SP 13測量図



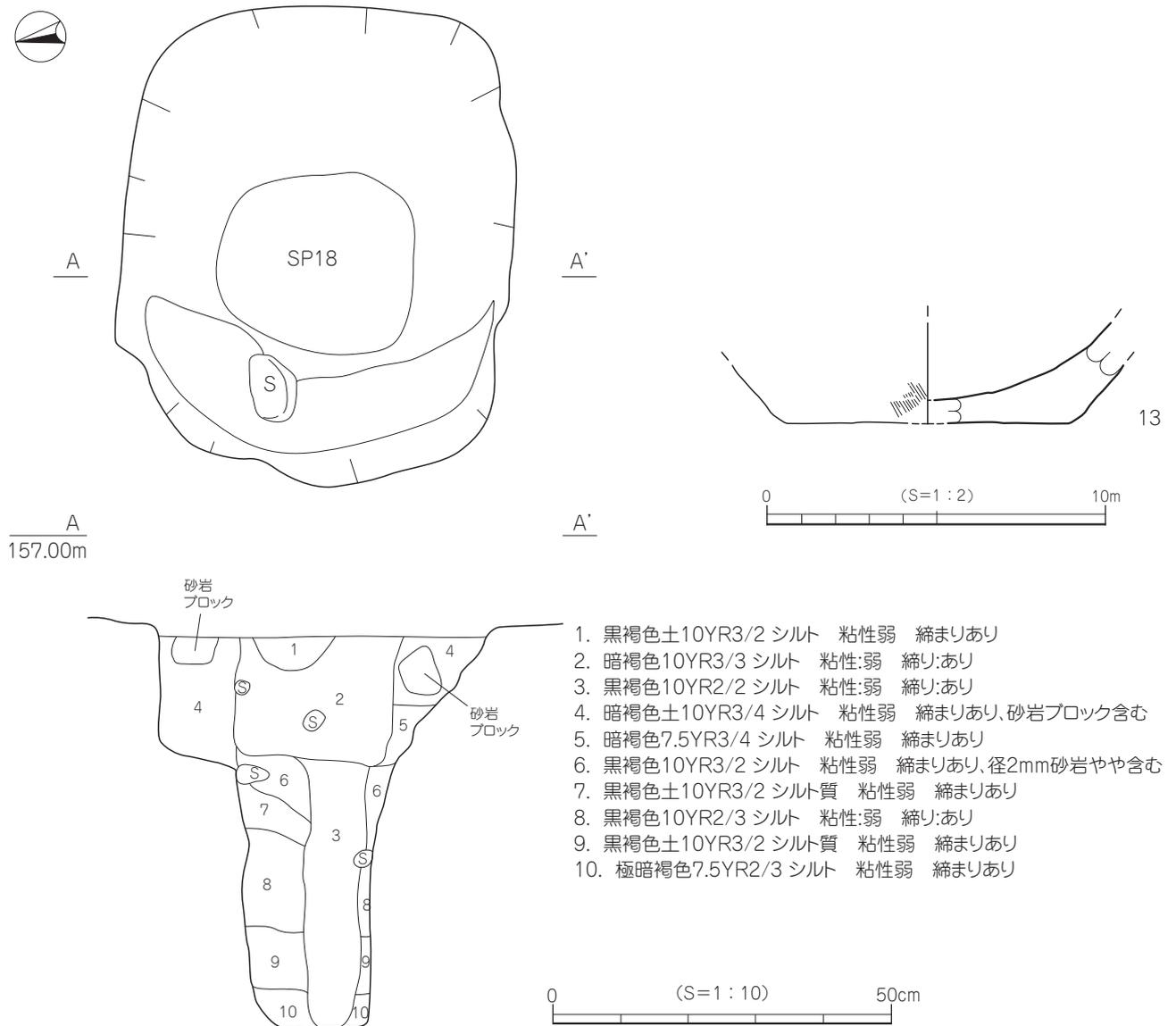
第34図 SP 13遺物実測図

(7) SP 18 (図 35)

調査区中央部、S I 1 の南側に位置している。遺構の規模は長軸約 72cm、短軸約 59cm、深さ約 60cm を測る。平面形は隅丸方形で、直径約 17cm の柱痕を検出し、断面形は段堀状を呈する。本遺構は掘立柱建物の一部と考えられるが、これに対応する遺構を検出することはできなかった。遺物は遺構内より弥生土器片が出土した。遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

SP 18出土遺物 (図 35、図版 32)

13 は壺または甕形土器の底部片である。

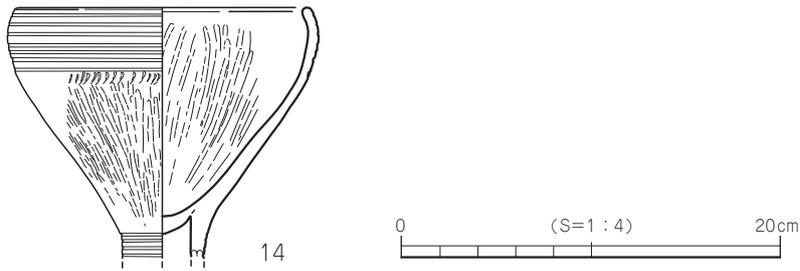


第35図 SP 18測量図および出土遺物実測図

(8) 試掘調査出土遺物 (図 36、図版 34)

本調査に先立つ A 区東部に設定した試掘調査トレンチからの出土品である。

14 は高坏形土器である。脚部から裾部はなく坏部と脚上部がわずかに残る。脚上部は 4 条の外周する沈線が残り、坏部口縁には 7 条の沈線がめぐる。口縁部沈線の直下には「ノ」字状の刺突文がめぐる。外面は磨かれる。本出土品は松山平野の文京遺跡などで見られる弥生時代中期中葉の高坏であるが、やや口縁部が内弯する。

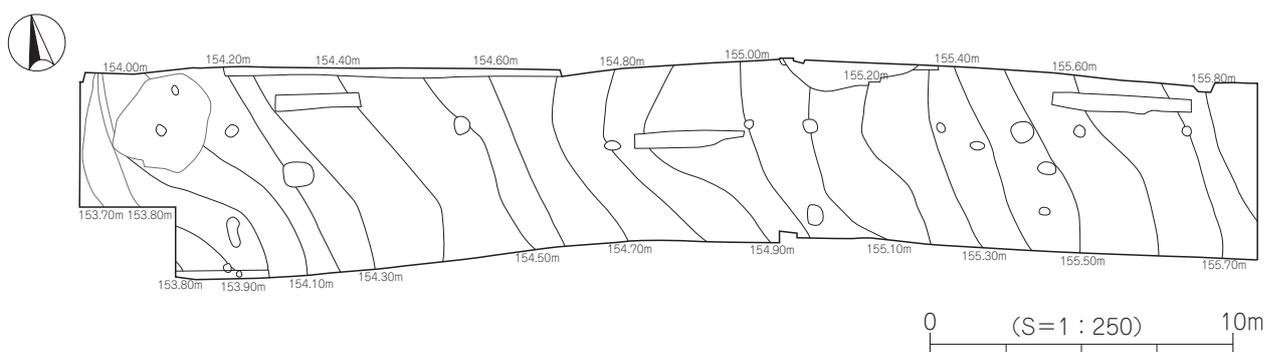


第36図 A区試掘調査出土遺物実測図

第4節 B区調査区

1 調査区の概要

本調査区は7次調査区域のA区調査区の西側に位置する。調査区の範囲は東西約39m、調査区東側の標高が約155m、西側が約153mとなる。



第37図 B区コンタ図

2 遺構と遺物について

調査区東側においては耕作による影響が地山まで及んでいることを確認した。また、調査区西側では、大規模な造成が行われている。検出された遺構は少ないが、弥生時代中期後葉から後期後葉の土坑が検出されている。また、遺物は調査区西側で検出されたS K 4から弥生時代中期後葉の土器が出土している。遺構番号S K 2は欠番となる。

(1) S K 3 (図38、図版6)

調査区中央のやや西側、北側に位置している。調査区の関係から遺構一部のみの検出となり、調査区北側へと続いている。検出部分は南北約1.05m、東西約4.6m、深さは約27cmを測る。全体の平面形は不明であるが、遺構底面が平坦であることから竪穴住居の一部の可能性がある。また遺構中央付近からは炭化物を検出している。

遺構の時期は出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。

S K 3出土遺物 (図38、図版34)

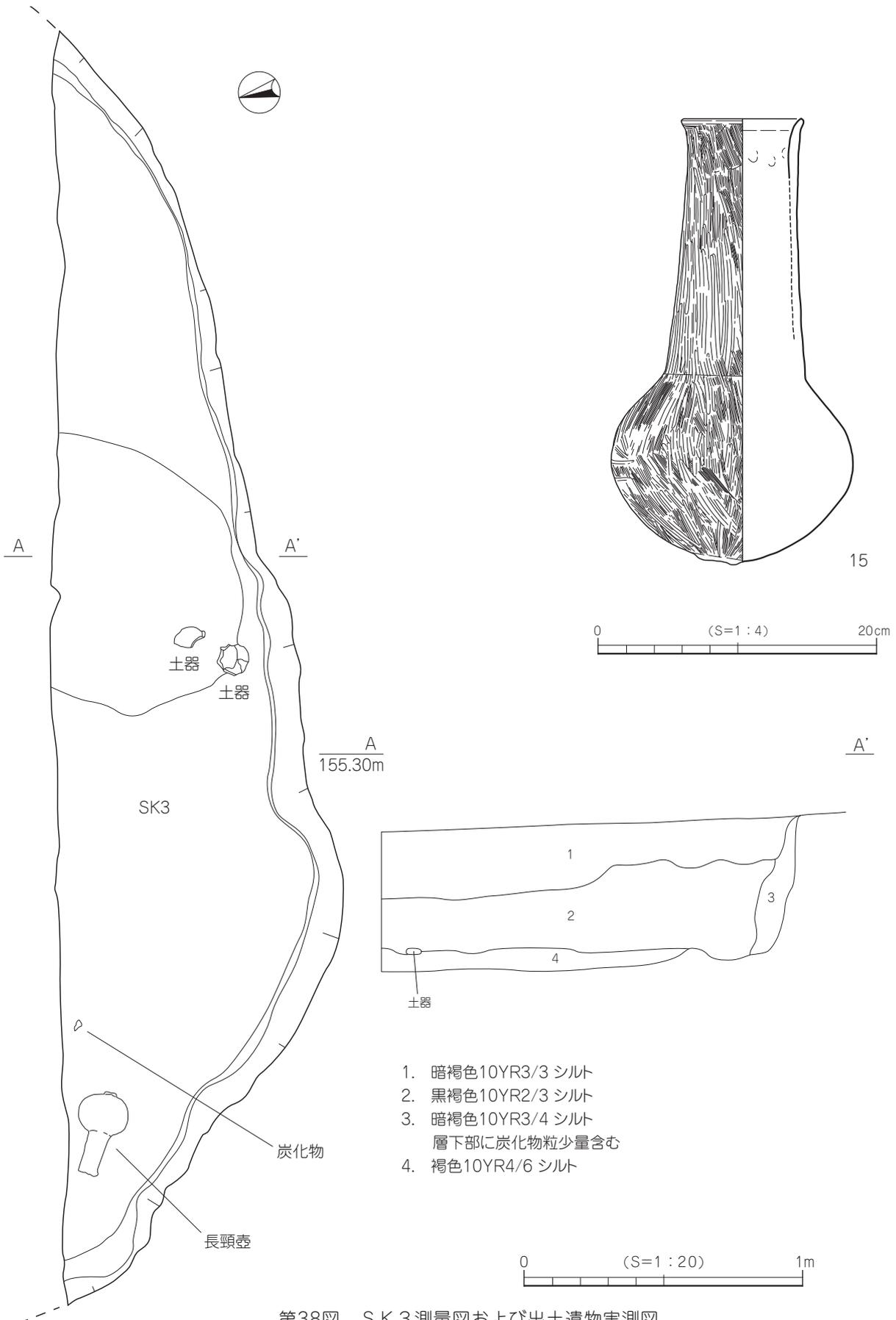
15は長頸壺である。ややひずんだ球形の胴部に底部は径3cm程度の円形ボタン状の突出部を持ち、突出部はわずかにくぼむ。頸部からやや内傾して直立する頸部は長く伸び、端部でわずかに外反する。頸部および胴部ともに丁寧にミガキが施される。

(2) S K 4 (図39、図版7)

調査区西部に位置している。遺構の規模は、南北約6.0m、東西約4.8m、掘り込みの深さは約30cmを測る。平面形は不定形な円形。遺構内部からは2基のピット状の遺構を検出している。また、多数の弥生土器片を検出していることから、土器の廃棄に使用されたと考えられる。

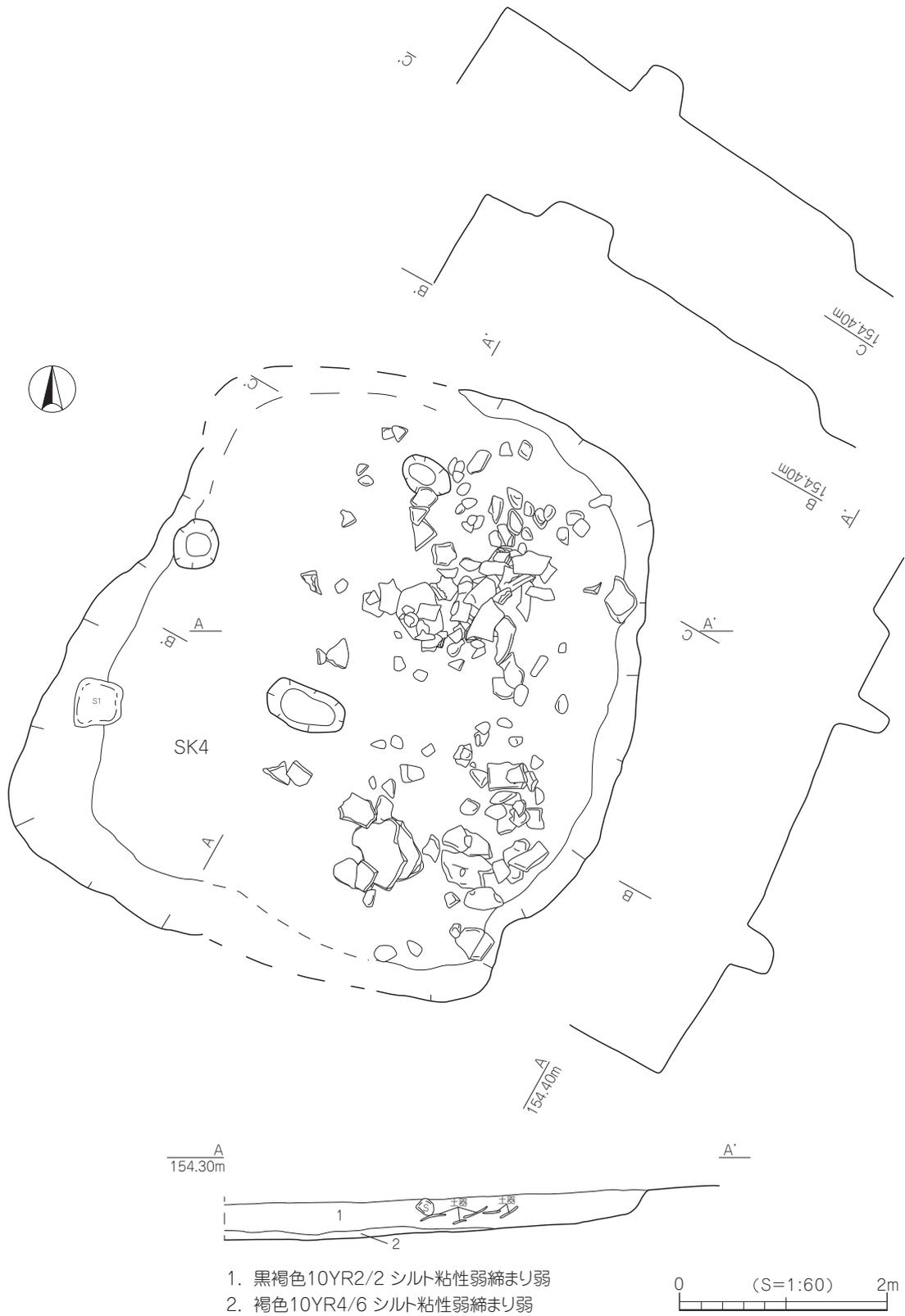
遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

揚り畑遺跡7次調査



第38図 SK3測量図および出土遺物実測図

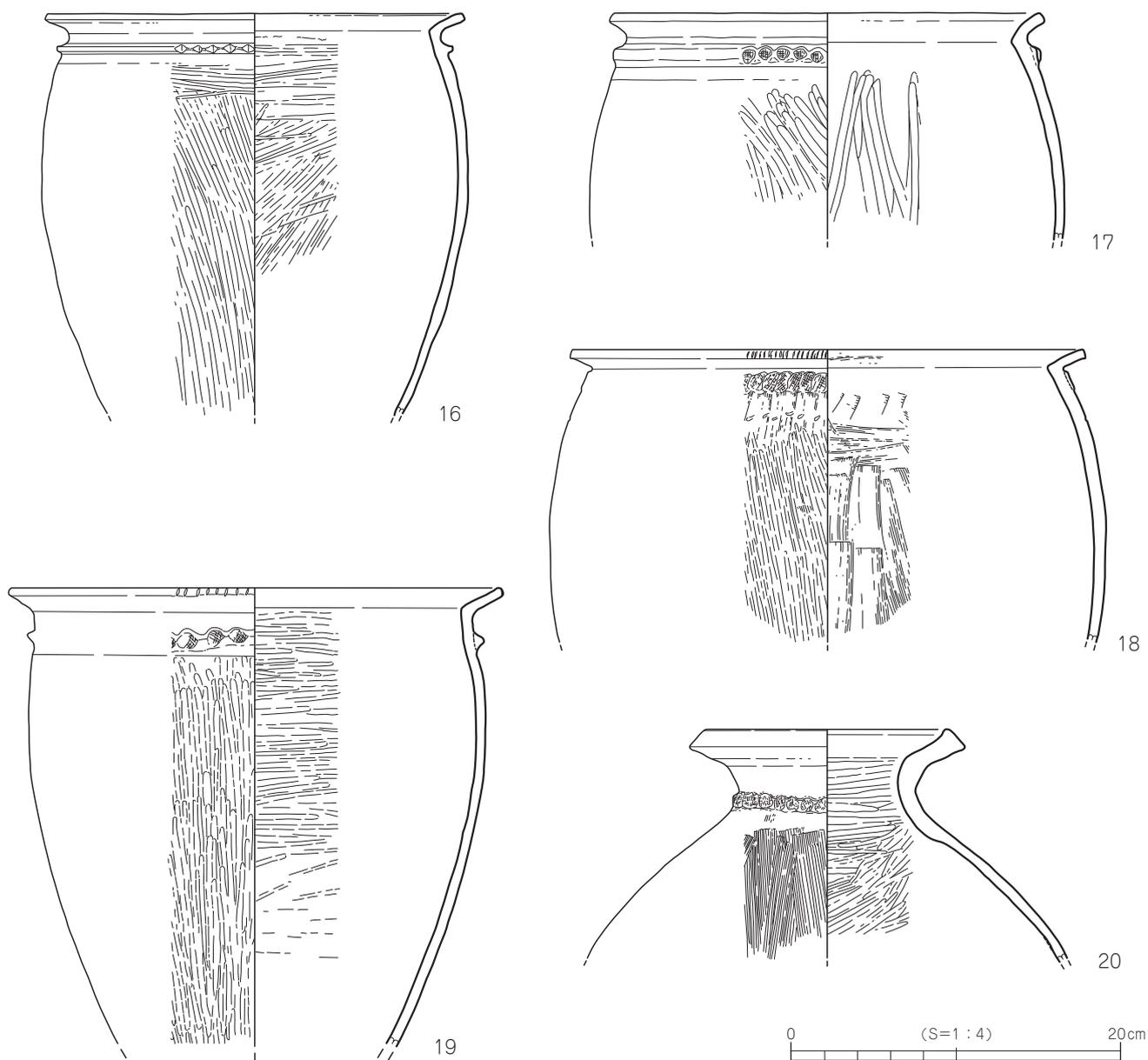
遺構と遺物



第39図 SK4測量図および遺物出土状況

SK 4 出土遺物 (図 40、図版 34、35、36)

16は甕形土器で、口縁部から胴部中位までの残存である。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり外反する。端面は「コ」の字状である。頸部には、断面三角の突帯が施され、板状工具により左から刻まれる。17は甕形土器である。口縁部から胴部中位までの残存である。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり外反し、端面は「コ」の字状である。頸部には指頭による押圧刻目突帯がめぐる。18は甕形土器である。「く」の字状に折れ曲がり外反する口縁部に端面は「コ」の字状に仕上げ、刻目が施される。頸部は布目押圧による突帯がめぐる。頸部突帯以下から胴部は丁寧なタテミガキが施される。19は甕形土器である。「く」の字状に折れ曲がり外反する口縁部に端面はやや丸く仕上げ、刻目が施される。頸部は布目押圧による



第40図 SK 4 出土遺物実測図

突帯がめぐる。頸部突帯以下から胴部は丁寧なタテミガキが施される。20は壺形土器である。口縁部から頸部下までの残存で、口縁部は外反して内傾する。端面はわずかに上方に拡張され、外面は無文である。頸部は指頭押圧による刻目突帯を施す。

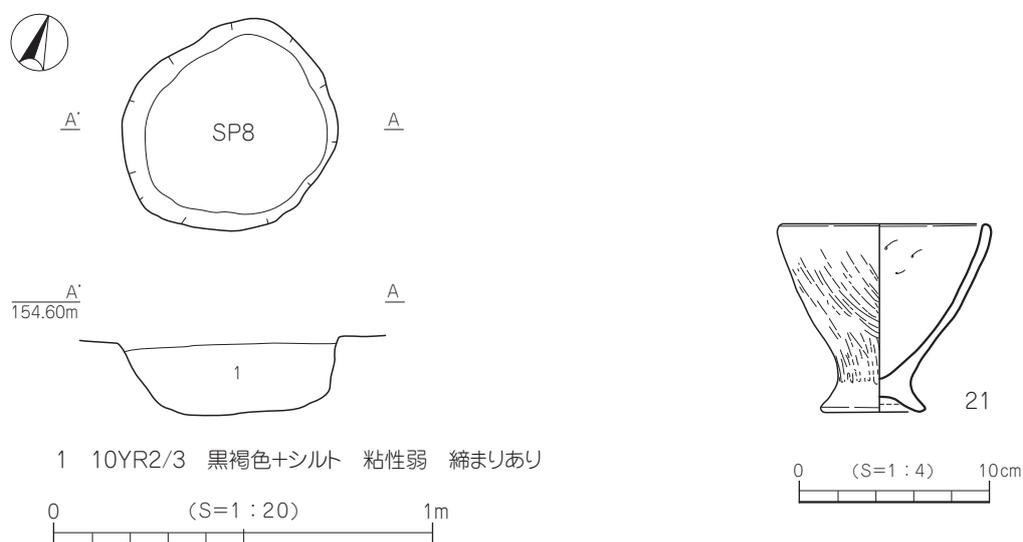
(3) SP8 (図41、図版7)

調査区の東側に位置している。遺構の規模は南北約58cm、東西約55cm、深さ約29cmを測る。平面形は円形である。遺構内部からは弥生土器片を検出した。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と位置付けられる。

SP8出土遺物 (図41、図版37)

21は鉢形土器である。口縁から底部の器形4/3程度の残存である。上げ底の底部に胴部は開きながら立ち上がり端部は面をなす。外面はミガキが残る。



第41図 SP8測量図・出土遺物実測図

(4) 焼土遺構 (図42、図版8)

調査区西部、SK4の南東に位置している。検出された焼土はブロック状で、検出された範囲は南北約96cm、東西約70cmとなる。ブロック状の焼土は遺構中央部の地表面での密度が最も高く、深さ約18cmまで確認された。

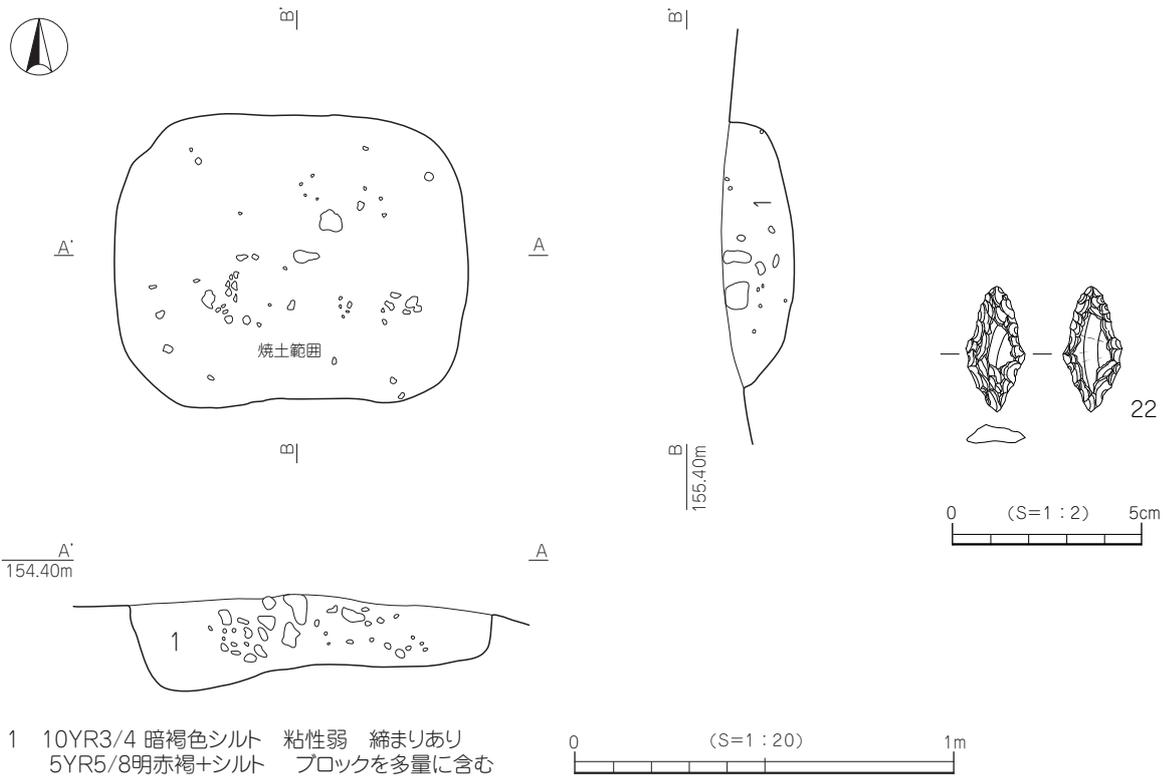
遺構の時期は、出土遺物が石鏃1点のみであったことから特定は難しいが、周囲で検出された遺構から弥生中期後葉から後期後葉の間と考えられる。

焼土遺構出土遺物 (図42、図版37)

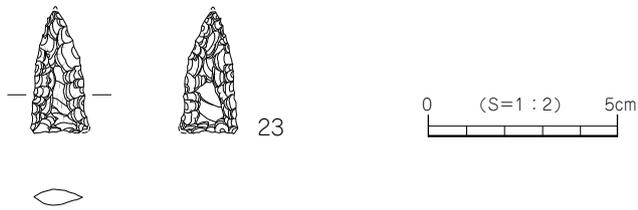
22はサヌカイト製の石鏃である。基部はわずかに有茎で、縁辺部を整形し裏面は剥離面が残る。

包含層出土遺物 (図43、図版37)

23はサヌカイト製の石鏃である。基部は縁辺を整形して無茎で、両面とも縁辺を整形して調整する。



第42図 焼土範囲測量図・出土遺物実測図

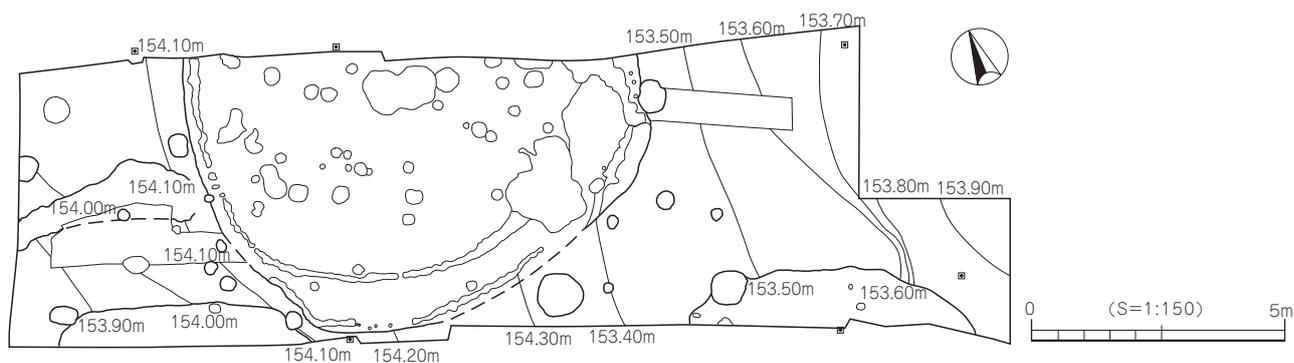


第43図 包含層出土遺物実測図

第5節 C1区調査区

1 調査区の概要

本調査区は7次調査区域のほぼ中央に位置する。標高約153mにて東西の標高差はほとんどなく平坦な地形となる。調査区の範囲は東西約25m、南北約6mである。



第44図 C1区コンタ図

2 遺構と遺物について

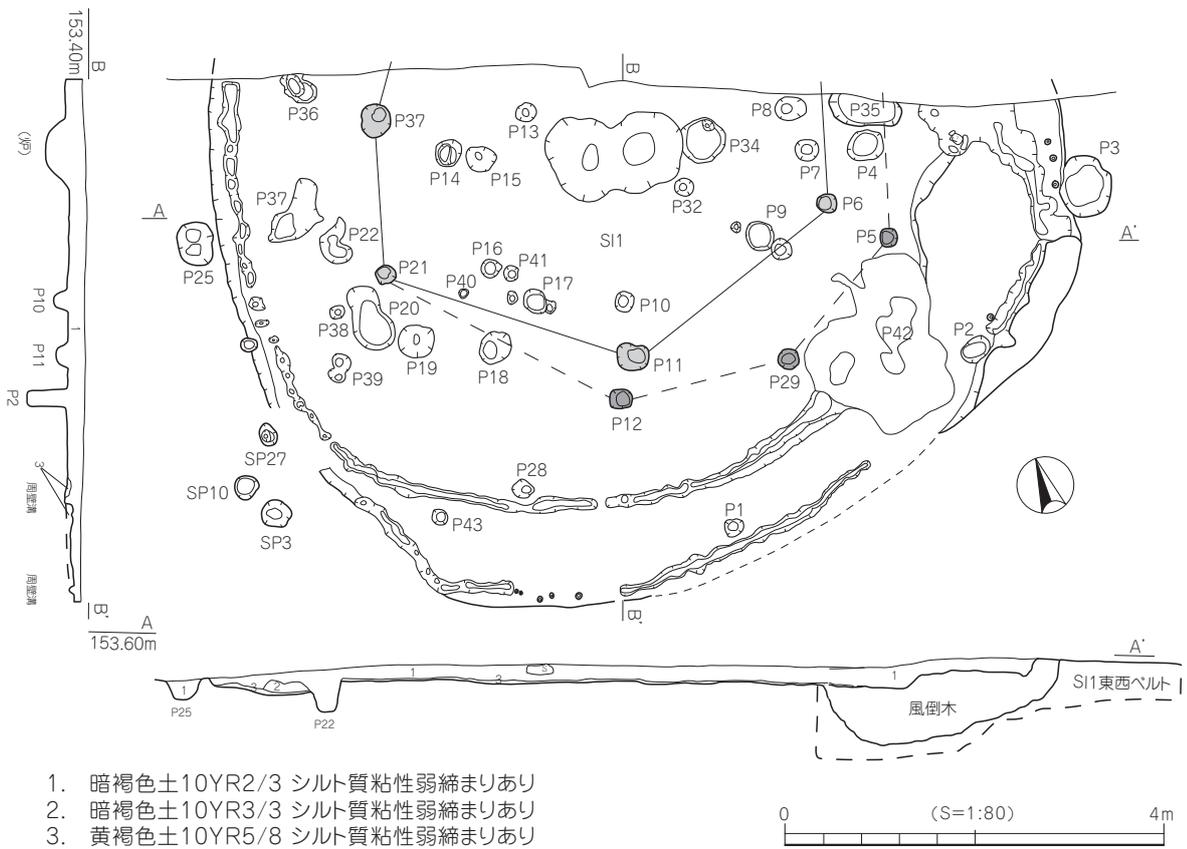
調査区全体的に表土から遺構検出面までが浅く、調査区中央南側では削平や耕作による影響が見られた。調査区中央にて弥生時代中期後葉の竪穴住居の一部、その南側で弥生時代中期後葉及び後期後葉の土坑の一部を検出している。遺構番号SK1、SK3は欠番である。

(1) S11 (図45、図版10、11)

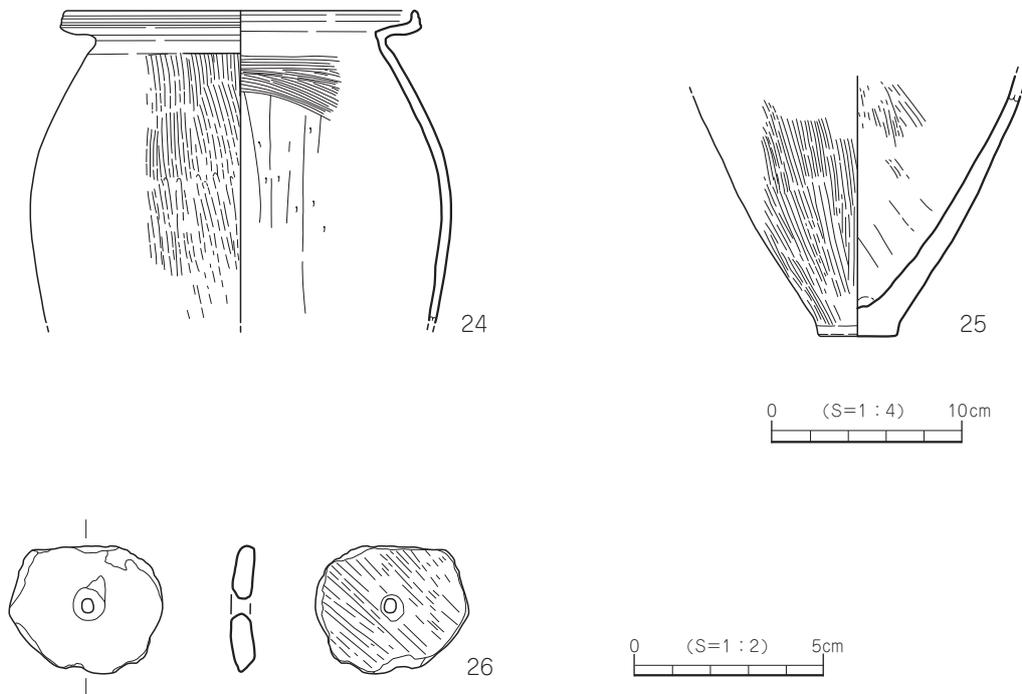
調査区中央部に位置している。遺構は調査区の関係から南側部分のみの検出で、北半は調査区外に展開する。遺構の東から南部分にかけては後世の開墾による影響で削平がなされ、南側部分での遺構の遺存状況はあまり良くない。遺構の平面形は円形を呈する。規模は、南北約5.2m、東西約9.2m、床面の比高差は検出面より約10cmを測り、ほぼ平坦である。埋土は第1層暗褐色土10YR2/3(シルト質)粘性弱、締まりあり、第2層暗褐色土10YR3/3(シルト質)粘性弱、締まりあり、第3層黄褐色土10YR5/8(シルト質)粘性弱、締まりがある。住居内施設として遺構内から、炉1基、柱穴7基、周壁溝2条、遺構西側部分でベッド状の高まりを検出した。ベッド状部分については、土層断面から風倒木により地表面に迫り上げられた、地山を利用したものである。周壁溝については、南部から東部にかけて2条検出している。建物の支柱穴(P6、11、21、37)は直径20cm～36cm、深さ23.6cm～29.3cmのほぼ円形で、柱間は1.65m～2.8mを測る。また、別に3基の支柱穴(P5、12、29)も検出されている。この3基の支柱穴(P5、12、29)は、直径20cm～24cm、深さ34.4cm～40.5cmのほぼ円形で、柱間は1.6m～2.9mを測る。住居内からは、弥生土器、紡錘車、石鏃、石斧、砥石が出土している。

住居内から検出された周壁溝は、南側から東側にかけて2重となっている。支柱穴との関係性を見ると、内側の周壁溝が4基(P6、11、21、37)と一定の間隔を保っているのに対し、3基(P5、12、29)は外側の周壁溝と一定の間隔となる。遺構埋土がほぼ単層であることから、住居の南東部分に対して拡張が

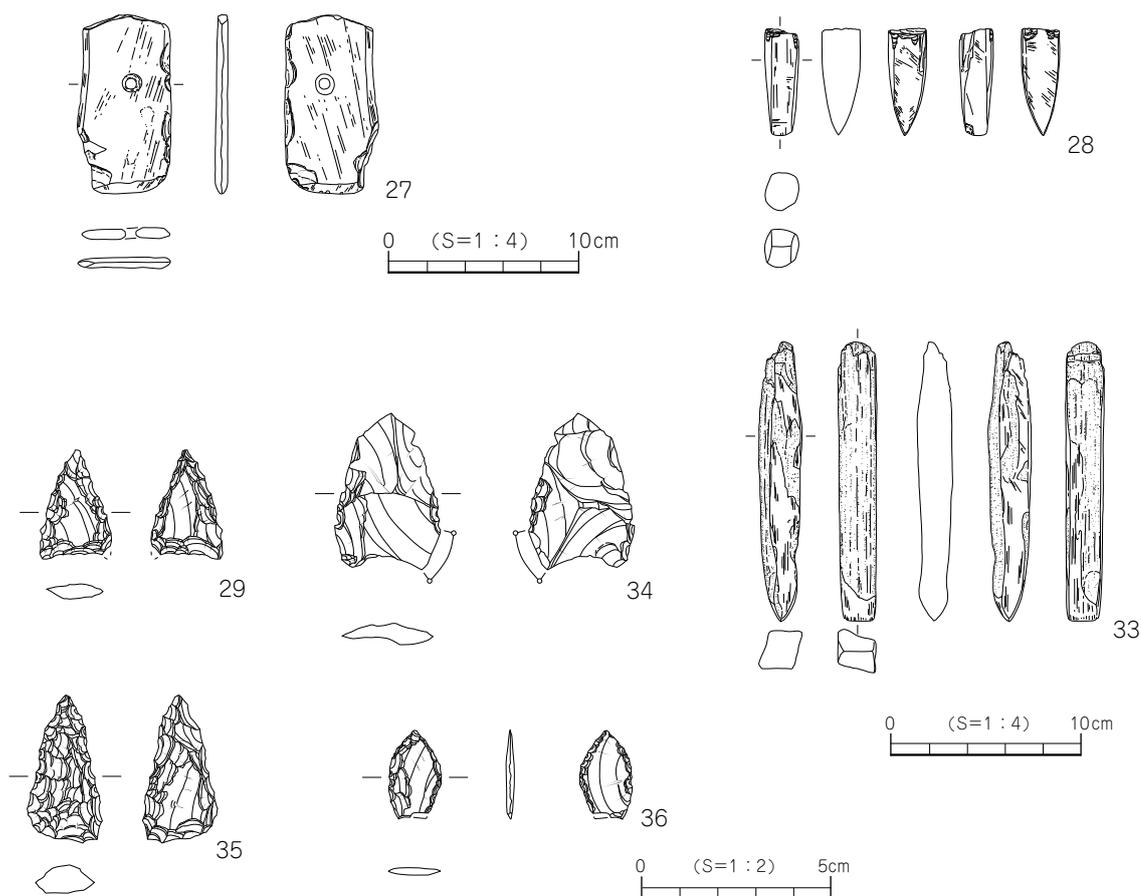
揚り畑遺跡7次調査



第45図 S I 1 測量図



第46図 S I 1 出土遺物実測図1



第47図 S11出土遺物実測図2

行われたと考えられる。遺構の時期は出土した遺物から弥生中期後葉に位置付けられる。

S11出土遺物（図46、図版37、38、39）

24、25、26は弥生土器である。24は甕形土器で、口縁部から胴部中位までの残存である。大きく「く」の字状に折曲げて外反する口縁は端部を上方に拡張する。端部外面には凹線文が施される。胴部はタテハケ目が残る。25は甕又は壺の底部である。平底の厚い底部。26は土製紡錘車で土器胴部の転用品である。27、28、29、30、31、32、33、34、35、36は石製品である。27、28、33は石斧。27は緑泥片岩製の薄く扁平な石斧である。中央に1ヶ所の円孔が穿たれる。石庖丁の転用か。28は柱状の磨製石斧である。刃部は両刃で仕上げる。33は緑色片岩製の磨製石斧である。柱状節理で割れた礫片を素材としている。刃部および器体を部分的に研磨しており、特に刃部の研磨は入念である。形状は両刃だが全体の形状から柱状片刃石斧を意識したものか。29、34、35、36は石鏃。29は平茎式の石鏃で辺縁を調整して成形する。35は安山岩製石鏃の未製品で、基部は無茎で抉る凹基無茎石族か。35はサヌカイト製の完形品である。縁辺部を丁寧に調整し仕上げる。36はサヌカイト製のほぼ完形品である。基部の抉りは判然としないがほぼ直線的である。31、32、30は砥石である。31は砂岩製の砥石である。4面ともに研磨痕および摩滅痕が認められるまた、表面の一部が被熱を受けたことによって生じた剥離が看取できる。32は結晶片岩製の砥石で表面には数カ所の擦痕が見られる。30は凝灰岩製の小型砥石で表面及び両側面の3面に砥面が見られる。



第48図 S I I 出土遺物実測図3

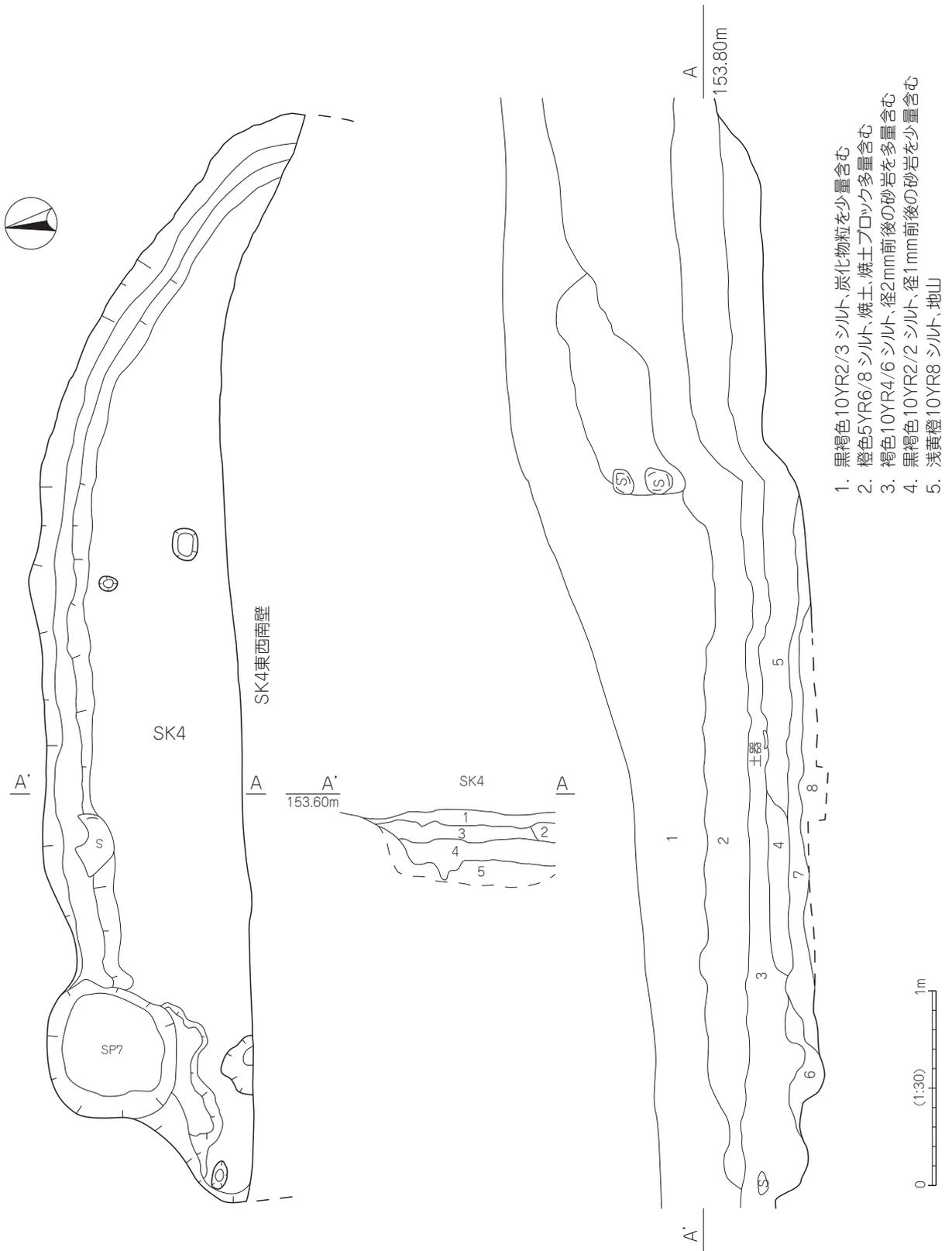
(1) SK 4 (図 49、図版 7)

調査区東部南に位置している。調査区の関係から遺構北側一部の検出で南部は調査区外に展開する。遺構の東部は東側調査区内に含まれるが、煩雑さを避けるために本調査区に全体を含めた。遺構はやや緩い半円形を呈し、規模は東西約 5.6m、南北約 1m を測る。掘り込みの深さは約 28 ～ 36cm を測り、埋土は上層より黒褐色のシルト質で炭化物粒を少量含む。橙色のシルト質で焼土および焼土のブロックを多量含む。褐色のシルト質で径 2mm 前後の砂岩を多量含む。黒褐色のシルト質で径 1mm 前後の砂岩を少量含む。遺構の北辺には断面逆台形を呈する溝状の窪みがめぐることから、住居の可能性も考えられるが調査時点では判断できなかった。

遺構の時期は出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。

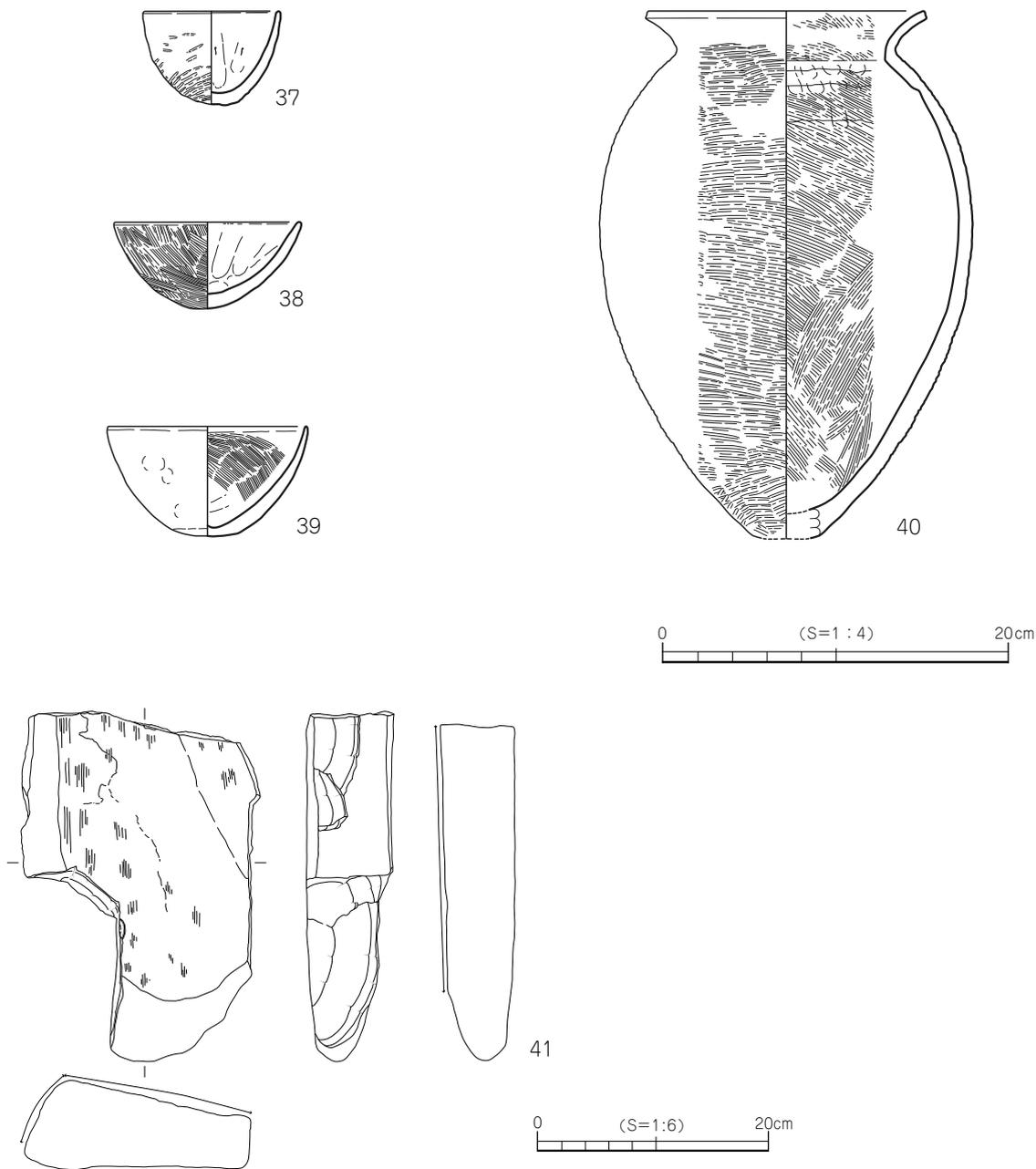
SK 4 出土遺物 (図 50、図版 39、40)

37、38、39、40 は弥生土器。37、38、39 は鉢形土器である。37 は小型の鉢で口縁部は大部分欠ける



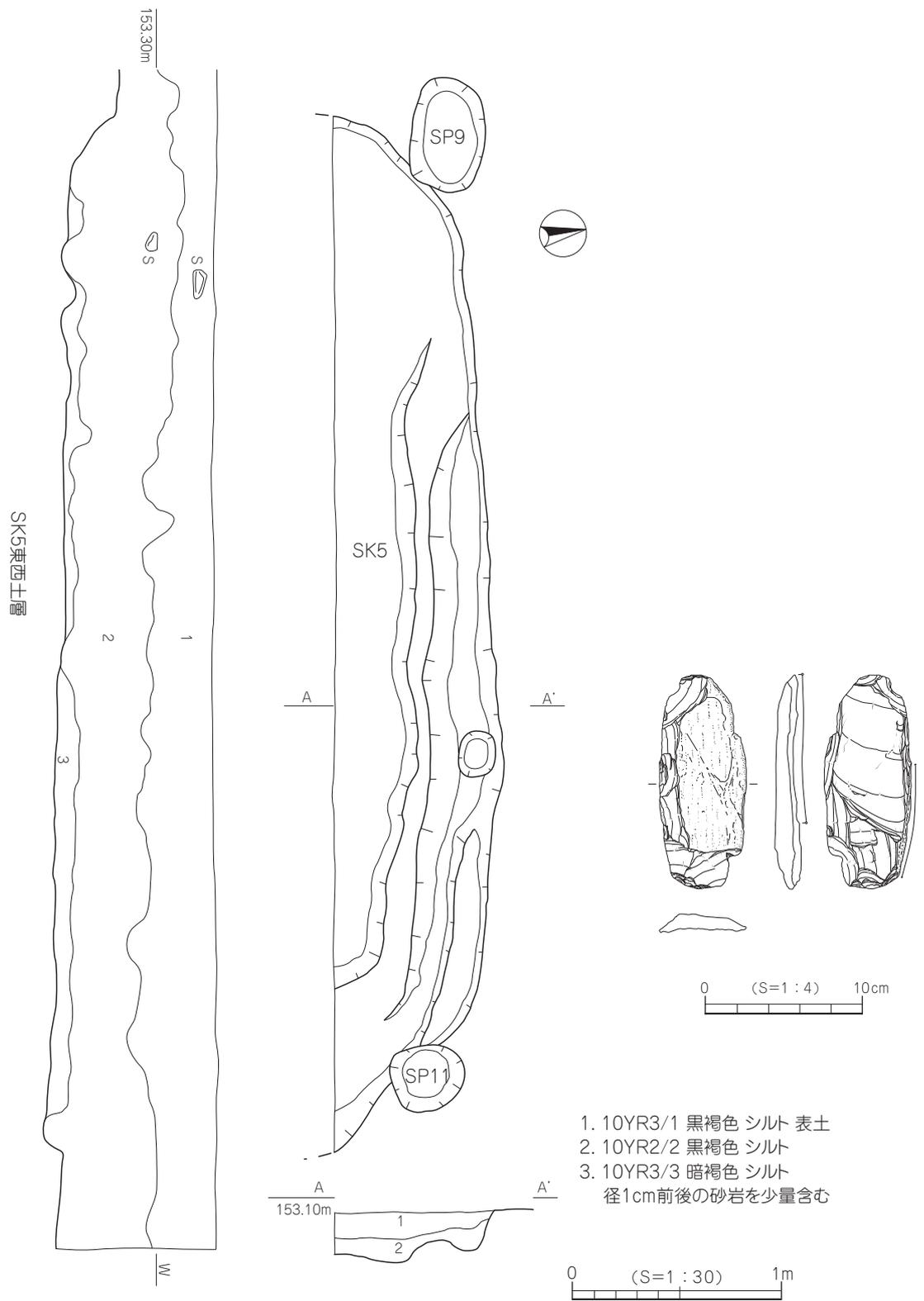
第49図 SK4測量図

が、口縁から底部にかけてほぼ残存する。やや尖り気味な丸底の底部で、外面にはほぼ全面にタタキ痕が残る。38の口縁部は大部分欠けるが、口縁から底部にかけてほぼ残存する。小型の鉢で丸底の底部に三条の線刻が見られる。胴部外面は細かいハケ目調整が残る。39の口縁部は大部分欠けるが、口縁から底部にかけてほぼ残存する。小型の鉢で丸底の底部はわずかに面をなし、内面はハケ目調整が残る。40は甕形土器である。外反外傾する口縁を持ち、胴部外面は明瞭なタタキ痕が見られる。4は砂岩製の砥石である。一部大きく欠損しており、2面に摩滅した砥面が見られる。



第50図 S K 4 出土遺物実測図

遺構と遺物



第51図 SK5測量図・出土遺物実測図

(1) SK5 (図51、図版12)

調査区西部に位置している。調査区の関係から遺構北側一部のみを検出で南部は調査区外へと展開する。平面形はやや緩い半円形を呈しているが全体の形状は不明である。規模は南北約0.8m、東西約5m、掘り込みの深さは約10cmである。中央から東部にかけて段状に掘り込まれている。遺構内からの出土遺物は緑泥片岩製の石斧と、図化できるものはなかったが弥生土器片が検出されている。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

SK5出土遺物 (図51、図版39)

42は緑泥片岩製の打製石斧である。約1/2程度の残存で表面および側面に広く自然面を残し、裏面は衝撃剥離面が多く見られる。未製品か。

C1区その他の遺物

包含層出土遺物(図52、図版40)

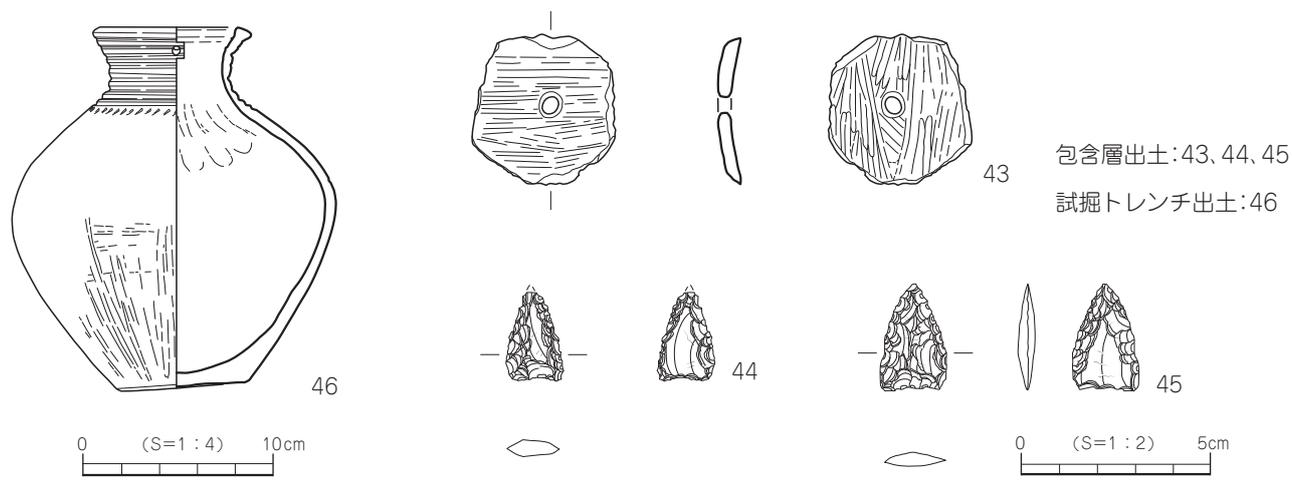
調査区掘削時に遺構検出面にて出土した遺物を掲載する。

43は土製紡錘車で土器胴部の転用品である。中央に穿孔を持ち、外形は面取りする。44、45は表土出土遺物である。2点ともに縁辺部を調整した平茎式の石鏃である。44は先端が欠損する。

試掘調査トレンチ出土遺物(図52、図版41)

本調査に先立つC1区に該当する試掘調査トレンチからの出土品である。

46は壺形土器である。平底の底部。胴部は張り、頸部から口縁に8条の凹線がめぐる。また頸部沈線直下に「ノ」字状の列点文がめぐる。端部は外傾し直下に4ヶ所の穿孔がみられる。本品はC1区試掘トレンチ、S I 1範囲内の出土品である。

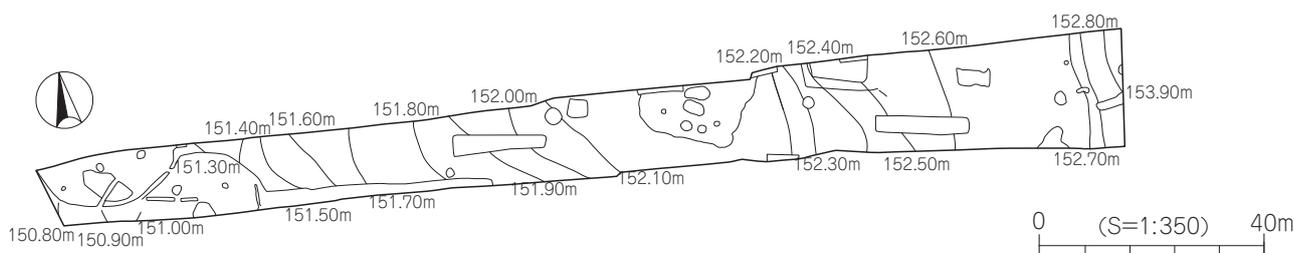


第52図 試掘トレンチ・遺構検出面および表土出土遺物実測図

第6節 C2区調査区

1 調査区の概要

本調査区は、7次調査区東側の標高が約152m、調査区西側の標高が約150mに位置する。調査区の範囲は東西約51mである。



第53図 C2区コンタ図

2 遺構と遺物について

調査区東側では耕作による影響が地山まで及んでおり、西側では造成が行われている。調査区中央で弥生時代後期後葉の竪穴住居、西側にて弥生時代中期中葉および後葉の竪穴住居を検出している。遺構番号はS I 2、S K 1、S K 2は欠番である。

(1) S I 1 (図54、図版13)

調査区のはほぼ中央に位置している。調査区の関係から遺構南側部分のみの検出で北部半は調査区外に展開する。平面形は隅丸の方形を呈し、遺構の規模は南北約1.0m、東西約4.8m、壁高は約15cmを測る。遺物は弥生土器片、石庖丁が出土している。遺構内からは2基の柱穴と中央に炉跡を検出した。また炉の北側で焼土を検出している。

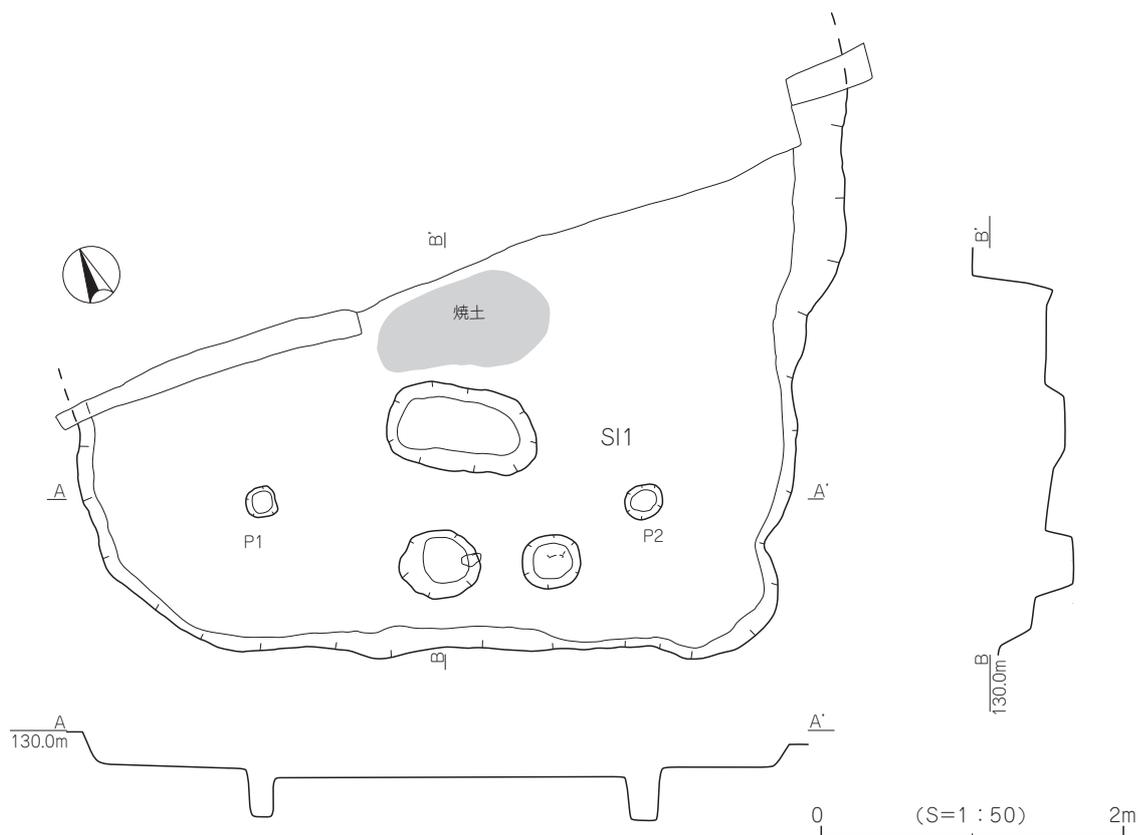
遺構の時期は図化できる弥生土器片はなかったが、出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。

(2) S I 3 (図55、図版14、15)

調査区西部に位置している。調査区の関係から北側部分のみの検出となった。検出した遺構西側の一部はS I 4に切れられており、南西側一部は削平等により消失していた。検出部分は南北約2.8m、東西約6.1m、掘り込みの深さは約10cmを測る。平面形は円形を呈すると考えられる。遺構の時期は出土遺物、および本遺構とS I 4との切り合い関係から、中期中葉以前の中期中葉としておく。

S I 3出土遺物 (図56、図版41)

47は高環形土器である。脚部に坏部がとりつく部分の残存で器形の全容は不明である。坏部から脚部は粘土板を充填して取り付ける。外面はミガキが看取できる。平野内の高環としてはやや趣が異なり外来品の可能性もある。48は、僅かに上げ底の甕または壺の底部である。器面の残存は少ないが外面には明瞭なミガキが看取できる。49は砂岩製の砥石。下半部は欠損するが表面と片側面に砥面が残る。



第54図 S11測量図

(3) S14 (図55、図版14、15)

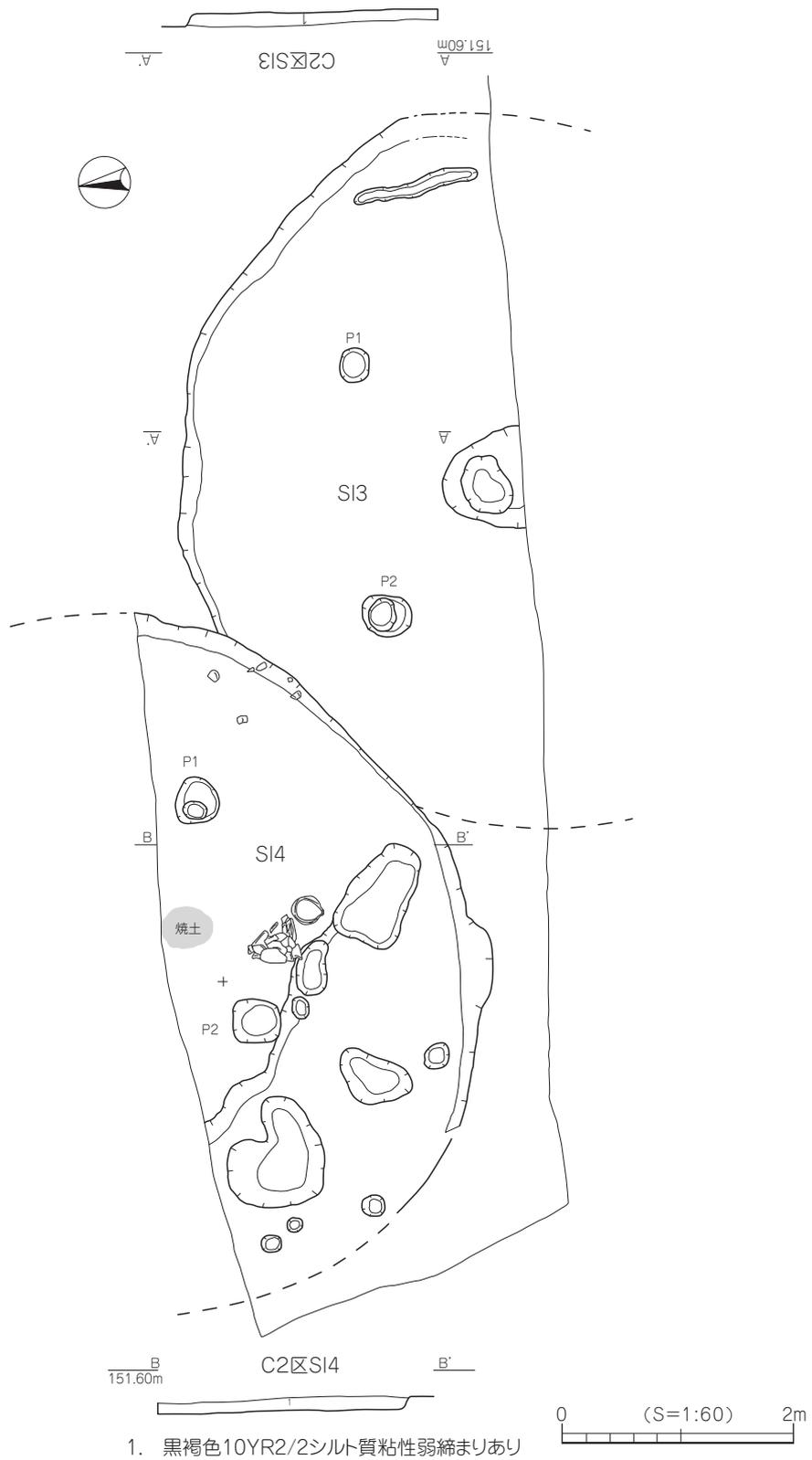
S I 3 西側に位置している。北半は調査区外に展開し、平面形は円形を呈すると考えられる。円形住居の南東部はS I 3 を切る。遺構の検出規模は、南北約 3.3 m、東西約 4.8 m、壁高は約 22 ~ 50cm を測り、床面は平坦である。西側は後世の影響が見られたが、遺構内からは弥生土器、分銅形土製品、炭化した桃核が出土している。

出土遺物及び桃核の放射性炭素年代測定による補正年代 $2,190 \pm 30BP$ という結果から、遺構の時期は弥生時代中期後葉に位置付けられる。

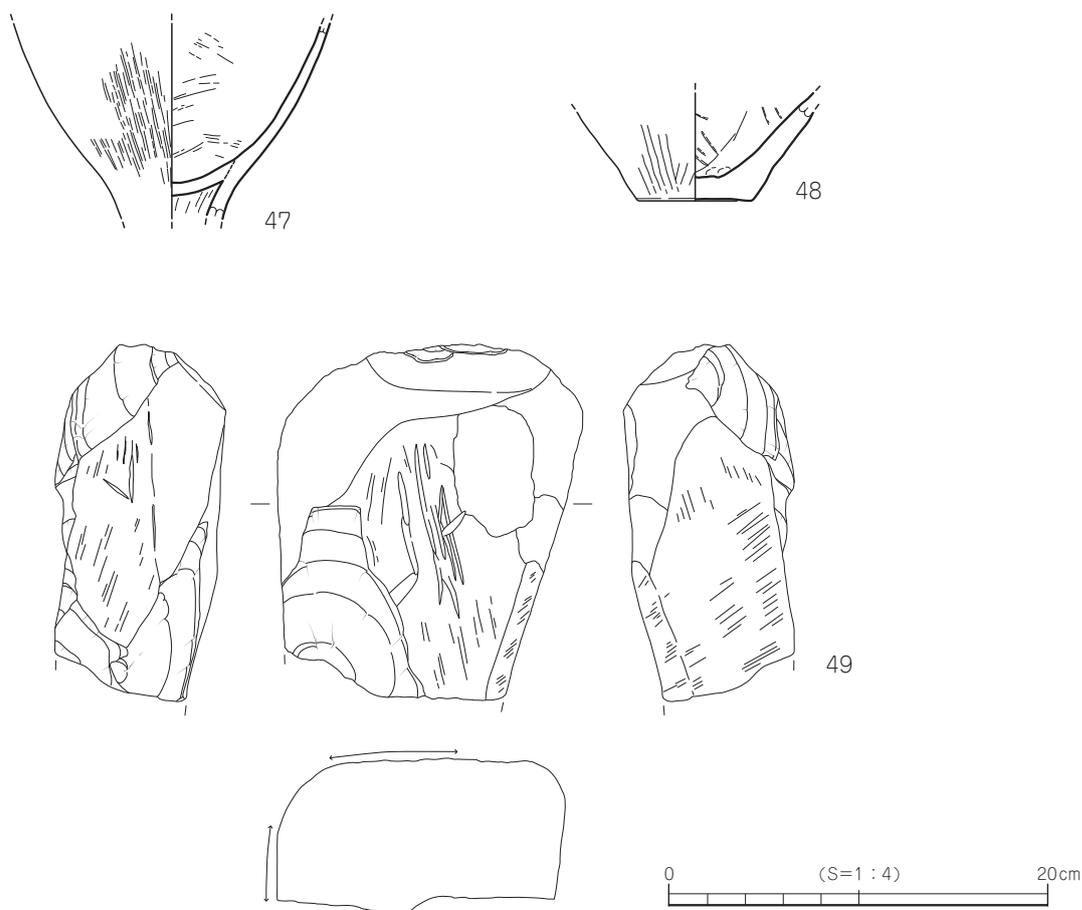
S I 4 出土遺物 (図 57、図版 42、43)

50 は分銅形土製品である。土製品の上部右半の残存で、顔面の表現が施されている。やや角の取れた方形と推定される。眉の表現部分の粘土帯は剥離しその下位に爪で半円形の目の表現がなされている。また、眉直下に孔を穿ち側面まで達し貫通する。眉表現部分の粘土帯剥離痕跡は他の分銅形と同じく正面から側面を通ったのち背面まで達している。51 は土製紡錘車で中央に穿孔を持ち、1/2 の程度残存である。土器胴部の転用品である。52、53、54 は弥生土器である。52 は甕形土器。上げ底の底部に、胴部の張りはやや上位に持ち、口縁は「く」の字状に外反する。内面は稜を持ち、端面は外傾する。頸部には手指による押圧突帯を貼り付ける。53、54 は壺形土器で 53 は頸部から底部にかけての残存で口縁部は欠損する。やや丸みを帯びた平底の底部に、頸部は貼り付けの断面三角突帯文をもち、突帯の一部に手指による押圧の刻みが 2 カ所セットで施される。外面は丁寧なミガキが施される。54 は頸部のみの残存である。頸部には断面三角の突帯文が貼り付けられる。弥生時代中期前葉から中葉である。

遺構と遺物



第55図 S13・4測量図



第56図 S13出土遺物実測図

(4) SK4 (図58、図版16)

調査区西部部に位置している。検出部は調査区の関係から遺構の一部のみで北部分は調査区外へと続いている。遺構の規模は南北約1.2m、東西約2.5m、掘り込みの深さは約15cmである。床面は平坦で柱穴等は検出されていない。平面形状は不明であるが隅丸方形の可能性が考えられる。遺構内部から弥生時代中期後葉の土器片や石庖丁が出土している。

遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

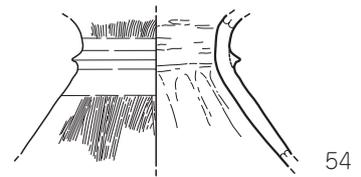
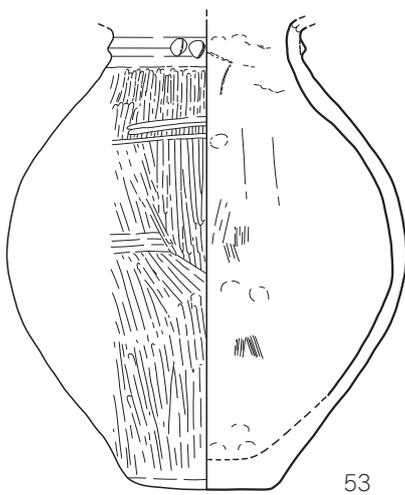
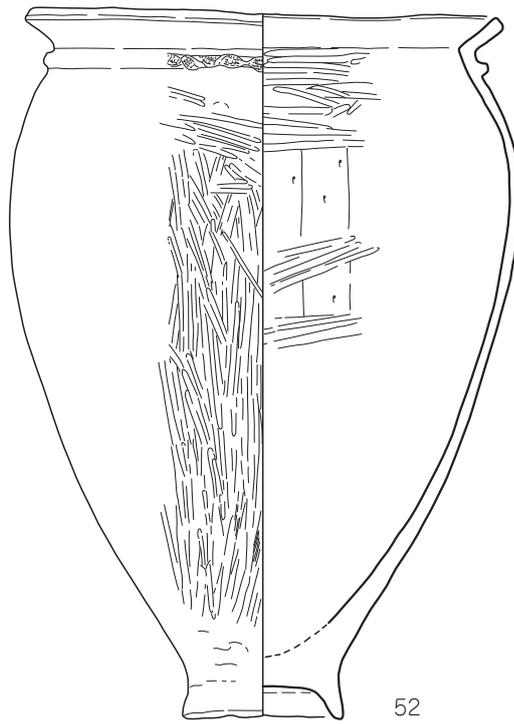
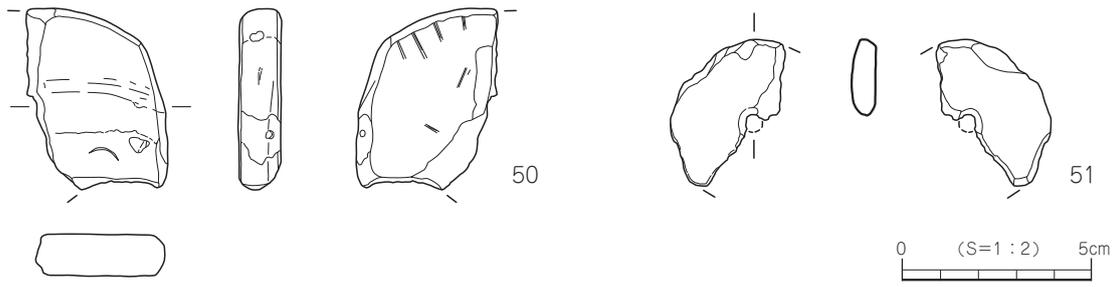
SK4出土遺物 (図59、図版43)

55は緑泥片岩製の石庖丁で2/3程度の残存である。刃部はやや窪み、裏面は剥離した自然面が残る。紐掛けの孔は2カ所に穿たれる。

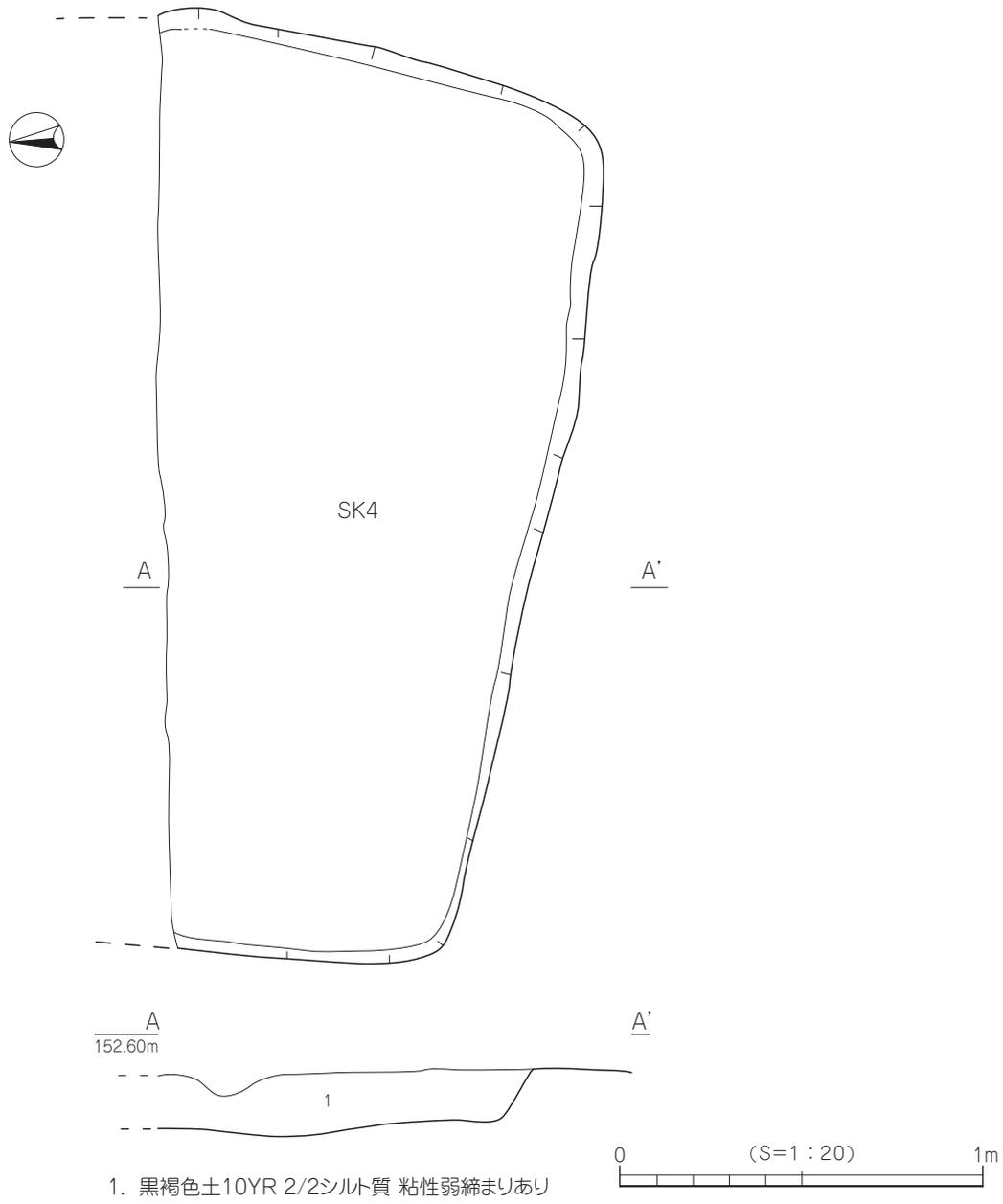
SP15出土遺物 (図60、図版44)

56は弥生土器の壺形土器である。頸部から体部、底部までの残存。平底の底部に肩はやや張る。頸部の外面はハケ目が残り、体部から底部外面はしっかりとミガキが施される。

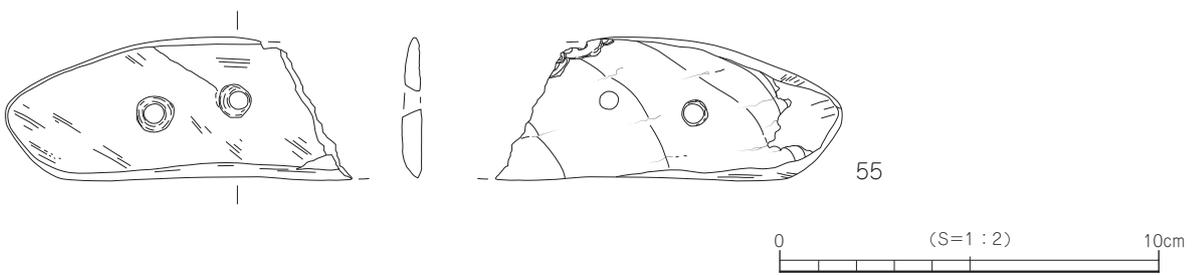
遺構と遺物



第57図 S I 4 出土遺物実測図



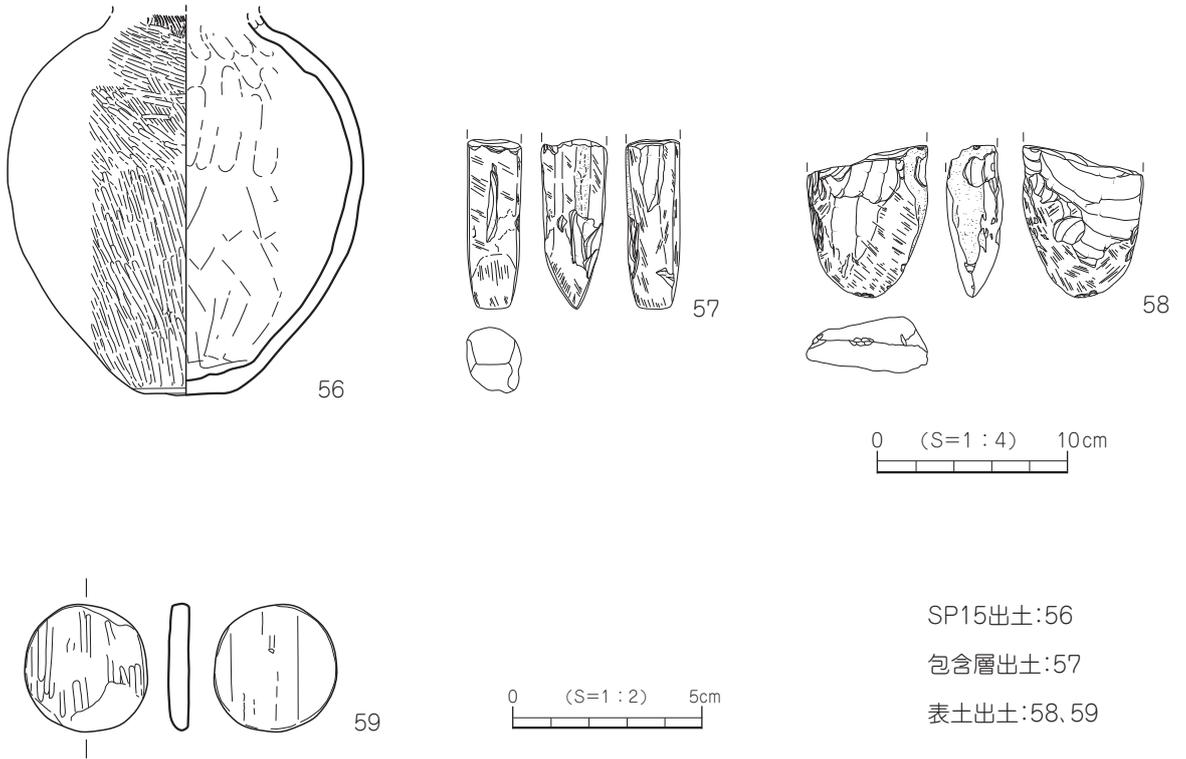
第58図 SK4測量図



第59図 SK4出土遺物実測図

包含層出土遺物（図 60、図版 43）

57 は包含層からの出土品である。57 は緑泥片岩製の磨製石斧である。両刃の石斧であるが、片面はやや角度をきつく仕上げる。側面は自然面が残るが表裏面は磨かれる。58、59 は C 2 区表土からの出土品である。59 は土製紡錘車である。径約 3.3 ～ 3.4cm の円形で、甕または壺胴部の転用品である。外周は面取りがなされ、中央に穿孔はなく未製品である。58 は緑泥片岩製の磨製石斧である。刃部はやや半円形で尖り気味に仕上げる。表裏両面とも自然面を残す。



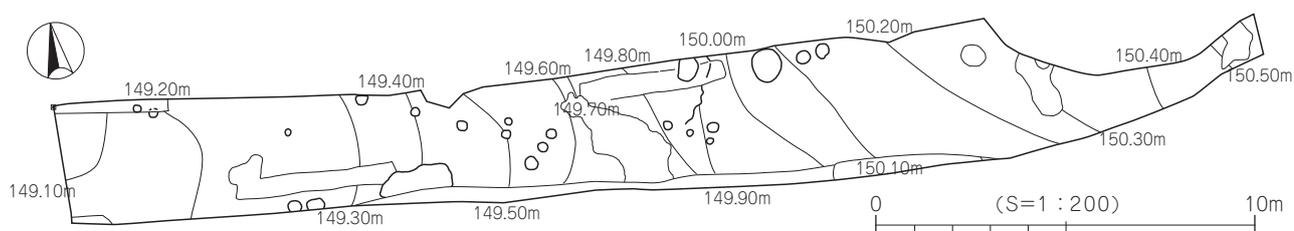
SP15出土:56
 包含層出土:57
 表土出土:58、59

第60図 SP15・包含層・表土出土遺物

第7節 D区調査区

1 調査区の概要

本調査区は、7次調査区域の西側、調査区の範囲は東西約32m、南北約3.5m 調査区東側の標高が約150m、調査区西側の標高が149mとなる。



第61図 D区コンタ図

2 遺構と遺物について

調査区東側では耕作による影響が地山まで及んでいたこともあり、遺構の検出数が減少している。調査区中央にて弥生時代中期後葉の竪穴住居の一部を検出している。

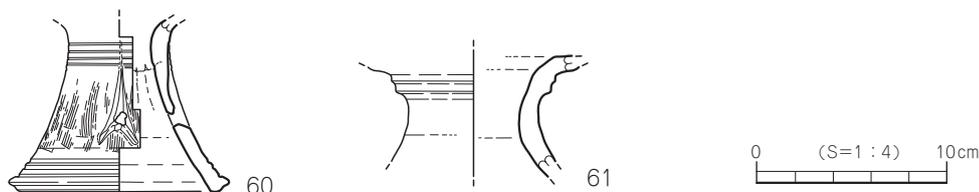
(1) S11 (図63、図版17)

調査区中央部に位置している。検出部は遺構の一部のみで、遺構の南から西部にかけては耕作等の影響により消失しているが、北部分は調査区外へと続いていることを確認した。西側部分で遺構の約25cmの掘り込みを確認している。床面は平らな形状で、遺構内からは弥生時代中期の土器片が出土した。掘り込みの形状から平面形は円形と想定される。遺構内からはSK5とSP4が検出されているが、支柱穴は検出されなかった。

遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

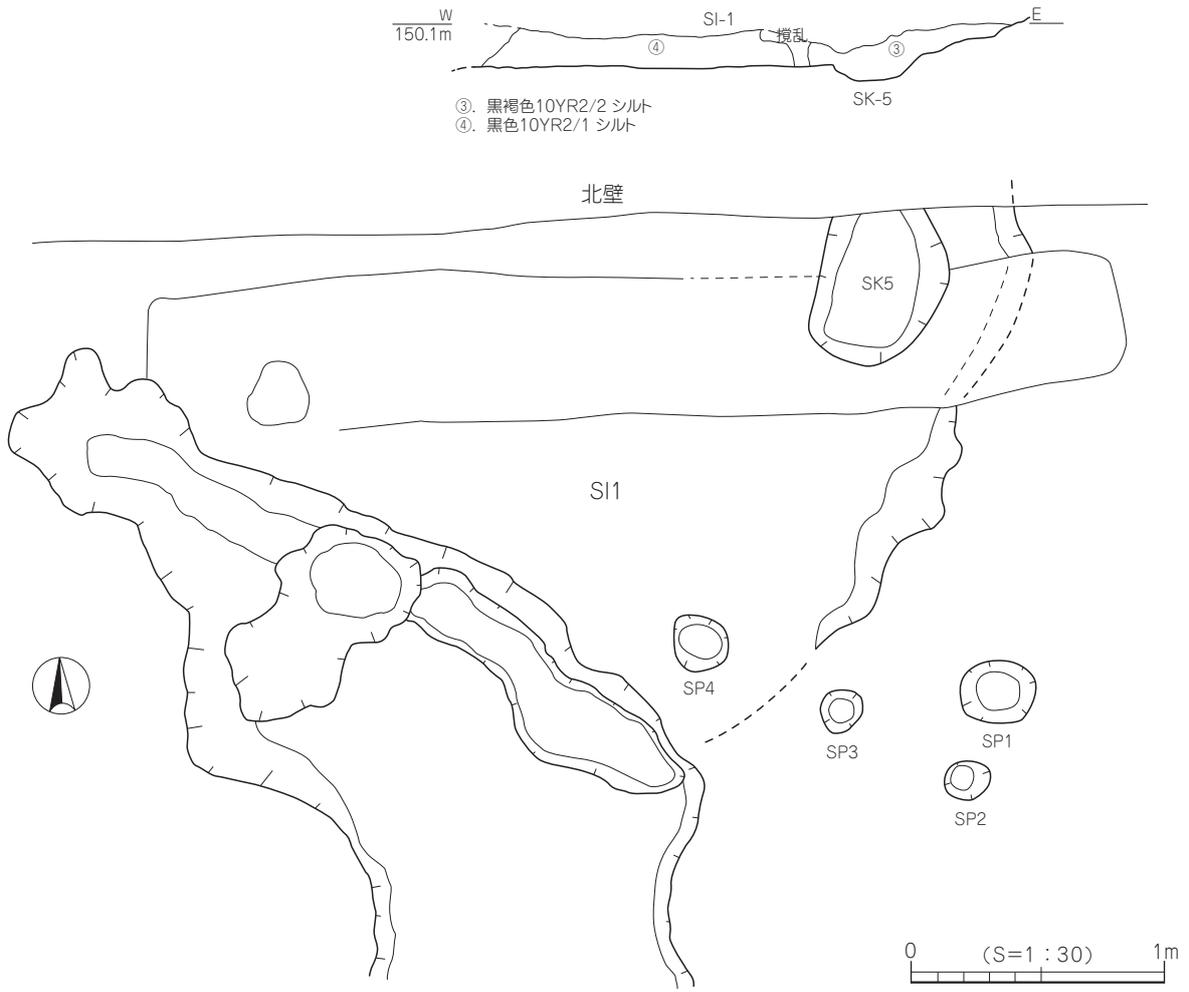
包含層出土遺物 (図62、図版44)

60は高坏形土器である。脚部のみが残存で坏部は欠損している。脚柱上部には4条、裾部には3条の沈線が巡り、その中間の脚柱中位には貫通した矢羽根透かしが1段施される。また裾端部は段状に拡張され1条の沈線がめぐる。61は弥生土器である。壺形土器頸部のみが残存で、口縁部、頸部以下は欠損している。頸部には断面三角形の突帯が2条めぐる。



第62図 包含層出土遺物実測図

遺構と遺物

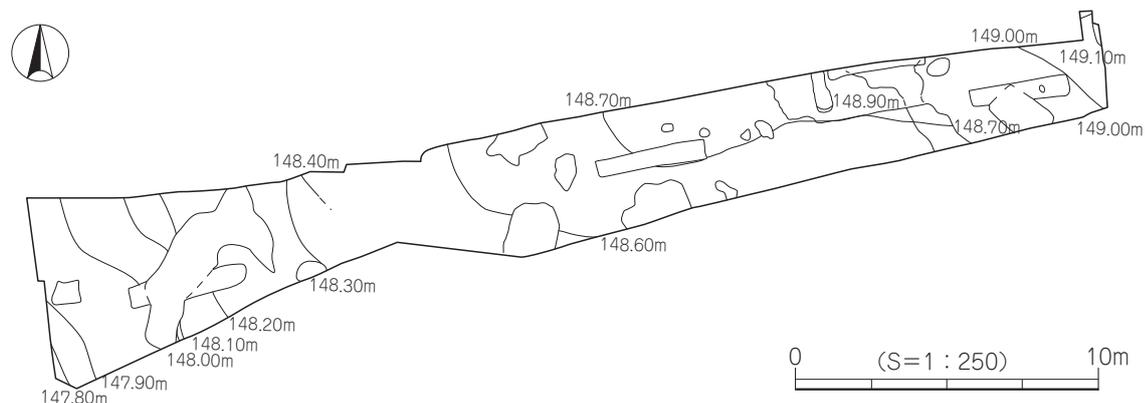


第63図 SI1測量図

第8節 E区調査区

1 調査区の概要

本調査区は、7次調査区域の西端部に位置する。調査区の範囲は東西約35m、南北約4mである。調査区東側の標高が約149m、調査区西側の標高が147mとなる。



第64図 E区コンタ図

2 遺構と遺物について

調査区東側では弥生中期後葉の土坑やピットを検出しているが、調査区西側では耕作等による影響により遺物包含層もわずかに確認できる程度で遺構は検出されなかった。SP1からは動物形土製品が出土しており、遺物包含層からは弥生時代中期後葉から後期後葉にかけての遺物が出土している。

(1) SK1 (図65、図版19)

調査区東部に位置している。遺構の規模は長軸約2.2m、短軸1.3m、掘り込みの深さ約21cmである。長軸が南北よりやや西側に振れる。遺構南部分は調査区外へと続いているため平面形状の全容は不明であるが、残存形状から隅丸方形と想定される。床面は平らな形状となる。

図化できる遺物の出土はないが、遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

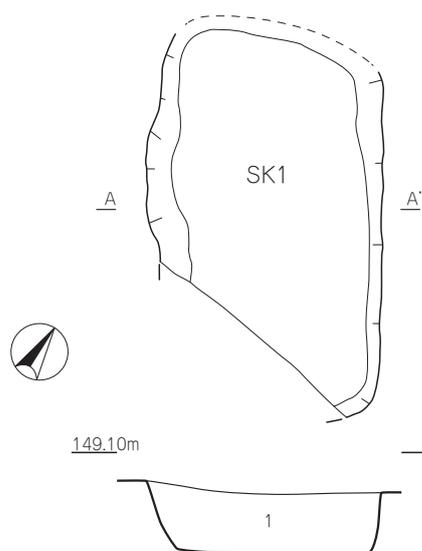
(2) SK2 (図66)

調査区中央に位置している。遺構の規模は長軸約1.7m、短軸1.7m、掘り込みの深さは約40cmである。遺構南部分は調査区外へと続いているため平面形状は不明である。

図化できる遺物の出土はないが、遺構の時期は出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

(3) SP1 (図67、図版19)

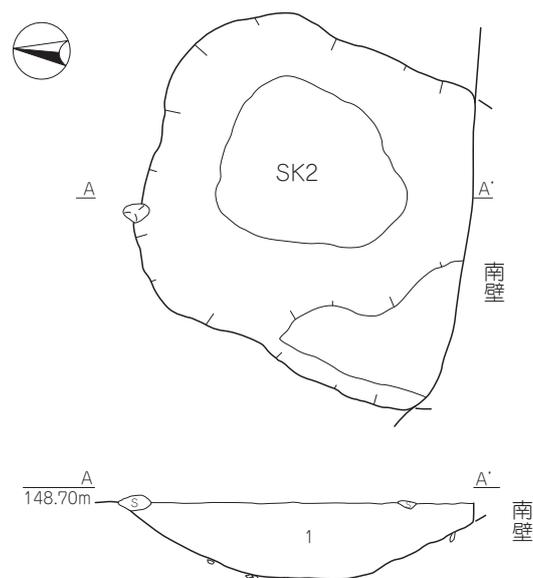
調査区東部に位置している。平面形状は不定形で、遺構の規模は長軸約90cm、短軸約68cm、掘り込みの深さは約28cmである。埋土は黒色土10YR2/1シルト質、粘性は弱で締めりありの単一層である。出土遺物は僅かではあるが、弥生時代中期後葉期の甕の胴部片と動物形土製品の頭部が出土している。



1. 黒色土10YR2/1 シルト質 粘性弱 締まりあり

0 (S=1:40) 1m

第65図 SK1測量図



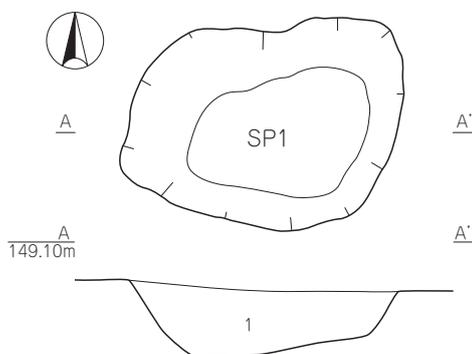
1 黒褐色10YR2/3シルト 粘性:弱 締り:あり

0 (S=1:40) 1m

第66図 SK2測量図

SP1 出土遺物 (図 68、図版 45)

62は動物形の土製品で、頭部のみの残存である。口の先端は欠損している。口は筒状に穿ち、両眼は棒状の工具による刺突で仕上げる。両耳は頭部側面に竹管状の工具で押さえて竹管文状に造られる。頭頂部および口直下は軽く押さえて摘まみあげられる。



1. 黒色土10YR2/1 (シルト質)粘性:弱 締まり:あり

0 (S=1:20) 1m

第67図 SP1測量図



62

0 (S=1:2) 5cm

第68図 SP1 出土遺物実測図

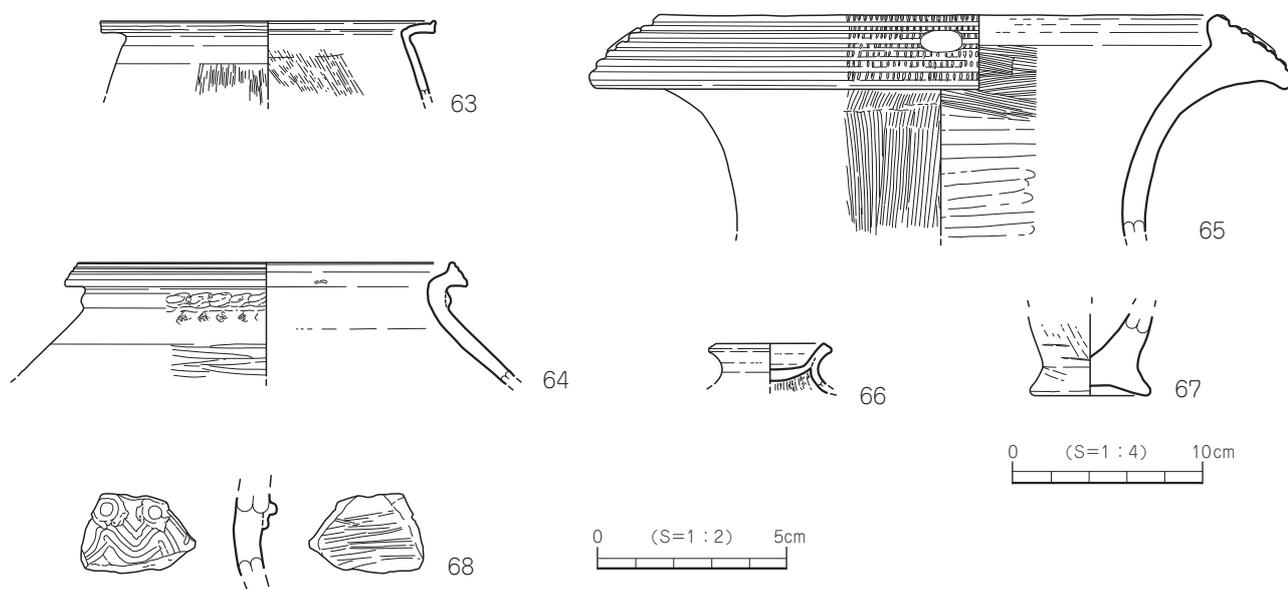
包含層出土遺物 (図 69、図版 44、45)

63、64は甕形土器で口縁部から胴部上半の残存である。63は「く」の字状に折れ曲がる口縁に端部は上方にわずかに伸び、端部に凹線文を施す。64は折れ曲がる口縁に端部は上方にわずかに伸び、端部に3条の凹線文を施し、頸部には押圧突帯文を貼り付け、直下には布目の押圧痕が看取できる。

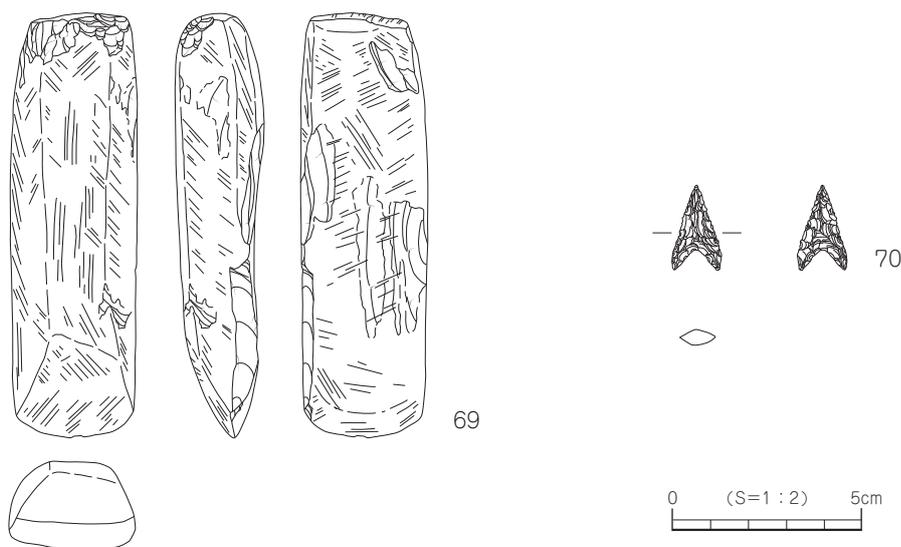
65は壺形土器。上下に拡張された口縁部端面に縦方向に刻目を施した後、凹線文6条を巡らせる。また端面に円形浮文を貼り付ける大型品である。66は弥生土器の蓋である。67はくびれの上げ底で小型品の底部である。68は、おそらくは複合口縁壺の二次口縁部と思われるが、器台口縁部の可能性もある。

表土・表採遺物（図70、図版45）

69、70は石製品である。69は緑泥片岩製の磨製石斧である。刃部は両刃で体部は一部自然面が残るがそのほかは全面磨かれた小型の完形品である。70はサヌカイト製の石鏃で茎部は凹基式の無茎で扱られた完形品である。



第69図 包含層出土遺物実測図



第70図 表土・表採出土遺物実測図

遺構一覧

－凡例－

1. 本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
2. 遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は、以下とした。

遺構一覧表・遺物観察表 ー凡例ー

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構一覧表

規模欄 () : 現存検出長を示す。

(3) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) ⊕ → 口縁部、⊙ → 胴部

胎土欄 胎土欄では混和材を略記した。

例) 石 → 石英、長 → 長石、金 → 金ウンモ、赤 → 赤色土粒。

() 中の数値は混和材粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～3) → 「1～3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略号について。◎ → 良好、○ → 良、△ → 不良。

表2 竪穴住居一覧

竪穴 (S I)	調査区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	A区	隅丸方形	4.2 × 1.7 × (0.3～0.06)	黒褐色シルト (2mm 砂岩) ほか	柱穴2基、炉1基、周壁溝	弥生土器片	弥生時代後期後葉	
1	C1区	円形	5.2 × 9.2 × 0.1	暗褐色土シルト質粘性弱、締まりあり	炉1基、柱穴7基、周壁溝2条、ベッド状の高まり	弥生土器片、紡錘車、石鏃、石斧、砥石	弥生時代中期後葉	拡張住居
1	C2区	隅丸方形	(1.0) × 4.8 × 0.15	-	柱穴2基、炉跡、焼土	弥生土器片、石庖丁	弥生時代後期後葉	
3	C2区	円形	(6.1) × (2.8) × 0.1	黒褐色シルト質粘性弱、締まりあり	柱穴2基、炉跡	弥生土器片、高坏	弥生時代中期中葉	
4	C2区	円形	(3.3) × (2.8) × 0.1	黒褐色シルト質粘性弱、締まりあり	柱穴2基、焼土	弥生土器、分銅形土製品、炭化桃核、紡錘車	弥生時代中期後葉	
1	D区	円形	(-) × (-) × 0.25	黒褐色シルト 黒色シルト	土坑	弥生土器片	弥生時代中期後葉	

表3 掘立柱建物一覧

掘立 (SB)	調査区	方向	規模 (間)	桁行		梁行		出土遺物	時期	備考
				実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)			
1	A区	東西	1 × 1 間	3.7	3.7	2.7	2.7	弥生土器片	弥生時代中期後葉	SP5、SP6、SP9、SP10
2	A区	不明	1 × 1 間以上	3.6	3.6	-	-	弥生土器片	弥生時代中期後葉	SP8、SP15

表4 土坑一覧

(1)

土坑 (SK)	調査区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
2	A区	隅丸方形	逆台形	(1.8 × 0.92 × 0.38)	黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色シルト	弥生土器片	弥生時代後期後葉	北側部分のみの検出
5	A区	円形	逆台形	0.55 × 0.54 × 0.24	黒褐色シルト粘性弱、締りあり	甕、緑色片岩製二次加工剥片、分銅形土製品	弥生時代中期後葉	

揚り畑遺跡7次調査

表5 土坑一覧

(2)

土坑 (SK)	調査区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
3	B区	不明	逆台形	(1.05 × 4.6 × 0.27)	暗褐色シルト、ほか	長頸壺	弥生時代後期後葉	炭化物検出
4	B区	不定形な円形	逆台形	6.0 × 4.8 × 0.3	-	甕、壺	弥生時代中期後葉	内部に2基の柱穴
4	C1区	半円形	皿状	(5.61 × 1.05 × 0.28 ~ 0.36)	黒褐色シルト (炭化物粒少量含)	鉢、甕、砥石	弥生時代後期後葉	北辺に溝状の凹み
5	C1区	半円形	逆台形	(0.8) × 5.0 × 0.1	黒褐色シルト、ほか	打製石斧、 弥生土器片	弥生時代中期後葉	段状の掘り込み
4	C2区	隅丸方形	逆台形	(1.2) × 2.5 × 0.15	黒褐色土シルト質粘性弱、縮まりあり	弥生土器片、石庖丁	弥生時代中期後葉	
1	E区	隅丸方形	逆台形	(2.2) × 1.3 × 0.21	黒色土シルト質粘性：弱、縮まりあり	-	弥生時代中期後葉	
2	E区	不明	皿状	(1.7) × 1.7 × 0.40	黒褐色シルト粘性弱、縮りあり	-	弥生時代中期後葉	

表6 柱穴一覧

柱穴 (SP)	調査区	平面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
13	A区	楕円形	0.55 × 0.46 × 0.13	暗褐色シルト粘性弱、縮りあり (2mm 砂岩ごく少量) 黒褐色シルト粘性弱、縮りあり (2mm 砂岩ごく少量)	甕形土器	弥生時代中期後葉	
18	A区	隅丸方形	0.72 × 0.59 × 0.60	黒褐色土シルト粘性弱、縮まりあり、ほか	甕底部片	弥生時代中期後葉	断面形は段堀状
8	B区	円形	0.58 × 0.55 × 0.29	黒褐色シルト粘性弱、縮まりあり	鉢形土器	弥生時代中期後葉	
1	E区	不定形	0.90 × 0.68 × 0.28	黒色土シルト質粘性弱、縮まりあり	甕胴部片 動物形土製品	弥生時代中期後葉	

遺物観察表

表7 出土遺物観察表 (土製品)

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
2	鉢	口径 8.5 器高 7.2 底径 2.5	薄い体部。口縁は直立する。体部下位から底部 1/2 程黒斑。	口縁 マメツ 体部 ハケメ 底部 ナデ	口縁 マメツ 体部 ハケメ 底部 ナデ	浅黄 にぶい黄橙	長・石 (2) ○		31
3	甕	底径 6.8 残高 18.6	突出した厚手の底部。	体部 ハケメ? 底部 ナデ	体部 ケズリ 底部 ケズリ	浅黄橙・橙・ 灰白・オリ ブ黒 灰・黄灰	長・石 (0~ 6)。△		31
4	鉢	口径 23.7 器高 7.0	底部に径 1cmの円形ボタン状突起を貼り付ける。半円状の体部。	口縁 ミガキ 体部 ミガキ 底部 ミガキ	口縁 ハケメ・ ミガキ 体部 ハケメ 底部 ナデ	橙 橙	長 (3) ◎		31
5	複合口 縁壺	口径 13.8 器高 12.6	口縁部外面は無文。	縦方向のハケメ (7本/1cm)	ハケメ (7本/1cm)	橙 橙	長・石 (6) ◎		31
6	甕	残高 6.0	頸部に突帯文。	キザミ突帯 ハケメ	ナデ	橙・浅黄橙 淡黄	長・石 (0~4) ◎		31
9 10	分銅形 土製品	長さ 10.1 幅 6.6 厚さ 2.2	9下部、10上部で一体。T字状の眉と鼻。両眼は刺突文。口は単孔。両側は眉を境に縦2ヶ所の穿孔、背面に貫通。	ナデ	ナデ	黒褐 にぶい褐	-		32
11	甕	口径 18.5 器高 14.5 底径 17.7	張りの弱い胴部。口縁は「く」の字状に外反。外面は全体的にスス残存。	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁 ヨコナデ 体部 枝ナデ	にぶい褐 褐	長 (3) ◎		33
12	甕	口径 (19.8) 残高 10.2	やや張った胴部。「く」の字状に外反。	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラミガ キ	黄橙 橙	長 (3) ◎		33
13	甕	底径 3.4 残高 4.0 0.6	底部片。平底。	体部 ハケメ 底部 ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい橙	長・石 (0~4) ◎		32
14	高坏	口径 15.1 器高 13.2 底径 一	脚上部4条の外周する沈線。坏部口縁に7条の沈線。口縁部沈線直下に「ノ」字状の刺突文。	口縁 ナデ 体部 ナデ・ヘラミガ キ	口縁 ナデ 体部 ヘラミガ キ 底部 ナデ	橙 橙	長・石 (0~3) ◎		33
15	長頸壺	口径 8.4 器高 32.2 底径 2.2	ややひずんだ球形胴部。底部に径 3cmのボタン状の突出部を持つ。突出部はわずかに窪む。頸部からやや内傾して直立する口縁部は長く伸び、端部でわずかに外反する。	口縁 ナデ・ヨコハ ケ 体部 タテハケ後ミ ガキデ	口縁 ヨコハケ 体部 ナデ後ユ ビオサエ	橙・にぶい黄 橙・黒褐 橙	長・石 (0~3) ◎		34
16	甕	口径 (25.0) 残高 24.3	口縁部は「く」の字状に折れ曲がり外反する。頸部に断面三角の突帯。	口縁 ヨコナデ 頸部 刻み目突帯 体部 ミガキ	口縁 ヨコナデ 体部 ミガキ	黒褐・橙・明 赤褐 にぶい橙・黒 褐	長・石 (0~4) やや良		35
17	甕	口径 (25.8) 残高 13.85	口縁部は「く」の字状に折れ曲がり外反。端面は「コ」の字状で刻目。頸部に指頭押圧刻目突帯。	口縁 ヨコナデ 頸部 布目押圧文突帯 体部 ナデ後ミガキ	口縁 ヨコナデ 体部 ナデ後ミ ガキ	明褐・にぶい 黄褐・黒褐 橙・にぶい黄 橙	石・長 (0~5) ◎		34
18	甕	口径 30.7 器高 17.8 腹径 33.5	口縁にキザミ目施す。頸部に指頭圧痕付貼付突帯(布目)あり。体部に刺突文あり。	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ・ミガ キ	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ	明褐 褐	長 (3) ◎		35
19	甕	口径 29.4 器高 27.9 腹径 27.6	「く」の字状に折れ曲がり外反する口縁部に刻目。頸部に指頭圧痕付貼付突帯(布目)。	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ・ミガ キ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラケズ リ	にぶい褐 にぶい褐	長 (3) ◎		36
20	壺	口径 14.4 残高 13.2	口縁部は外反して内傾。端面わずかに上方に拡張、口縁外面は無文。頸部に布目押圧突帯。	口縁 ヨコナデ 体部 ミガキ	口縁 ヨコナデ 頸部に布目押 圧突帯 体部 タテハケ	褐・橙・灰褐 橙・にぶい赤 褐・暗赤褐	石・長 (0~5) ◎		36
21	鉢	口径 10.65 器高 9.9 底径 5.45	上げ底の底部。胴部は開きながら立ち上がる。	口縁 ヨコナデ 体部 ミガキ 底部 ナデ	口縁 ヨコナデ 体部 ナデ	橙・明赤褐 黄褐・明褐	長 (2) ◎		37
24	甕	口径 18.25 器高 16.4 腹径 22.05	大きく「く」の字状に折曲げて外反する口縁。端部は上方に拡張。端部外面には凹線文2条。外面、内面ともうすくスス残存。	口縁 ヨコナデ 体部 上部 タテハケ 体部 下部 タテミガ キ	口縁 ヨコナデ 体部 ハケメ・ ナデ	明赤褐 明赤褐	石・長 (1) ◎		37

揚り畑遺跡7次調査

表8 出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	甕	底径 (4.0) 残高 12.8	平底の底部	体部 ハケメ 底部 ナデ	体部 ハケメ?・ ナデ? 底部 指頭痕	にぶい橙・に ぶい黄橙 浅橙・黄灰	石・長(0~4) ◎		38
26	紡錘車	長さ 3.4 幅 4.0 厚さ 0.6	土器胴部の転用品。	ハケメ	ハケ	橙 橙	長・石(0~2) ◎		37
37	鉢	口径 7.7 器高 5.5	やや尖り気味な丸底の底部。外面には全面にタタキ痕が残る。底近くに1か所黒斑あり。	口縁部 ナデ 体部 平行タタキ 底部 粗いナデ	ユビナデ	にぶい橙 にぶい橙	長・石(0~2) ◎		39
38	鉢	底径 (10.6) 残高 5.05	丸底の小型の鉢で底部に三条の線刻。	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐・ 褐灰・黒褐 橙・浅黄・ 黄灰	長・石(0~6) ◎		39
39	碗	口径 (11.5) 残高 6.4	口縁から底部にかけてほぼ残存する。丸底の小型の鉢で底部はわずかに面をなす。	ナデ	ハケメ	にぶい褐・ 灰黄褐 橙	長・石(0~4) ◎		39
40	甕	口径 15.7 器高 30.5 腹径 21.1 底径 3.8	外反外傾する口縁を持ち、胴部外面は明瞭なタタキ痕。内外面ともにスス残存。	口縁 ヨコナデ 体部 平行タタキ	ハケメ	にぶい黄橙・ 橙 にぶい黄橙	長 (5) ◎		40
43	紡錘車	長さ 4.0 幅 3.75 厚さ 0.6	土器胴部の転用品。中央に穿孔。外形面取り。	ミガキ	ミガキ	黄灰 にぶい黄褐	長・石(0~2) ◎		40
46	壺	口径 7.15 器高 19.2 腹径 16.85 底径 6.85	平底の底部。胴部は張り、頸部から口縁に8条の凹線。また頸部沈線直下に「ノ」字状の列点文。端部は外傾し直下に4ヶ所の穿孔。	口縁 ナデ 体部 ナデ・ヘラミガキ 底部ナデ	ナデ	橙 橙・暗灰黄	長・石(0~2) ◎	S I 1 拡 張住 居内	41
47	高坏	高さ 10.25	坏部粘土板充填。	ヘラミガキ	ハケメ	明赤褐 明赤褐	長・石 (2.5) ◎		41
48	壺	底径 (6.0) 残高 5.7	上げ底の甕または壺の底部。	体部 ヘラミガキ 底部 ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙・ にぶい橙 褐灰	石・長(0~2) ○		41
50	分銅形土製品	長さ 4.8 幅 3.8 厚さ 1.1	角の取れた方形。上部右側のみ残存。眉直下に孔を穿ち側面まで達し貫通する。爪で半円形の目を表現。	ナデ	ナデ	にぶい褐 灰黄褐	石粒 (0~6) ◎		43
51	紡錘車	長さ 3.0 幅 3.85 厚さ 0.7	中央に穿孔。土器胴部の転用品。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙・ にぶい橙 にぶい黄橙	長・石(0~2) ◎		43
52	甕	残高 24.4 底径 37.7	上げ底の底部。口縁は「く」の字状に外反。内面は稜を持つ。貼り付け突帯。	口縁 ナデ 体部 ナデ・ヘラミガキ 底部ナデ	口縁 ナデ 体部 ナデ	橙・褐・にぶ い橙・黒褐 橙・にぶい褐	長・石(0~4) ◎		42
53	壺	長さ 24.9 幅 8.0 厚さ	平底の底部。貼り付け断面三角突帯文。頸部に貼り付け突帯、手指による押圧の刻みが2カ所。	ハケメ頸部 ヨコナ デ 体部 ミガキ	ナデ ハケメ	橙・褐・に ぶい褐・黒 褐 橙・黒褐	長 (5) ◎		43
54	壺	器高 8.0	頸部に断面三角突帯文。	ナデ ハケメ	ヘラミガキ ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	長・石 (1) ◎		43
56	壺	器高 20.0 腹径 18.6 底径 5.65	体部外面に黒斑。(ややタスキ状のうすい灰色)	体部 ヘラミガキ 底部 ナデ	ナデ	明赤褐 にぶい黄橙	石・長 (2.5) ◎		44
59	紡錘車	長さ 3.4 幅 3.3 厚さ 0.5	土器胴部の転用品。側面は面取り。穿孔なし。(未製品)	ミガキ	ヘラケズリ	にぶい褐 にぶい橙	石粒 (0~1) ◎		43
60	高坏	器高 9.05 底径 11.5	脚柱上部に4条、裾部に3条の沈線。脚柱中位に貫通した矢羽根透かし1段。裾端部は段状に拡張し、1条の沈線。	ハケメ	ナデ	橙 橙	石・長 (2) ◎		44
61	壺	残高 6.3	頸部に断面三角形の突帯2条。	ナデ マメツしている	ヨコナデ	黒褐 黒褐	長・石(0~4) ◎		44

遺物観察表

表9 出土遺物観察表 (土製品)

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	甕?	底部 残高 (6.0) 6.95	くびれの上げ底。	体部 底部 ハケメ? ナデ	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐	石・長(0~2) ◎		45
62	動物 形土 製品	長さ 幅 厚さ 3.05 3.65 1.5	口は筒状に穿ち、両眼は刺突。両耳は頭部側面に竹管文状。頭頂部及び口直下は軽く押さえてつまみあげる。内部は空洞。	ナデ	ナデ	橙 浅黄橙	石粒(0~1) ◎		45
63	甕	口径 残高 17.4 3.9	「く」の字状に折れ曲がる口縁。端部は上方にわずかに伸び、凹線文を施す。	口縁 体部 ヨコナデ ハケメ	口縁 体部 ヨコナデ ハケメ	橙・黒褐 橙	石粒(0~1) ◎		44
64	甕	口径 残高 (19.6) 6.4	折れ曲がる口縁。端部は上方にわずかに伸び、3条の凹線文。頸部に押圧突帯文、直下に布目の押圧痕。	頸部 頸部 ヨコナデ 指頭押圧突帯 体部 ミガキ	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石・長(0~3) ◎		45
65	壺	口径 残高 (29.0) 11.7	上下に拡張された口縁部。端面に縦方向に刻み目後、凹線文6条。端面に円形浮文を貼り付ける。大型品。	口縁 体部 ヨコナデ ハケメ	口縁 体部上部 ヨコナデ ハケメ 体部下部 ヘラ ミガキ	明赤褐 にぶい橙・ 橙	石・長(0~7) ◎		45
66	蓋	口径 器高 底径 5.7 2.6 6.0	弥生土器の蓋。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐 にぶい黄褐	石粒(0~1) ◎		45
68	壺また は器台	長さ 幅 厚さ 2.15 3.00 1.05	複合口縁壺二次口縁部または器台口縁部。波状文に円形浮文。	波状文	ミガキ	橙 橙	石粒(0~1) ◎		45
-	鉢	底径 残高 6.2 6.4	体部 刷毛のようなものでタテにナデている。	体部 底部 ナデ ヨコナデ	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	長・石(0~4) ◎		遺構 掲載 無し

表10 出土遺物観察表 (石製品)

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	石鏃	ほぼ完形一部欠損	サヌカイト	2.40	1.65	0.30	1.50		31
7	砥石	完形	砂岩	21.60	15.20	12.20	5,700		32
8	二次加工剥片	2/3	緑色片岩	6.50	10.10	1.30	92.60		32
22	石鏃	完形	サヌカイト	3.30	1.60	0.50	2.20		37
23	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.20	1.30	0.40	2.50		37
27	石斧	完形	緑泥片岩	9.50	4.95	0.65	54.50	石庖丁を転用した石斧	38
28	磨製石斧	完形	緑泥片岩	5.60	2.00	1.80	33.00		38
33	磨製石斧	完形	緑泥片岩	14.80	2.25	2.00	109.50		38
29	石鏃	脚部わずかに欠損	サヌカイト	2.90	1.90	0.40	2.00		37
34	石鏃	未製品	安山岩	4.10	2.80	0.60	5.00	被熱あり	37
35	石鏃	完形	サヌカイト	3.90	2.00	0.75	4.50		38
36	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.35	1.40	0.20	0.50		38
31	砥石	完形	砂岩	37.85	22.20	9.90	13,600		38
32	砥石	完形	結晶片岩	35.50	21.40	12.00	12,500		39

揚り畑遺跡7次調査

表 11 出土遺物観察表 (石製品)

(2)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
30	砥石	両端欠損	凝灰岩	8.60	4.20	3.10	155.20		39
41	砥石	一部欠損	砂岩	30.50	20.70	7.50	5,500		39
42	石斧	約 1/2	緑泥片岩	13.70	-	1.20	126.50	全体的に剥離しているところが多い。	39
44	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.35	1.40	0.45	1.50		40
45	石鏃	完形	サヌカイト	2.85	1.75	3.50	1.50		40
49	砥石	下半分欠損	砂岩	18.90	16.10	9.00	3,500		41
55	石庖丁	約 1/2	緑泥片岩	9.10	3.80	0.50	28.00		43
57	磨製石斧	約 1/2	緑泥片岩	9.00	2.90	3.50	138.00		43
58	磨製石斧	約 1/2	緑泥片岩	8.10	6.40	3.00	186.50		43
69	磨製石斧	完形	緑泥片岩	11.30	3.40	2.40	149.30		45
70	石鏃	完形	サヌカイト	2.25	1.30	0.45	0.50		45

第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

揚り畑遺跡は、重信川上流部の北方・松瀬川地区に位置し、弥生時代中期～後期の集落跡に伴う遺構・遺物が検出されている。

本報告では、住居跡から出土した炭化材・種実遺体を対象として、以降の年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用・植物利用を検討するための樹種同定と種実同定を実施する。

1. 試料

試料は、A区 SII から出土した炭化材 1 点 (炭化物 3) と、C 2 区 SI3 埋土から出土した種実遺体 1 試料である。炭化材は、不定形の分割状の破片が 1 片ある。残存している中で最外年輪を含む外側 4 年分を年代測定、残りを樹種同定用とする。種実遺体は、破片が 21 片認められる。種実同定を先に行った上で、その結果を踏まえて、同一種の破片 7 片を年代測定用に供する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30 分) 850℃ (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシェウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来

的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施する。分析後は、放射性炭素年代測定対象試料以外の種実遺体を容器に入れて保管する。

3. 結果

放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定の結果を表1、暦年較正曲線図を図1に示す。同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、A区SI1炭化物3が $1,980 \pm 20\text{BP}$ 、C2区SI3埋土が $2,190 \pm 30\text{BP}$ を示す。また、測定誤差を 2σ で計算した暦年較正結果は、A区SI1炭化物3がcalBC40-calAD69、C2区SI3埋土がcalBC361-176である。

測定に用いた試料は、A区SI1炭化物3が広葉樹のハイノキ属ハイノキ節、C2区SI3埋土が広葉樹のモモに同定された。炭化材の解剖学的特徴と種実遺体の形態的特徴を記す。

<炭化材>

・ハイノキ属ハイノキ節 (*Symplocos sect. Lodhra*) ハイノキ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独または2-5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状となる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。

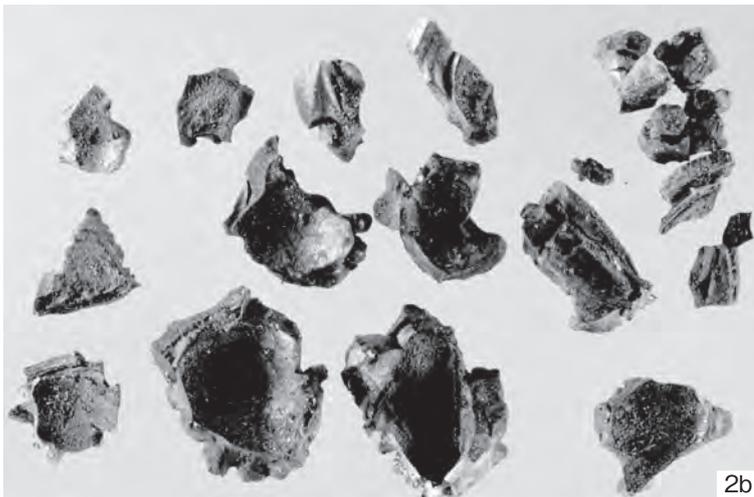
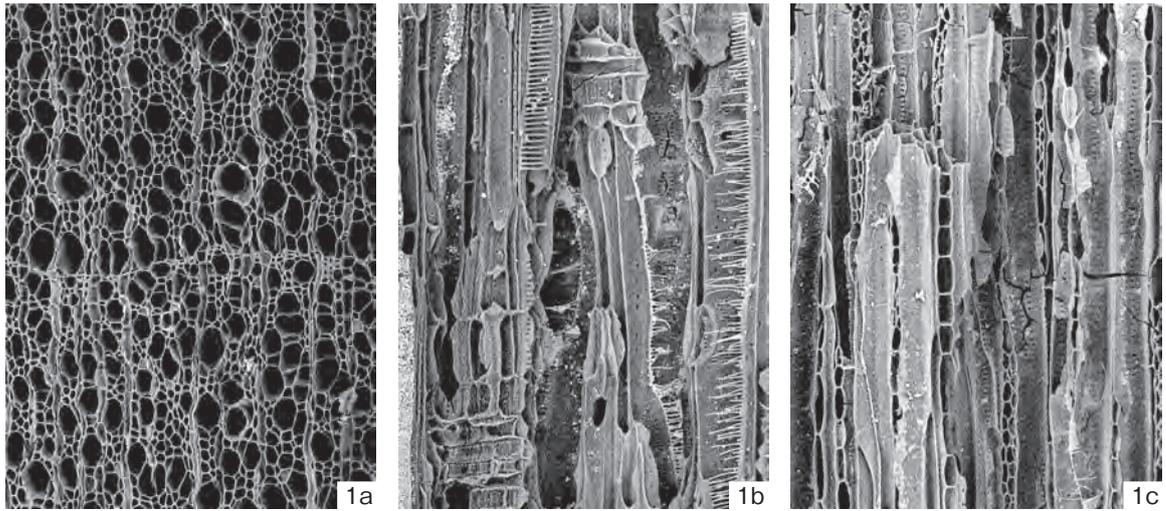
<種実遺体>

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は、炭化しており黒色。完形ならば、長さ1.5～3.2cm、幅1.3～2.2cm、厚さ1.0～1.5cmのやや扁平な広楕円体で、頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。半割した内面は平滑で、1個の種子が入る楕円状の窪みがある。出土核は全て破片で、合計約1個体分である。最大片の大きさは、1.2cmを測る。

4. 考察

A区SI1から出土した炭化材(炭化物3)は、補正年代で $1,980 \pm 20\text{BP}$ 、暦年較正結果(2σ)でcalBC40～calAD69の値が得られた。愛媛県内での測定事例は少ないが、香川県・高知県・広島県等での測定事例(西本,2006)を考慮すると、SI1から出土した炭化材は、弥生時代後期に該当する。なお、



1・ハイノキ属ハイノキ節(A区SI1;炭化物3)
 a :木口,b:柾目,c:板目
 2・モモ核(C2区SI3;埋土)全体写真
 3・モモ核(C2区SI3;埋土)

100 μ m : 1 a
 100 μ m : 1 b, c
 2 mm : 2
 5 mm : 3

第71図 炭化材・種実遺体

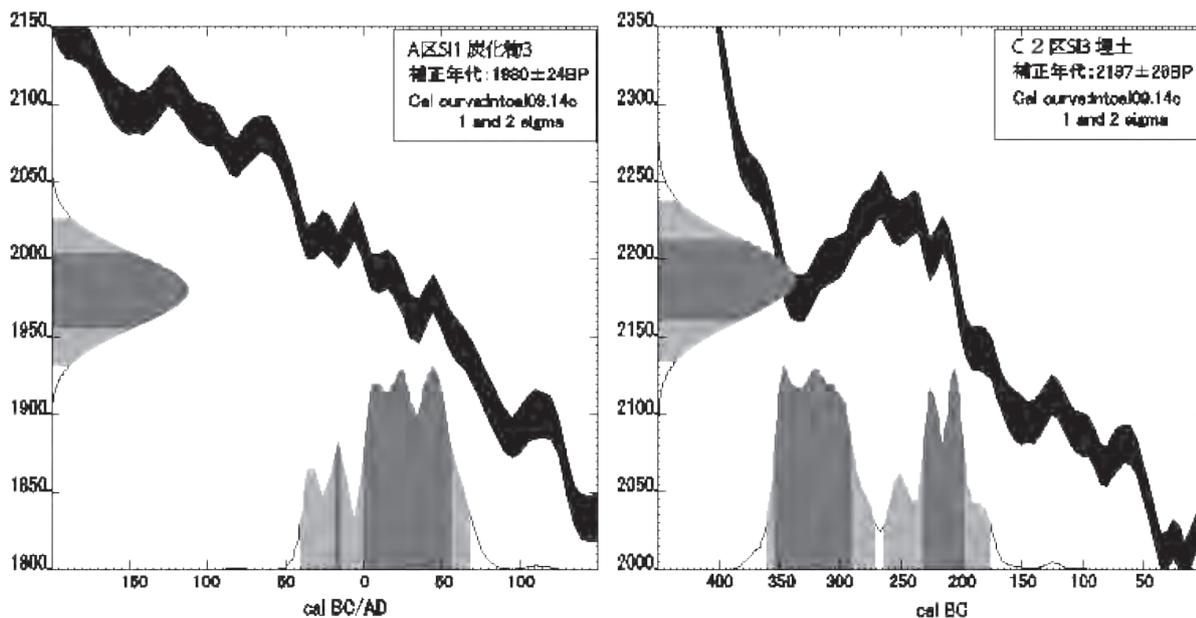
炭化材は、残存する中での最外年輪を含む4年分を測定しているが、樹皮の付着は認められず、破損も見られることから、外側にさらに新しい年輪が形成されていた可能性が残る。

SI2の炭化材は、ハイノキ節に同定された。ハイノキ節は、主に西日本の山地・海岸などの常緑広葉樹林中に生育する常緑高木～低木である。木材は緻密でやや堅硬な部類に入り、切削等の加工は困難ではないとされる。ハイノキ節は、本地域の現在の山地等にも普通にみられる種類であり、当該期においても周辺に生育し、木材の入手は可能であったと考えられる。炭化材の出土状況の詳細が不明であるが、炭化材の形状からは大径木とは考えにくく、比較的小径の木材を利用した可能性がある。

表12 放射性炭素年代測定及び樹種同定・種実同定結果

地区 遺構 試料名	種類	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No	
						誤差	cal BC/AD		cal BP		相対比
A区S11 炭化物3	炭化材 (ハイノキ属 ハイノキ節)	AAA	1,990 ± 20	-25.51 ± 0.53	1,980 ± 20 (1,980 ± 24)	σ	cal BC 17 - cal BC 15	cal BP 1,966 - 1,964	0.035	IAAA- 130246	
							cal AD 0 - cal AD 57	cal BP 1,950 - 1,893			0.965
							2σ	cal BC 40 - cal AD 69			
C2区SI3 埋土	炭化種実 (モモ核)	AAA	2,190 ± 30	-25.32 ± 0.47	2,190 ± 30 (2,187 ± 26)	σ	cal BC 354 - cal BC 291	cal BP 2,303 - 2,240	0.696	IAAA- 130247	
							cal BC 231 - cal BC 199	cal BP 2,180 - 2,148			0.304
							2σ	cal BC 361 - cal BC 271			
							cal BC 264 - cal BC 176	cal BP 2,213 - 2,125	0.408		

- 1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第72図 暦年較正曲線図

C 2 区 S I 3 埋土の種実遺体は、補正年代で $2,190 \pm 30\text{BP}$ 、暦年較正結果 (2σ) で calBC361-176 の値が得られた。この値は、香川県・高知県・広島県等での測定事例 (西本,2006) を考慮すると、弥生時代中期に該当する。

S I 3 より出土した種実遺体は、モモの核に同定された。大小合わせて 21 片の破片があるが、全てモモの核であり、1 個体分程度になることから、本来は同一個体の可能性が高い。モモは、栽培のために大陸から持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や種子が食用、薬用、祭祀等に広く利用される。今回の結果から、本遺跡においてもモモの栽培や果実・核の利用が推定される。

引用文献

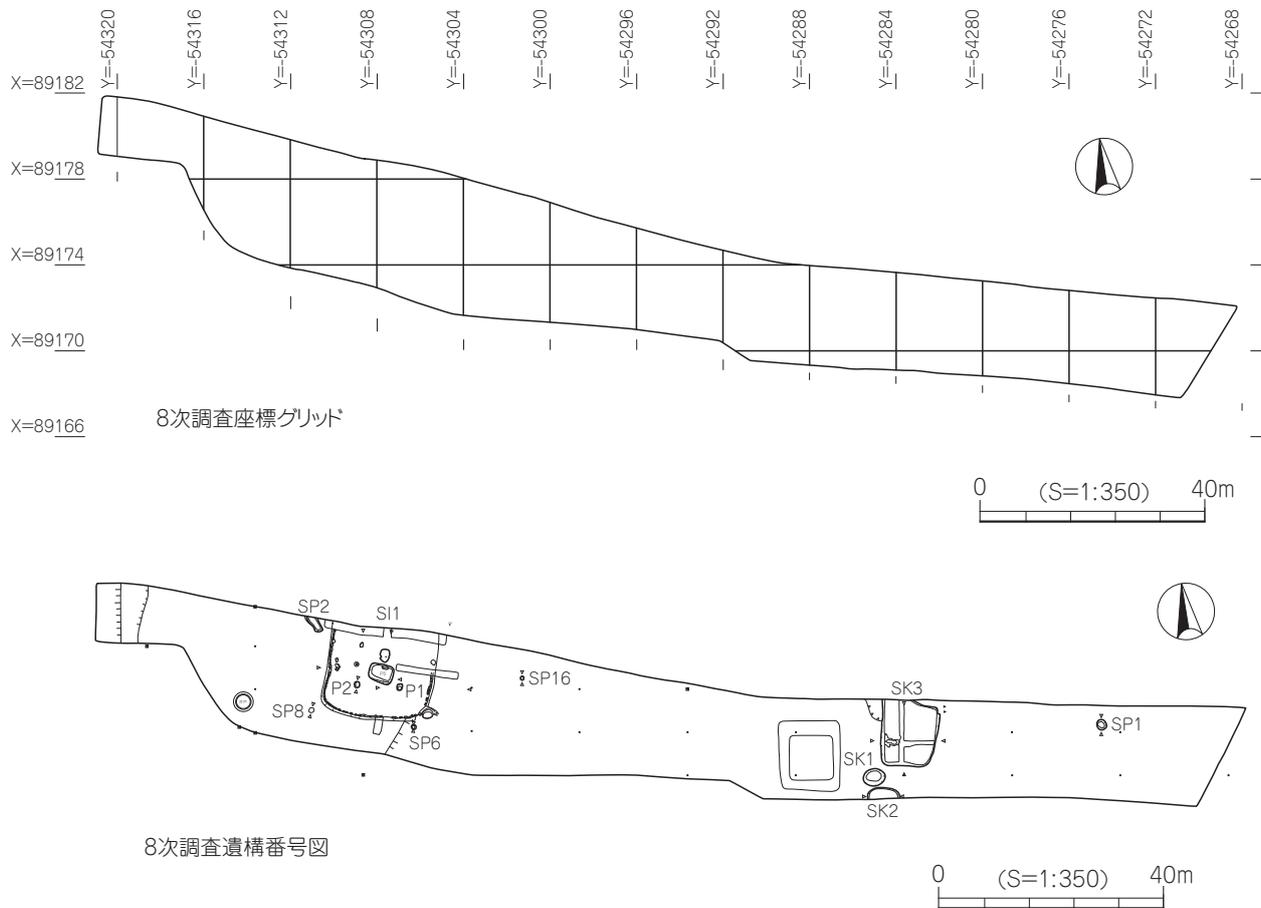
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑. 東北大学出版会,642p.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

第5章 揚り畑遺跡 8次調査

第1節 調査区の立地

揚り畑遺跡 8次調査区域は、平成 24 年度に実施した揚り畑遺跡 7次調査区の東側に位置する。東西長約 53 m、南北幅は中央部付近で約 4.6 mとなる。標高は調査区東端部が約 158 m、西端部が約 157 mであるが、調査区中央部が最も低くなる。調査面積は 253.48㎡である。

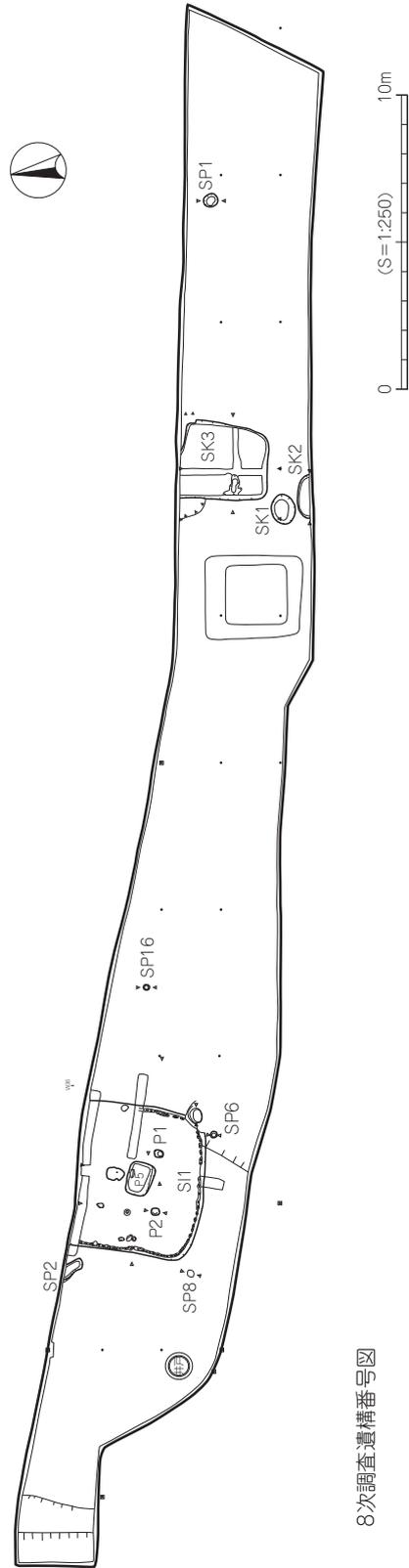
調査期間は平成 25 年 10 月 31 日から平成 26 年 1 月 14 日まで実施した。



第73図 調査地遺構全測図

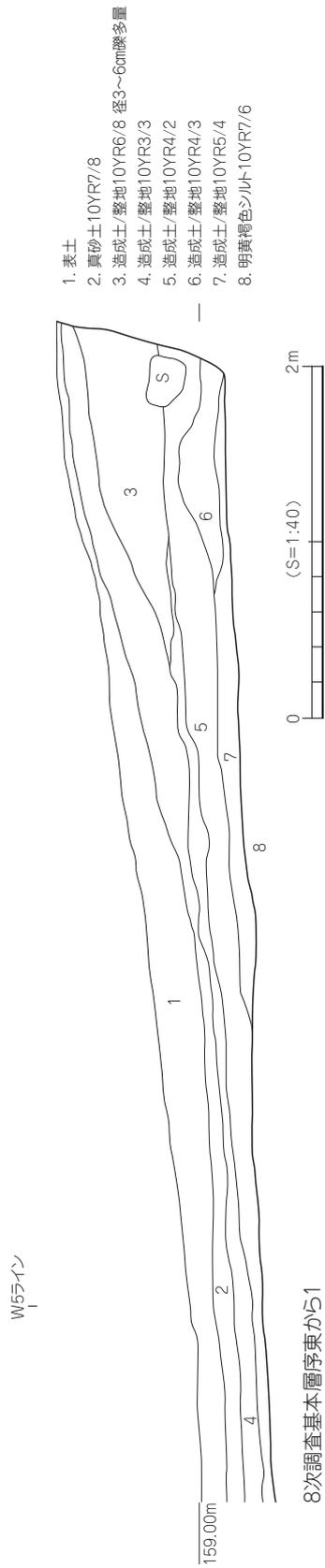
第2節 層位

調査区は東温市ふるさと交流館の西側に隣接し、調査区の東部から西部間の標高差は約 2.3 mあり、東から西へとただらかに傾斜している。東屋やベンチなどが設置された公園的な空間として使用され、それ以前は川上農協の育雛場として使用されていた。調査区の南側の南北間約 1 mは農道として使用されていた。試掘調査の結果、農道から南側の工事予定範囲では削平による影響により遺跡は確認されていない。

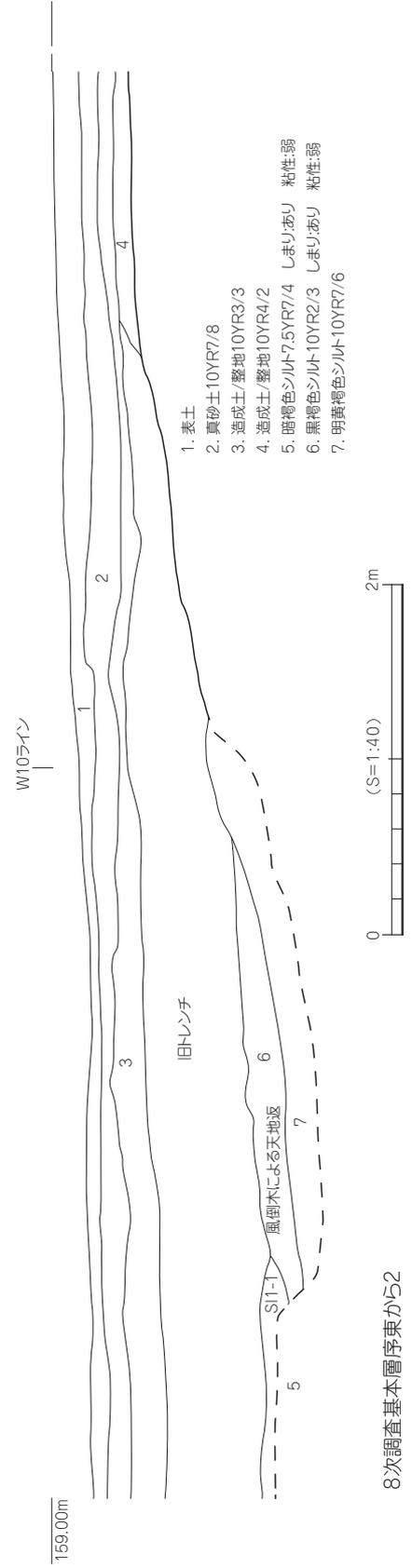


8次調査遺構番号図

第74図 遺構配置図

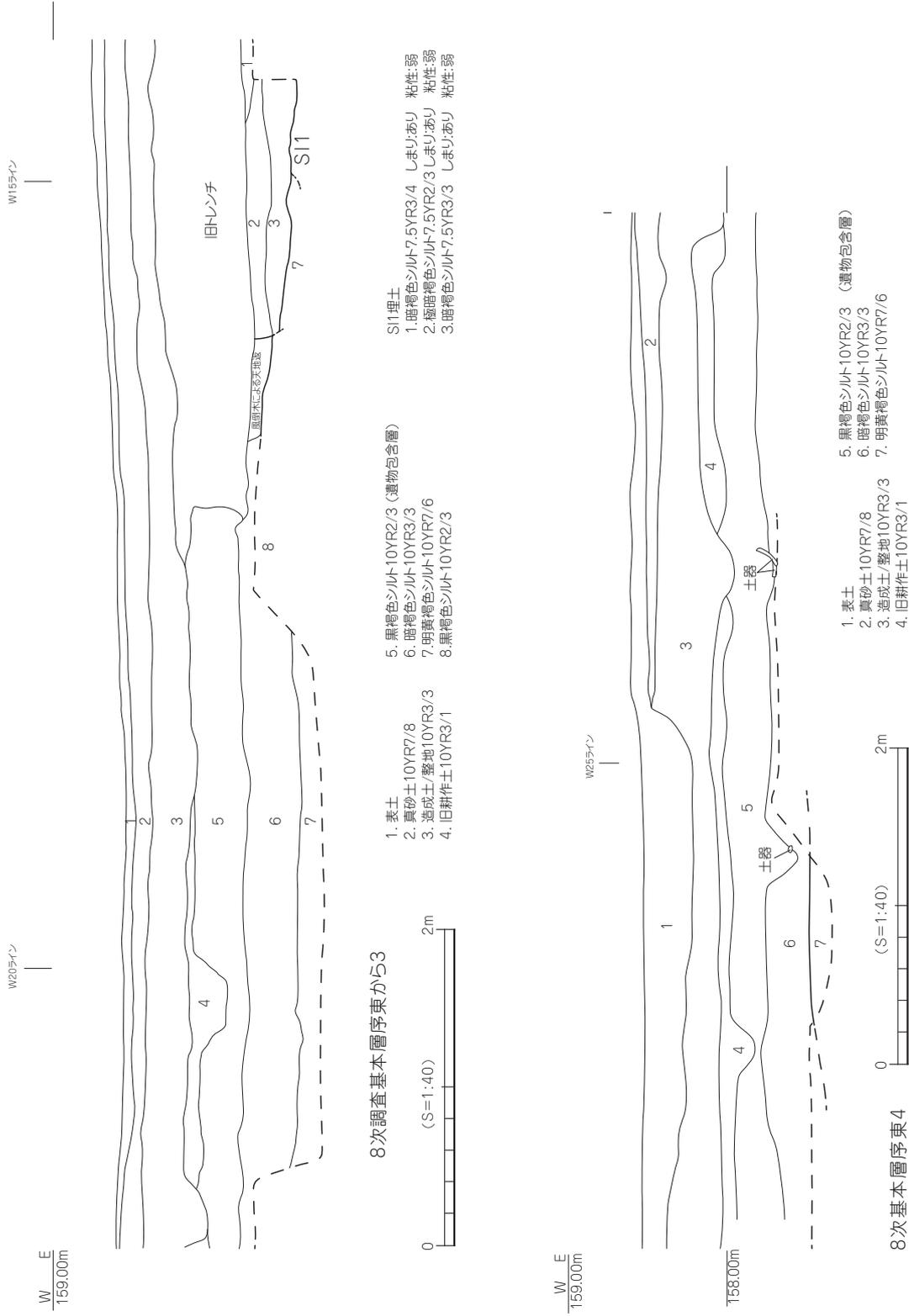


8次調査基本層序東から1

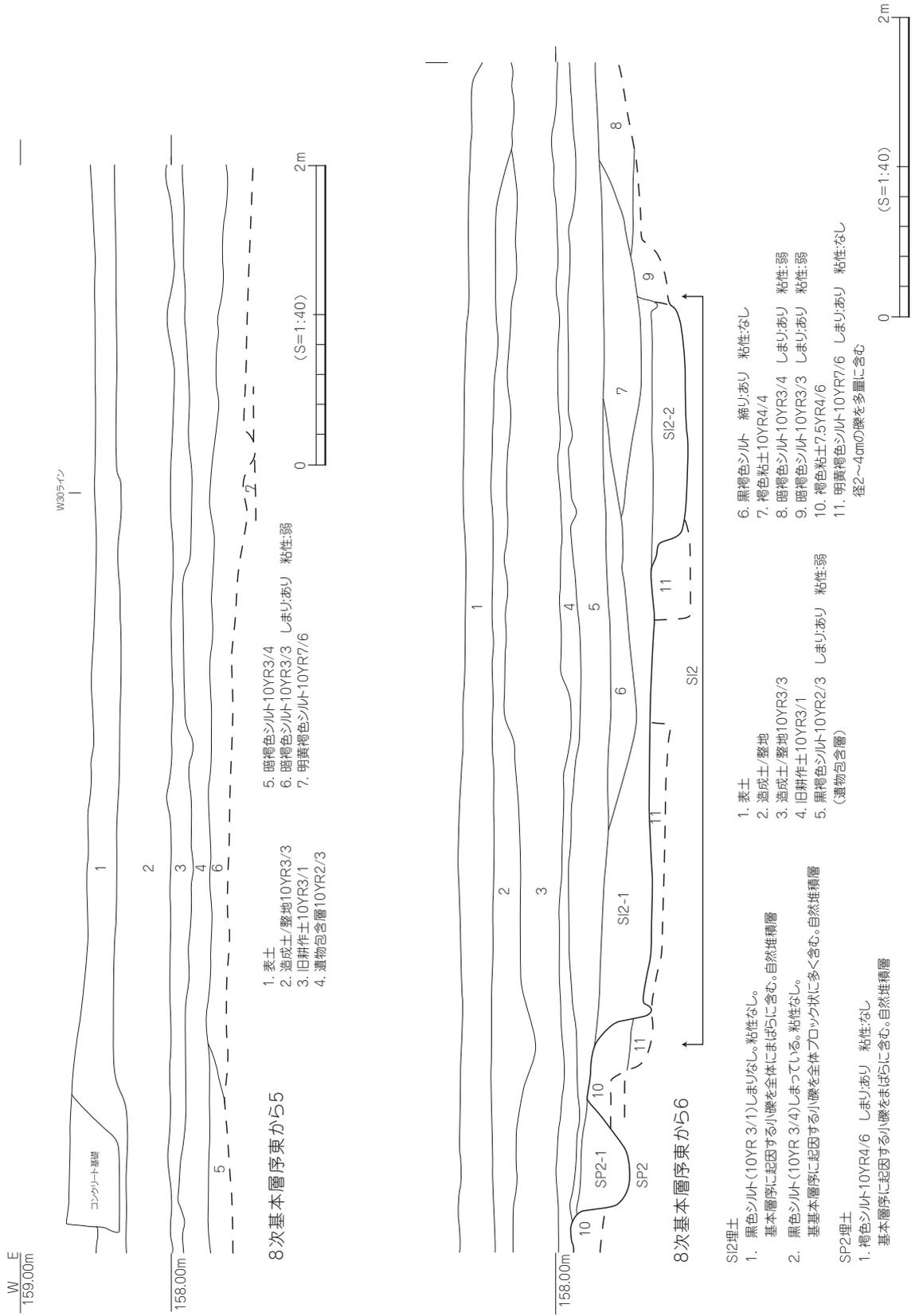


8次調査基本層序東から2

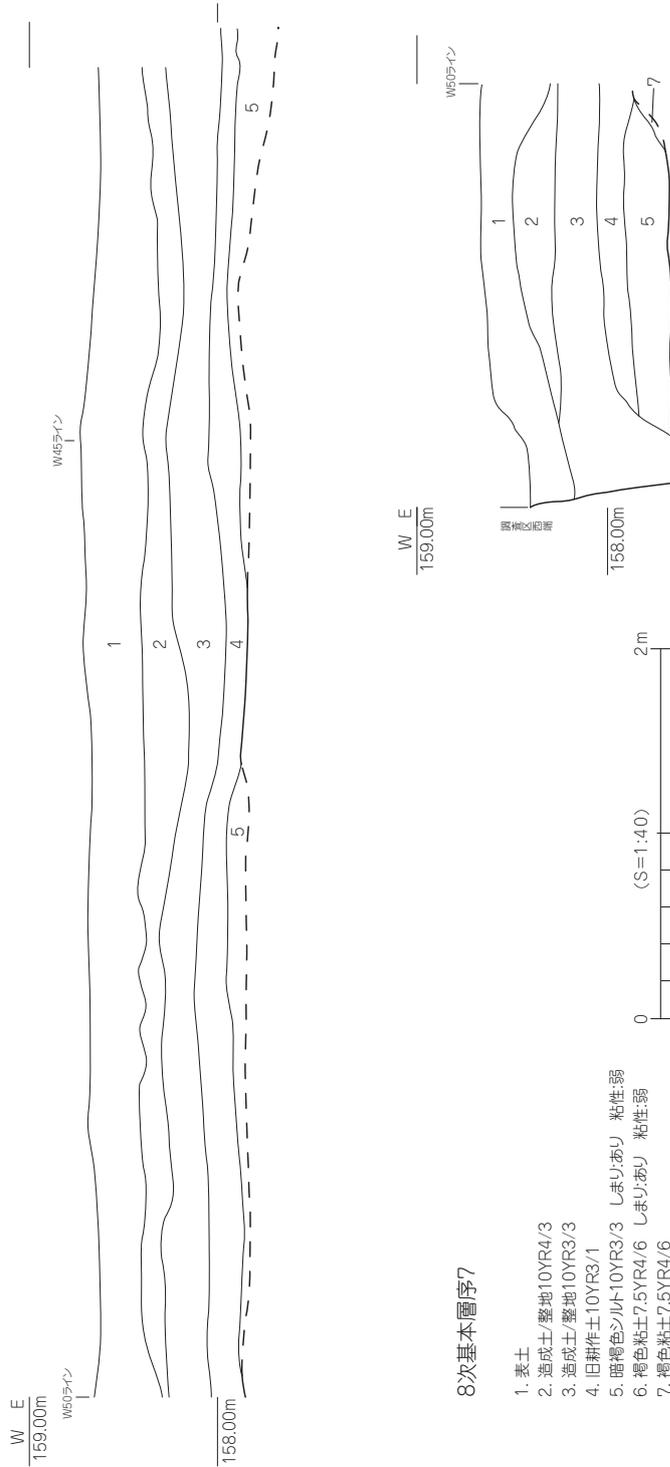
第75図 調査区土層図1



第76図 調査区土層図2



第77図 調査区土層図3



第78図 調査区土層図4

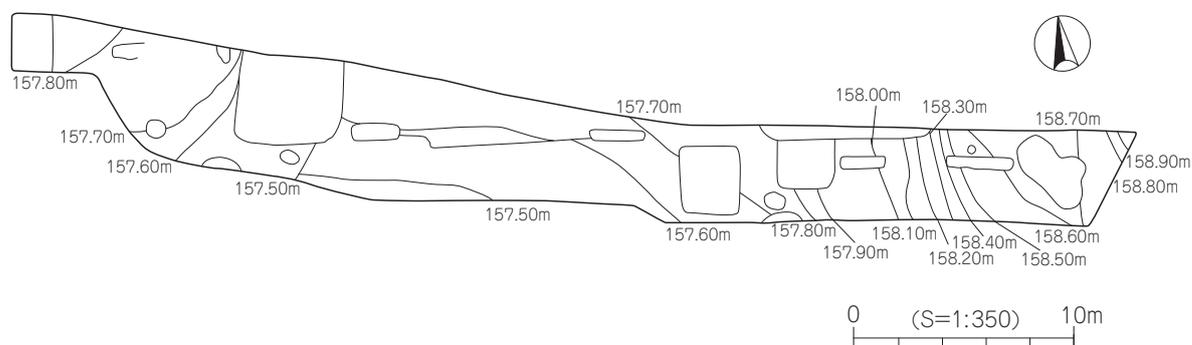
基本的な層位は造成土、旧耕作土、遺物包含層（黒色シルト層）、遺構検出面（赤色シルト層）、地山（和泉砂岩層）となっている。調査区全体で造成土が検出されており、調査区東部は地山直上まで造成土、西部は畑地形成の影響により破壊されている。また調査区北壁において調査区東部から中央部にかけて平成5年度に行われた試掘調査のトレンチ跡が検出された。調査区全体で後世の開発等による影響がみられるが、比較的安定した土層状況が確認できたのは中央部を中心とした範囲のみである。

遺物包含層は調査区中央部で約30cm程度の堆積を確認したが、東西部では確認することはできなかった。遺構検出面は東側以外で確認されており、遺構も本層より掘り込まれている。本層は地元では赤オンジと呼ばれ、揚り畑遺跡での遺構検出面となる。本調査区では中央部で遺物包含層とは異なる黒色シルト層にて遺構を検出した。調査の結果、中央部が本来溝状もしくは低い地形であったが、黒色シルト層が堆積することで平坦な地形となり、そこに遺跡が形成されている。なお、遺物包含層下層から遺物等は出土していない。

第3節 遺構と遺物

遺構と遺物について

調査区全体に造成による盛土が行われており、調査区西側や調査区中央南側の一部では削平や耕作による影響が確認されたが、それ以外では遺構検出面および地山にて弥生時代の遺構を検出することができた。



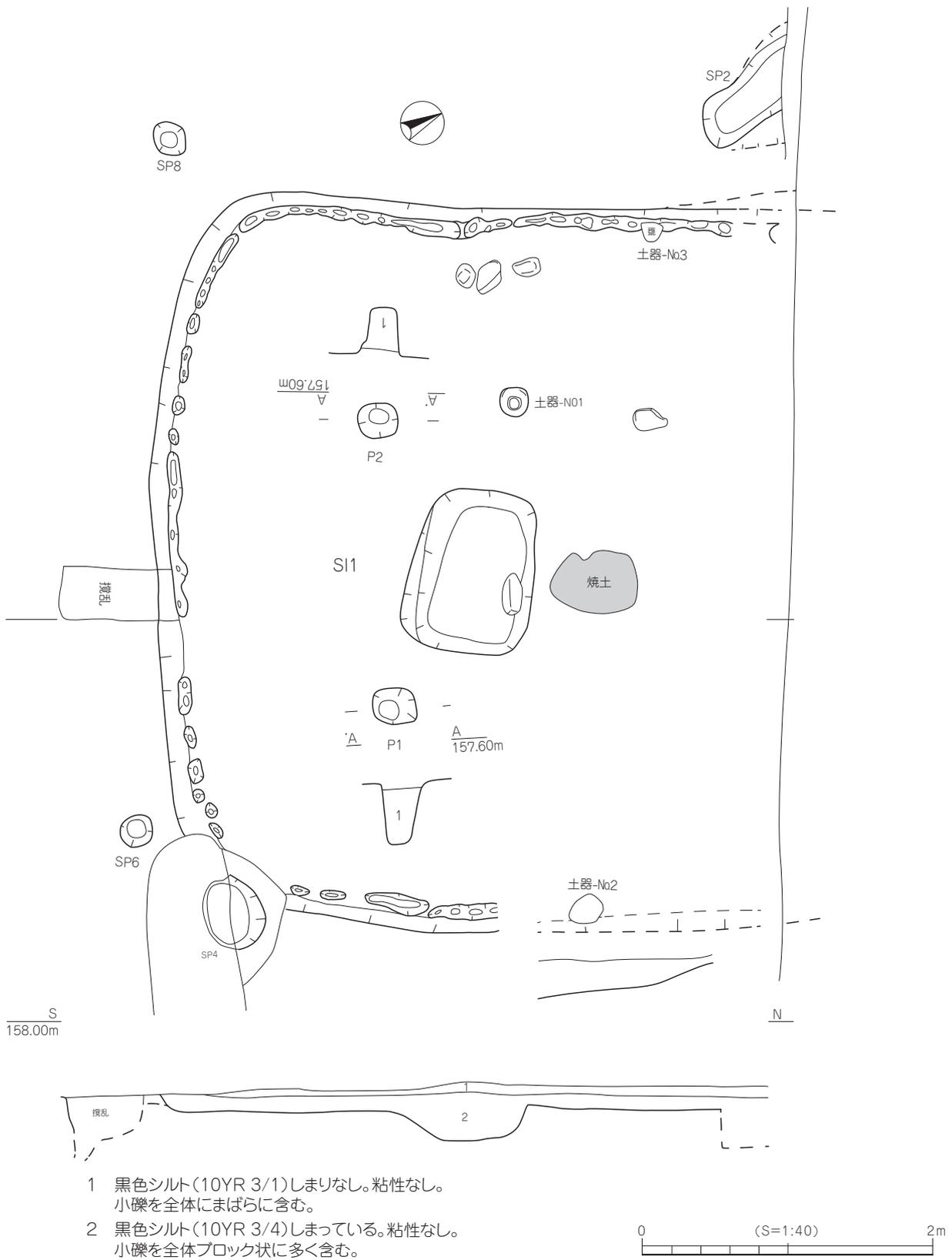
第79図 調査地コンタ図

(1) S11 (図80 図版23、24、25、26)

調査区西側に位置している。調査区の関係から南側部分のみの検出となった。遺構の検出部分は東西約5.0m、南北約4.1m、壁高は東側約30cm、西側約6cmを測る。平面形は隅丸方形と考えられる。内部からは柱穴2基、炉1基、周壁溝を検出した。柱穴はP1が直径約22cm、深さ約35cm、P2が直径約22cm、深さ約42cmを測る。炉は柱穴2基のほぼ中央に位置しており、調査区の関係から南側的一部分のみの検出となった。炉の検出部分は東西約84cm、南北約21cm、掘り込みの深さは約5～6cmを測る。平面形は検出部分が一部であるため不明である。埋土からは焼土及びカーボン片を多数検出している。遺物は遺構内から砥石が出土している。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代後期後葉に位置付けられる。

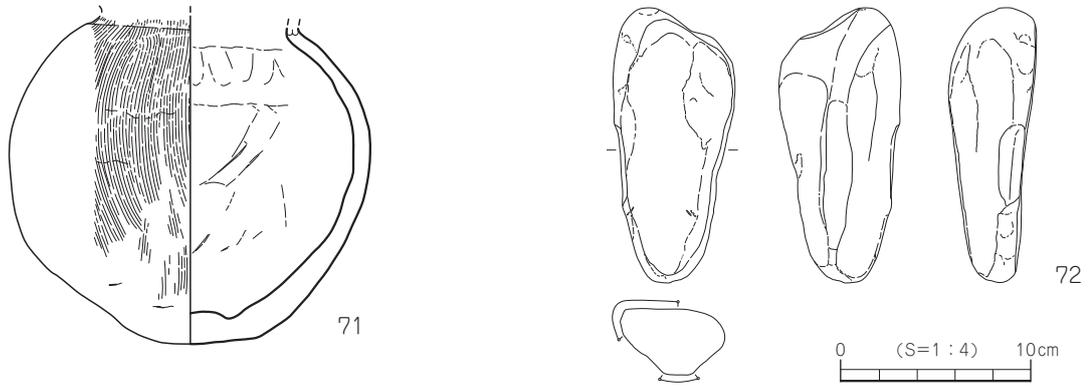
揚り畑遺跡 8次調査



第80図 S11測量図

S I 1 出土遺物 (図 81、図版 46)

71 は弥生土器である。71 は壺形土器で、球形の胴部に底部はわずかに膨らんだ平底で厚い。体部外面はハケ目が顕著である。72 は砂岩製の砥石でほぼ完形品である。表裏両面の一部に使用痕が看取できる。

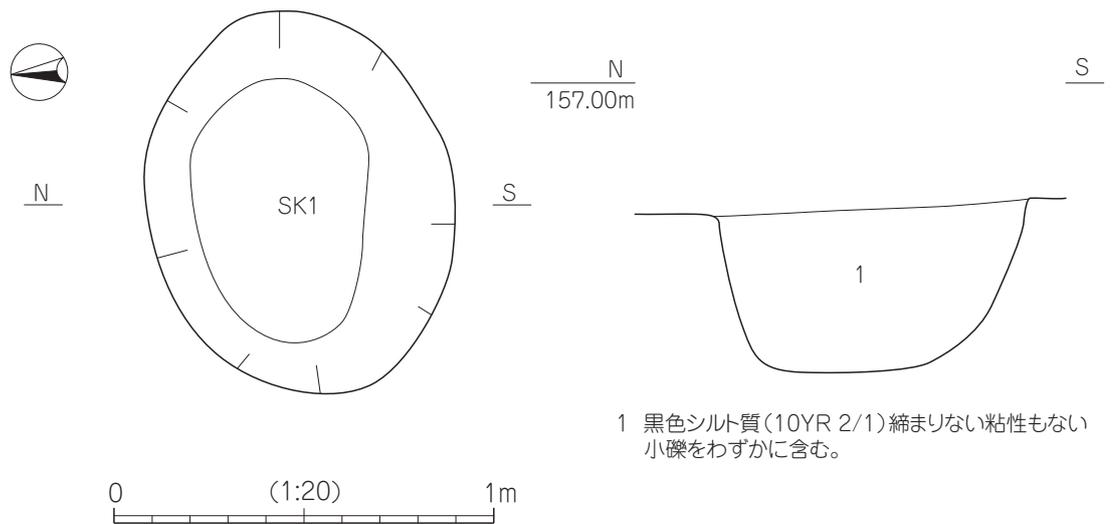


第81図 S I 1 出土遺物実測図

(2) S K 1 (図 82、図版 27、28、29)

調査区中央 S K 3 の南に位置する。平面形態は楕円形を呈し、遺構の規模は南北約 82cm、東西約 1.0m、深さ約 43cm を測る。断面形状は逆台形状を呈する。埋土は黒色シルト質で締まりもなく粘性もない。粒状の小礫をわずかに含む自然堆積層である。遺物は遺構内から弥生土器が出土している。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。

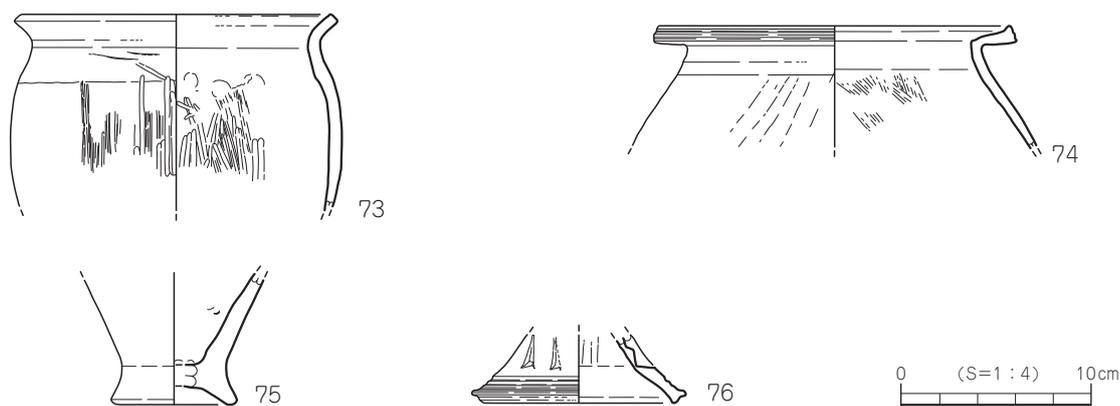


1 黒色シルト質(10YR 2/1)締まりない粘性もない小礫をわずかに含む。

第82図 SK 1 測量図

SK 1 出土遺物 (図 83、図版 47、48)

73、74 は甕形土器である。73 は口縁部から胴部までの残存である。外反する口縁に端部は外傾し平坦でコの字状に仕上げる。74 は体部がやや張り口縁部端面に凹線文2条を施す。端部は上方にわずかに伸びる。75 はくびれの上げ底である。76 は未完通の矢羽根透かし一段を施す高坏で、脚部のみの残存である。裾部に3条の凹線を施す。

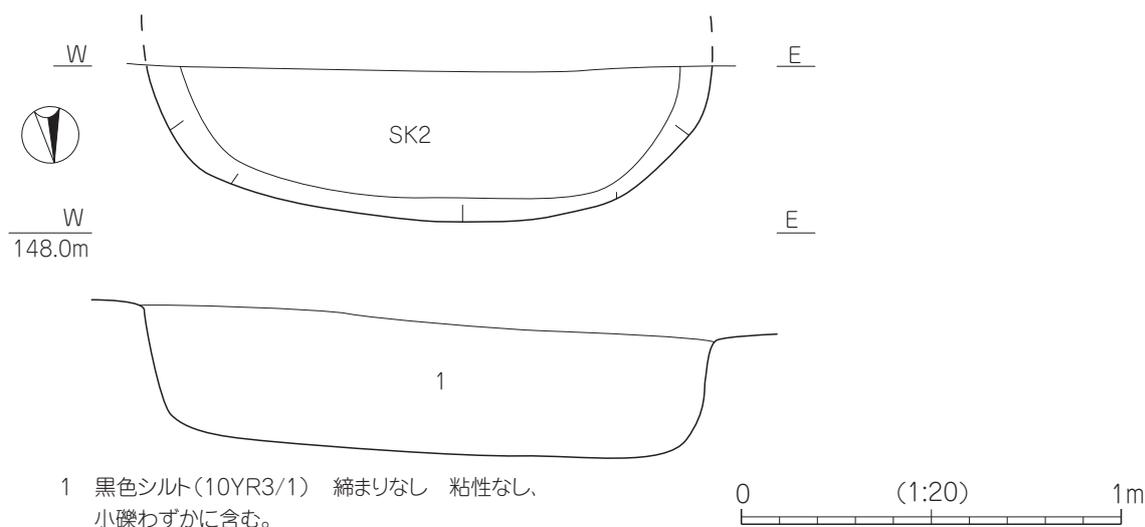


第83図 SK 1 出土遺物実測図

(3) SK 2 (図 84、図版 27、28)

調査区中央SK 3の南に位置し、遺構南半は調査区外に展開する。平面形態はやや楕円形気味の方形を呈し、遺構の規模は南北検出長約 0.4m、東西約 1.5m、深さ約 35cmを測る。断面形状は逆台形状を呈し、埋土は黒色シルト質で締まりもなく粘性もない。粒状の小礫をわずかに含む層である。遺物は弥生土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。



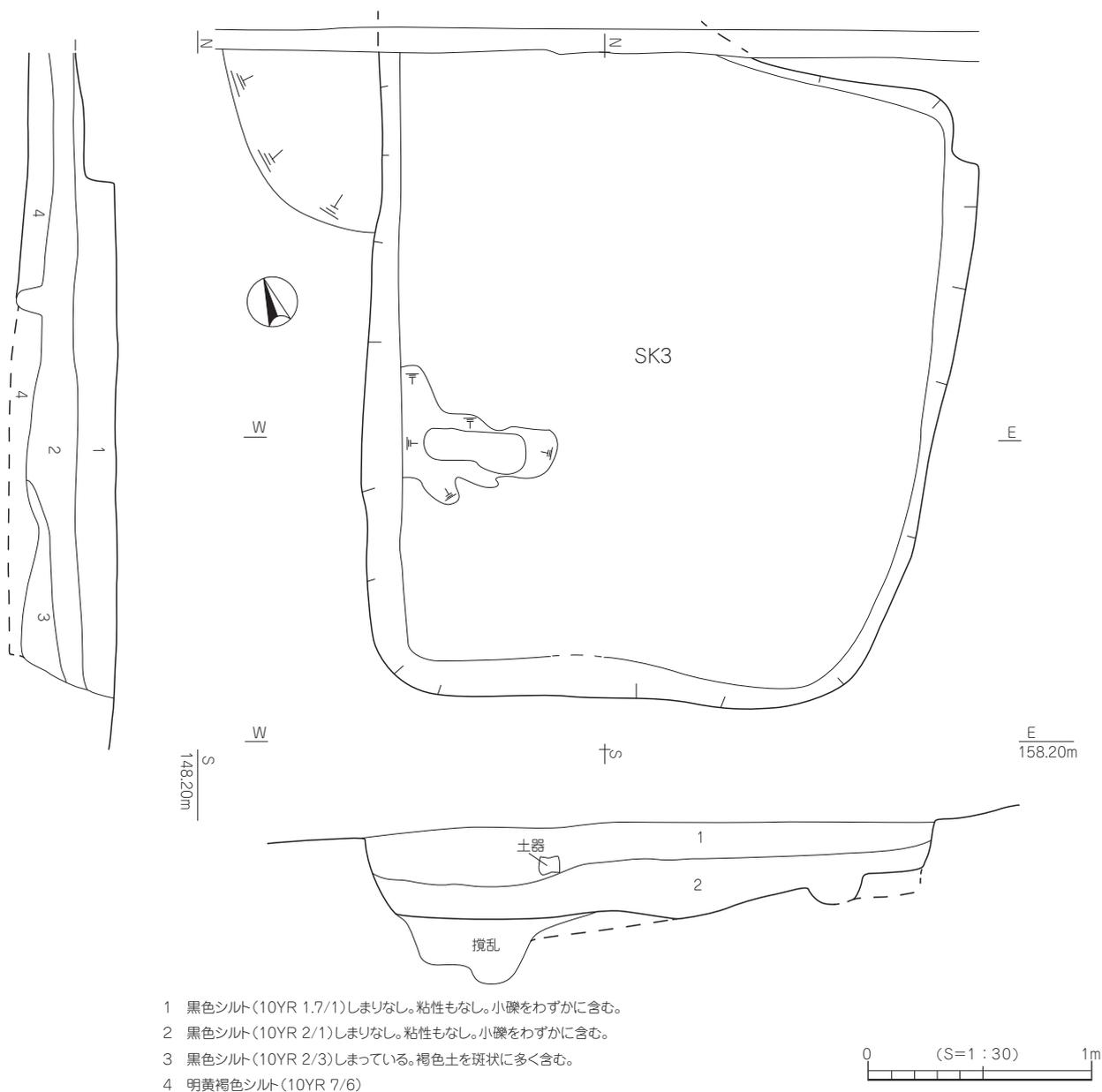
1 黒色シルト(10YR3/1) 締まりなし 粘性なし、小礫わずかに含む。

第84図 SK 2 測量図

(4) SK3 (図85、図版29、30)

調査区中央部やや西に位置する。北部の一部は調査区外に展開する。平面形はややいびつな方形を呈し、規模は東西約2.5m、南北約2.8mで、壁高約40cmを測る。遺構の断面形状は逆台形状であるが、床面は西にやや傾斜し平坦ではない。遺構内の北西部壁面に接する部分は攪乱によって消失している。埋土は3層で、第1層黒色シルトで締まりもなく、粘性もない。小礫をわずかに含む層である。第2層黒色シルトで締まりもなく、粘性もない。小礫をわずかに含んだ層である。第3層黒色シルトで締まりっている。褐色土を斑状に多く含んだ層である。遺物は遺構内より弥生土器が出土しているが、図化できるものはなかった。

遺構の時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉に位置付けられる。



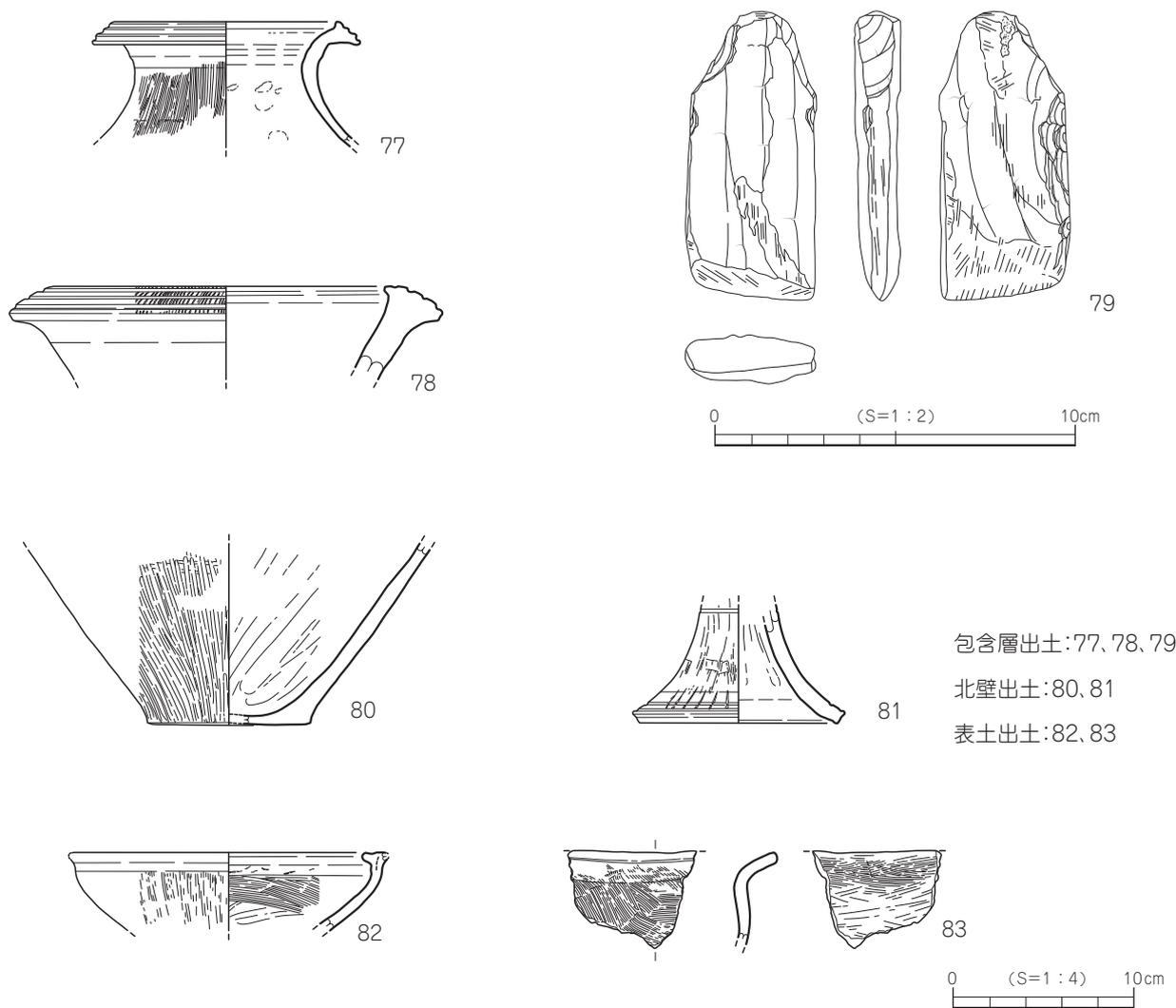
第85図 SK3測量図

包含層出土遺物（図 86、図版 48、49）

77、78、79は包含層一括の出土遺物である。77、78は壺形土器である。77は口縁部から頸部の残存である。大きく外反する口縁部に端部は外傾し端面に3条の凹線文が施される。頸部外面はハケ目が顕著である。78は外傾する口縁部端面に3条の凹線文と縦の刻目を巡らせる。79は緑色片岩製磨製石斧の完形品である。

80、81は北壁出土の弥生土器である。80は大きく外反して立ち上がる平底の底部。81は高坏形土器で、脚部のみが残存である。裾部外面には縦方向の線刻が巡り、その後2条の沈線を施す。裾端部は稜を持ち、直下は段状に拡張され端面に沈線が巡る。縦方向の線刻は透かし等の簡略化されたものか。

82、83は表土出土遺物である。82は高坏形土器である。鋤先状口縁を持つもので端部は丸く仕上げ稜なし、口縁内部には突起を持つ。端面に凹線を持つ。伊予東部地方の影響か。83は甕形土器で折り曲げて外反する口縁は丸く仕上げ、内外面ともにハケ目調整が残る。



第86図 包含層一括・北壁および表土出土遺物実測図

遺構一覧

- 凡例 -

1. 本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
2. 遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は、以下とした。

遺構一覧表・遺物観察表 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構一覧表

規模欄 () : 現存検出長を示す。

(3) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) ⊕ → 口縁部、⊗ → 胴部

胎土欄 胎土欄では混和材を略記した。

例) 石 → 石英、長 → 長石、金 → 金ウンモ、赤 → 赤色土粒。

() 中の数値は混和材粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~3) → 「1~3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略号について。◎ → 良好、○ → 良、△ → 不良。

表 13 竪穴建物一覧

竪穴 (S1)	調査区	平面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1		隅丸方形	東西 5.0 × 南北 4.14 × 6~30	黒色シルト (10YR 3/1) しまり粘性なし 黒色シルト (10YR 3/4) しまる。粘性なし	柱穴 2 基、炉 1 基、 周壁溝	砥石、壺、甕	弥生時代後期後葉	

表 14 土坑一覧

土坑 (SK)	平面形	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	楕円形	逆台形	4.14 × 5.0 × 0.43	黒色シルト (10YR 2/1) しまり粘性なし	弥生土器	弥生時代中期後葉	
2	方形	逆台形	(東西約 1.5 × 南北約 0.4 × 0.35)	黒色シルト (10YR3/1) しまり粘性なし	弥生土器	弥生時代中期後葉	
3	方形	逆台形	(東西約 2.5 × 南北約 2.8 × 約 0.4)	黒色シルト (10YR 1.7/1) しまり粘性もなし 黒色シルト (10YR 2/1) しまり粘性なし 黒色シルト (10YR 2/3) しまる。褐色土を斑状に含む。 明黄褐色シルト (10YR 7/6)	弥生土器	弥生時代中期後葉	

表 15 S I 1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
71	壺	器高 17.4 胴径 18.9	球形の胴部。底部はわずかに膨らむ。平底で厚い。体部外面はハケ目。帯状にスス残存。黒斑あり。	⊕ ナデ ⊗ ハケメ ⊙ ハケメ後ナデ	⊗ ナデ	橙・にぶい黄 橙	長・チャート・ 石・クサリ礫 (4mm) ◎		46

表 16 S I 1 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
72	砥石	完形	砂岩	29.25	12.8	7.05	3,600	両面の一部に使用痕。	46

揚り畑遺跡 8 次調査

表 17 SK1 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	甕	復元口径 16.2 残存高 10.45	外反する口縁に端部は外傾し平坦でコの字状に仕上げる。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ後ミガキ	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ後ミガキ	にぶい黄橙・ 黄灰・橙 橙・灰黄褐	石英・長石中 量(0~6mm) やや粗○		47
74	甕	復元口径 18.4 残存高 6.3	体部やや張。口縁部端面に凹線文2条。端部は上方にわずかに伸びる。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケメのちミガキ	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケメ後ミガキ	にぶい黄橙・ 黒褐 浅黄・にぶい橙	石英・長石中 量(0~4mm) やや密○		47
75	甕	復元底部 残存高 6.0 6.95	くびれの上げ底。底部内面に指圧痕。	ナデ	ナデ	灰黄褐 灰黄褐	石英・長石少 量(0~5mm) やや密○		48
76	高坏	復元底部 残存高 10.0 3.6	高坏脚部。未完通の矢羽根透かし、裾部に3条の凹線。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	石粒微量(0 ~5mm) 密○		48

表 18 包含層一括遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
77	壺	復元口径 12.20 残存高 6.95	大きく外反する口縁部。端部は外傾し端面に3条の凹線文。頸部外面はハケ目。	㊦ ヨコナデ ㊧ タテハケ	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ	にぶい黄橙・ 灰褐 にぶい黄橙	石・長少量(0 ~2mm)密○		48
78	壺	口径 19.0 器高 5.2	外傾する口縁部。端面に3条の凹線文と縦の刻目。	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ	橙 にぶい黄橙	石・長少量 (2mm)密○		48

表 19 包含層一括遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
79	磨製石斧	完形	緑色片岩	8.1	3.6	1.4	56.9		48

表 20 北壁出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	底部	器高 10.1 底部 9.0	大きく外反して立ち上がる平底外面に黒斑あり。	㊦ ヘラミガキ ㊧ ナデ	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	チャート・長・ クサリ礫石 (3mm)密○		49
81	高坏	器高 6.6 底径 11.7	裾部外面に縦方向の線刻、その後2条の沈線。裾端部は稜を持ち、直下は段状に拡張。端面に沈線。縦方向の線刻は透かし等の簡略化?	ハケメ後ヘラミガキ	ナデ しぼり痕あり	にぶい黄橙 にぶい黄橙	チャート・長・ クサリ礫石 (1.5mm)密○		49

表 21 表土出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
82	高坏	口径 (15.2) 残高 (4.3)	鋤先状口縁。端部は丸く仕上げ稜なし、口縁内部に突起。端面に凹線を持つ。伊予東部地方の影響か。	㊦ ヨコナデ ㊧ タテハケ	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケメ・ミガキ	にぶい褐 灰黄褐	長・石中量 (0~4mm) 密○		49
83	甕	口径 19.0 器高 5.1	折り曲げて外反する口縁は丸く仕上げる。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙 にぶい黄	長・石・クサ リ礫(4mm) 密○		49

第6章 総括

今回の揚り畑遺跡の発掘調査は、前回実施した平成13年度の6次調査から11年ぶりの発掘調査となった。本調査は集落排水路及び管理道路の整備工事に伴うものであったため、東西間約270m、南北間約5mと細長い調査区となったが、これまでの調査から集落の中心に近い箇所での調査になるのではないかと想定された。2回に分けて実施した調査の結果、弥生時代中期中葉から後期後葉を中心とした竪穴住居や関連する遺構が検出された。本章では今回の調査結果を基に揚り畑遺跡について考察してみたい。

揚り畑遺跡は道後平野の東端部に位置する遺跡である。本遺跡の調査は、平成5年度に運動公園施設の計画地となったことに伴いトレンチ調査が実施されたことに始まる。この調査により揚り畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺跡であると報告された。この後、平成8年度から平成13年度にかけ現在の市営施設ふるさと交流館さくらの湯建設工事や、周辺の道路整備工事に伴い発掘調査が行われた。いずれの調査も小規模なものであったが、弥生時代中期後葉から後期後葉期の集落遺跡であることが判明してきた。平成10年度と11年度に実施された4次・5次調査に検出された溝の埋土中より大量の弥生土器を検出したことにより、本遺跡が大規模な集落であったのではないかと考えられるようになった。

揚り畑遺跡の形成時期は、遺構や遺物の時期から中期後葉に行われたと考えていたが、既往調査から弥生時代中期後葉以前の遺物の出土が少数ではあるが確認されることから課題となっていた。今回、C2区S13が中期中葉に時期比定されることから、やや早まる。また、今回の調査により中期後葉の住居や遺構が広範囲で検出された。このため、弥生時代中期後葉には丘陵上の広い範囲に住居が展開したと考えられる。また、7次調査E地区中央付近で丘陵の落ち込みを確認したが、そこから西側は宝泉川へと続いており、検出された遺構や遺物がほとんどなく、事前に実施した試掘調査においても遺跡は検出されていない。このことから丘陵の落ち込みが確認されたあたりが本集落範囲の西限ではないかと考えられる。

遺構面では、今回の調査区の住居の検出総数は7基となり、その内訳は中期中葉1基、中期後葉3基、後期後葉3基（S1の可能性があるB区SK3は除く）となる。7次調査C1区で検出された住居は、本遺跡で検出されている円形住居と比較すると大型であり、この規模の住居の検出は東温市では初例となる。調査面積が限られたものであるため断定することは困難であるが、中期後葉の遺構は調査区全体に幅広く分布しているのに対し、後期後葉の遺構はやや調査区中央から東に分布している傾向があるように見られ、中期後葉から後期後葉の間で、集落の中心が移動している可能性も考えられる。

遺物面では検出された遺構と同時期のものである弥生時代中期後葉から後期後葉の遺物が多数検出された。土器の形態から本遺跡から検出された弥生土器は、松山平野から出土する一般的な弥生土器と相違がないことから、揚り畑遺跡は松山平野の文化圏に含まれる遺跡といえる。

今回の調査で特徴的であったのは、7次調査A区SK5で検出された分銅形土製品である。分銅形土製品は、弥生時代中期後葉の甕の破片と緑色片岩の剥片1点と共に出土した。分銅形土製品は胴部中央から上下に破断していた。上部は遺構の上部壁面に頭を下向きにし、顔を壁面に押し当てる形で検出され、壁面には分銅形土製品の眉部分がスタンプとして残されていた。下部は甕片と共に埋められており緑色片岩製の剥片1点も検出された。分銅形土製品の出土例は瀬戸内沿岸地域を中心とするもので、その用途は祭祀に用いられたと考えられている。そのほとんどは割られ破片となった状態での出土がほとんどである。今回SK5で検出した分銅形

土製品も何らかの祭祀に関する埋納されたものと考えられるが、今後のひとつの事例となればと思う。

また、集落の西の端となる7次調査E区のSP1から動物形土製品1点が検出された。出土した甕片から弥生時代中期後葉に位置付けられると考えられる。愛媛県内の動物形土製品の出土例は文京遺跡、松山大学構内遺跡、宮前川遺跡であり、時期は弥生時代中期後葉から古墳時代初頭若しくは前期頃にかけてのものである。今回本遺跡から出土した動物形土製品は、出土した甕片から弥生時代中期後葉と愛媛県内では古い時期に位置付けられる。モチーフとした動物については全体像が不明であるが、目の後ろに表現された耳部が竹管で丸い表現をされていること、口の部分は欠損しているが、口先と思われることから、「鳥」としての可能性も考えられる。今後、類例の増加を待つ必要がある。

今回の調査は、限られた面積での調査ではあったが、主に弥生時代中期後葉から後期後葉にかけての住居や遺構・遺物などを多数検出することができた。特に集落は弥生時代中期後葉から広い範囲に住居が展開することや、遺物の状況から松山平野の文化圏であること等を確認することができた。しかし、調査では弥生時代中期中葉の遺構の検出等もあり、集落形成時期に課題を残すほか、遺跡の全体像を解明するまでには至らなかった。また、近接する宝泉遺跡などの他の同時期の遺跡との関連性について解明する材料は見つからなかった。今後、これらの課題点等について解明するためにも今後の調査に期待をしたい。

参考文献

川内町教育委員会 2002「揚り畑遺跡－1次～6次調査報告書－」

川内町教育委員会 1989「宝泉遺跡Ⅰ」

東温市 2012「東温市発足記念重信町誌川内町新誌統編」

東温市教育委員会 2010「北吉井樋口遺跡－第1次調査・第2次調査－・向井古墳」

松山市教育委員会 1996「東本遺跡4次調査 枝松遺跡4次調査」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市教育委員会 2002「樽味四反地遺跡－第5次調査－」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市教育委員会 2007「松山大学構内遺跡Ⅵ－6次調査－」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木謙一 2000「伊予中部地域」「弥生土器の様式と編年－四国編－」木耳社

梅木謙一「2006分銅形土製品からみた基盤交流圏－出土の意義と地域間交流について－」「日本考古学協会 2006年度愛媛県研究発表資料」日本考古学協会 2006年度愛媛大会実行委員会

梅木謙一 2001「愛媛県出土の弥生時代動物関連資料」「久保和士君追悼考古論文集」

柴田昌児ほか 2010「第3章弥生時代」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要紀要愛媛第9号」財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

写真図版

写真図版 1～ 20:揚り畑遺跡7次調査遺構図版

写真図版 21～ 30:揚り畑遺跡8次調査遺構図版

写真図版 31～ 45:揚り畑遺跡7次調査遺物図版

写真図版 46～ 50:揚り畑遺跡8次調査遺物図版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、そのほかデジタルカメラも併用し撮影した。一部の撮影には高所作業台を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ スーパーアングュロン 90mm他
	マミヤ RZ67	マミヤセコール 50mm f 4.5 他
フィルム	白黒アクロス	
デジタルカメラ	NIKON D3000	AF-S DX NIKKOR 18-55mm

2. 遺物は、デジタルカメラで撮影した。

使用機材：

デジタルカメラ	CANON EOS 5D Mark III EF100mm F2.8L マクロ IS USM
	Adobe Light Roomにて現像
ストロボ	コメット /CLX-25・CBb-24X
スタンド等	無影撮影台・富山製作所アートスタンド PRO55
撮影：	横山 亮刺

3. 製 版：写真図版 175 線
印 刷：オフセット印刷
用 紙：マットコート 93.5kg

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』 vol.1～6



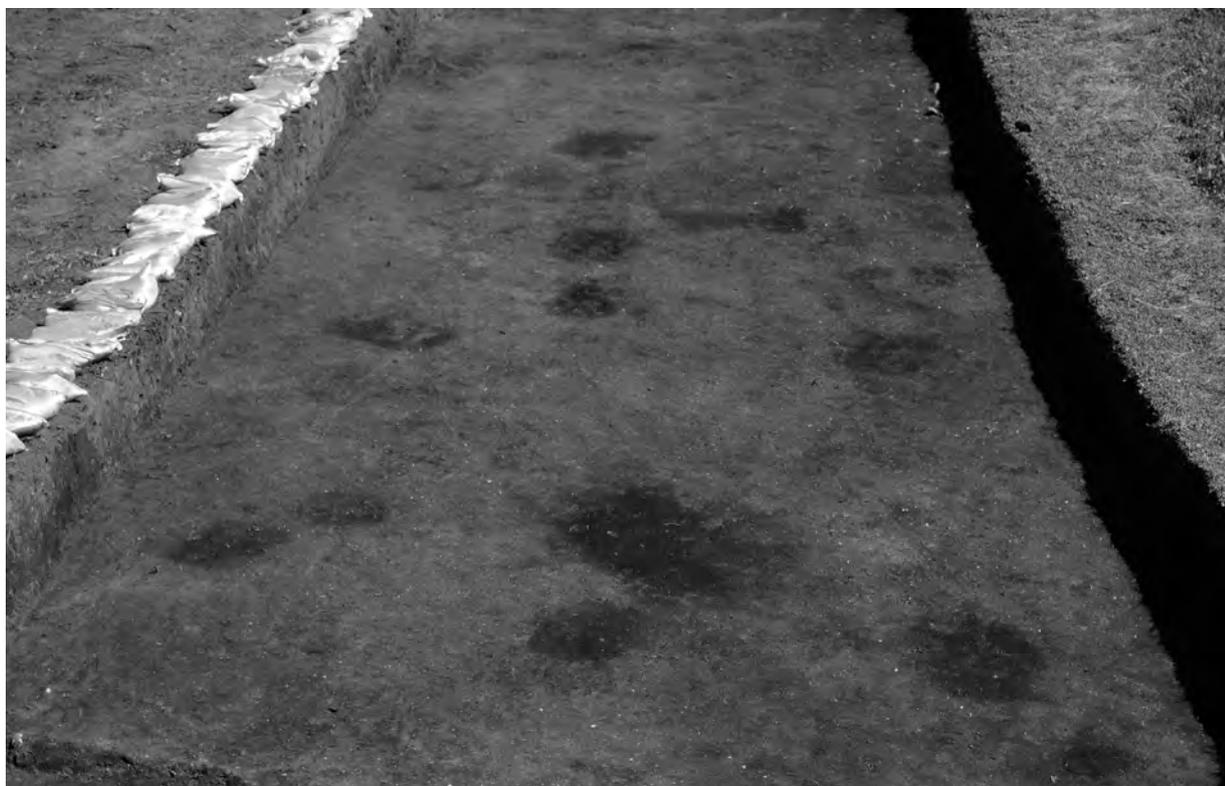
1. A・B区調査前全景(東より)



2. A区遺構検出状況(西より)



1. A区SI1完掘1(南より)



2. A区SB1検出状況(西より)



1. A区SK2・SP17検出状況(北より)



2. A区SK2遺物出土状況(北より)



1. A区SK2南北ベルト(西より)



2. A区SK5分銅形土製品・遺物出土状況(北西より)



1. A区完掘状況(西より)



2. B区遺構検出状況(東より)



1. B区SK3長頸壺出土状況(南東より)



2. B区SK3長頸壺出土状況(南より)



1. B区SK4遺物出土状況(東より)



2. B区SP8遺物出土状況(西より)



1. B区焼土断面状況(南より)



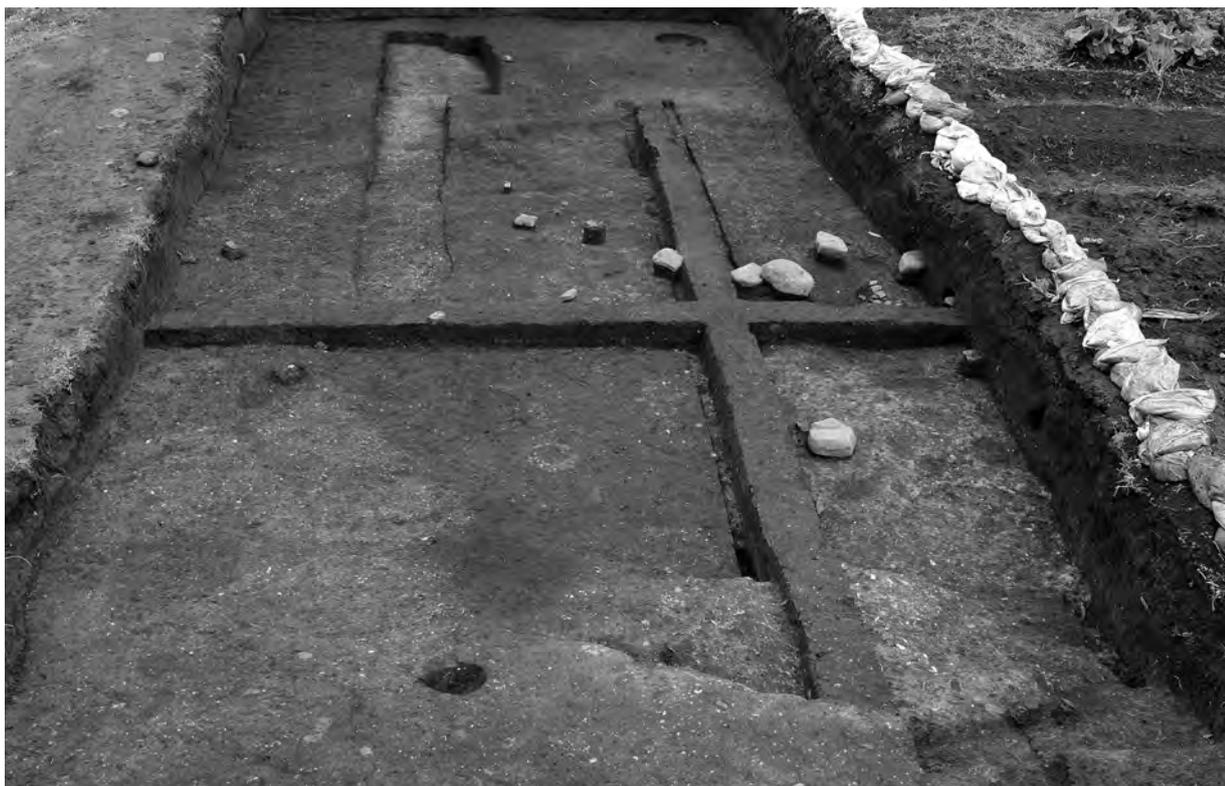
2. B区完掘状況(東より)



1. C1・2区調査前全景(西より)



2. C1区遺構検出状況(東より)



1. C1区S11遺物出土状況(東より)



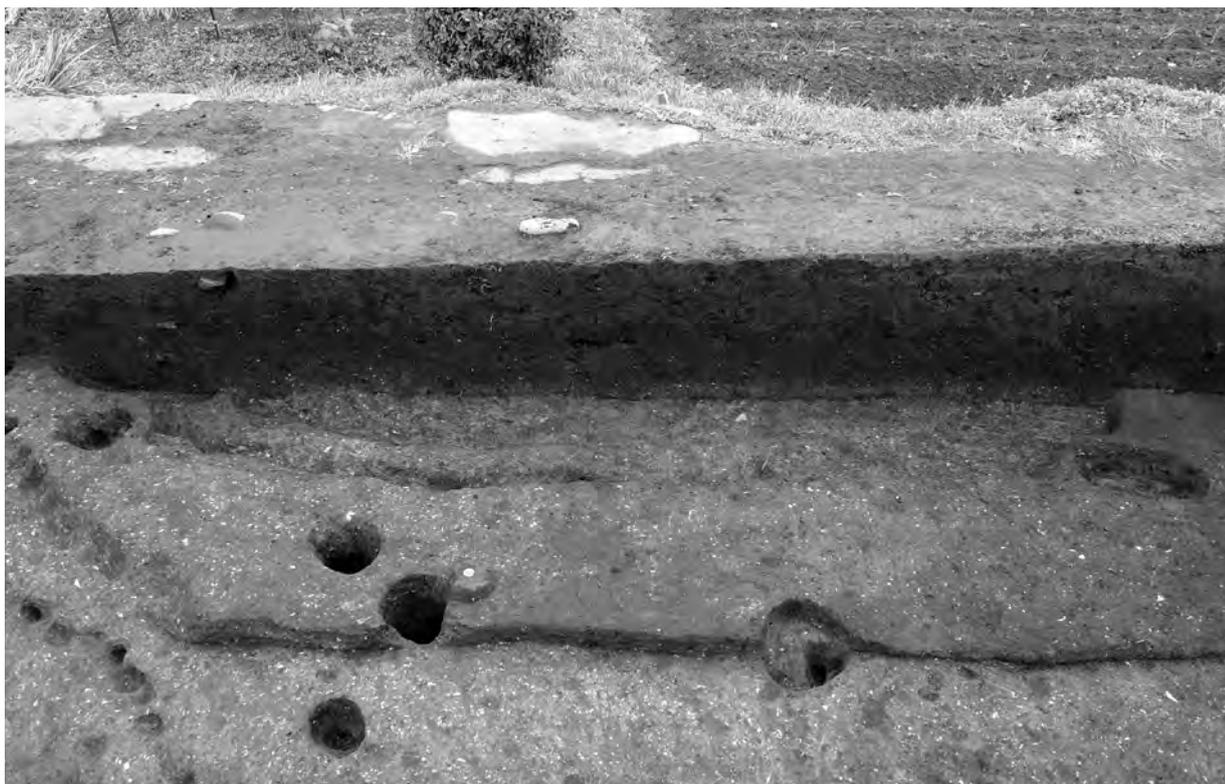
2. C1区S11柱状片刃石斧出土状況(南より)



1. C1区SI1完掘状況(東より)



2. C1区SK4完掘状況(北より)



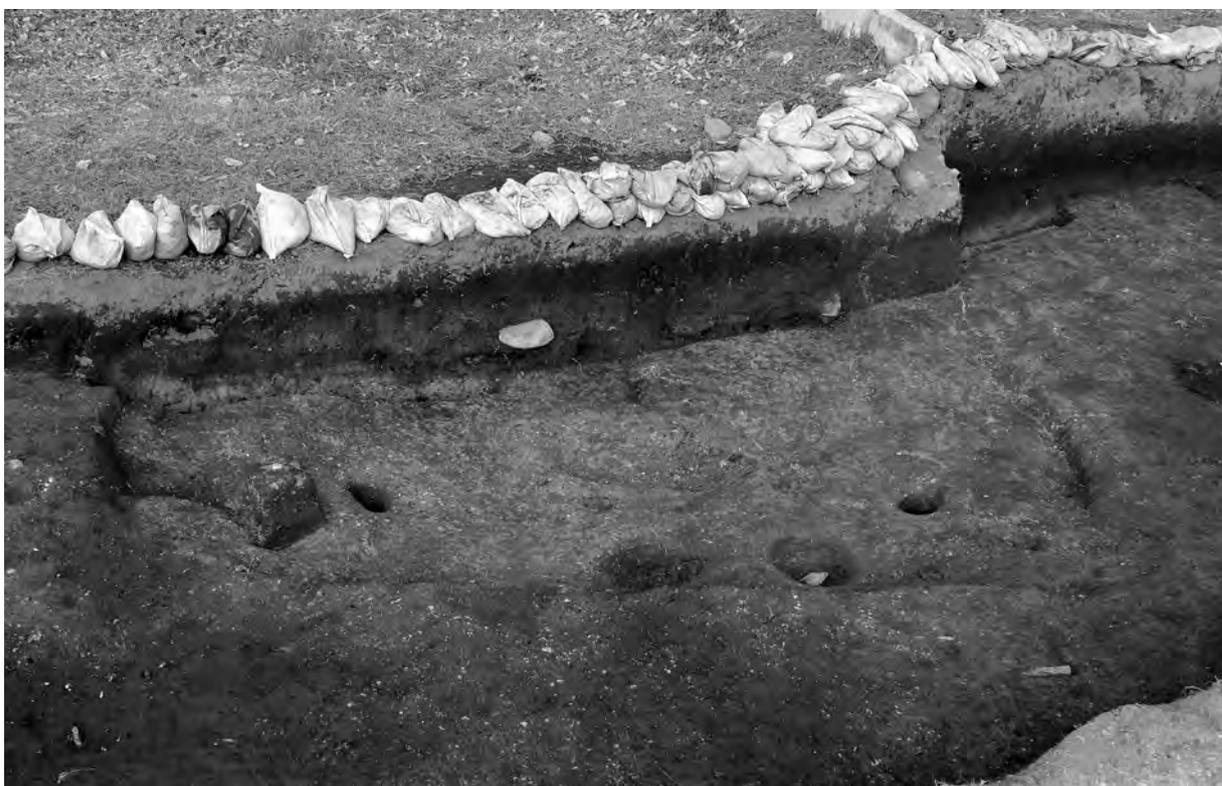
1. C1区SK5完掘状況(北より)



2. C2区調査前全景(西より)



1. C2区遺構検出状況(東より)



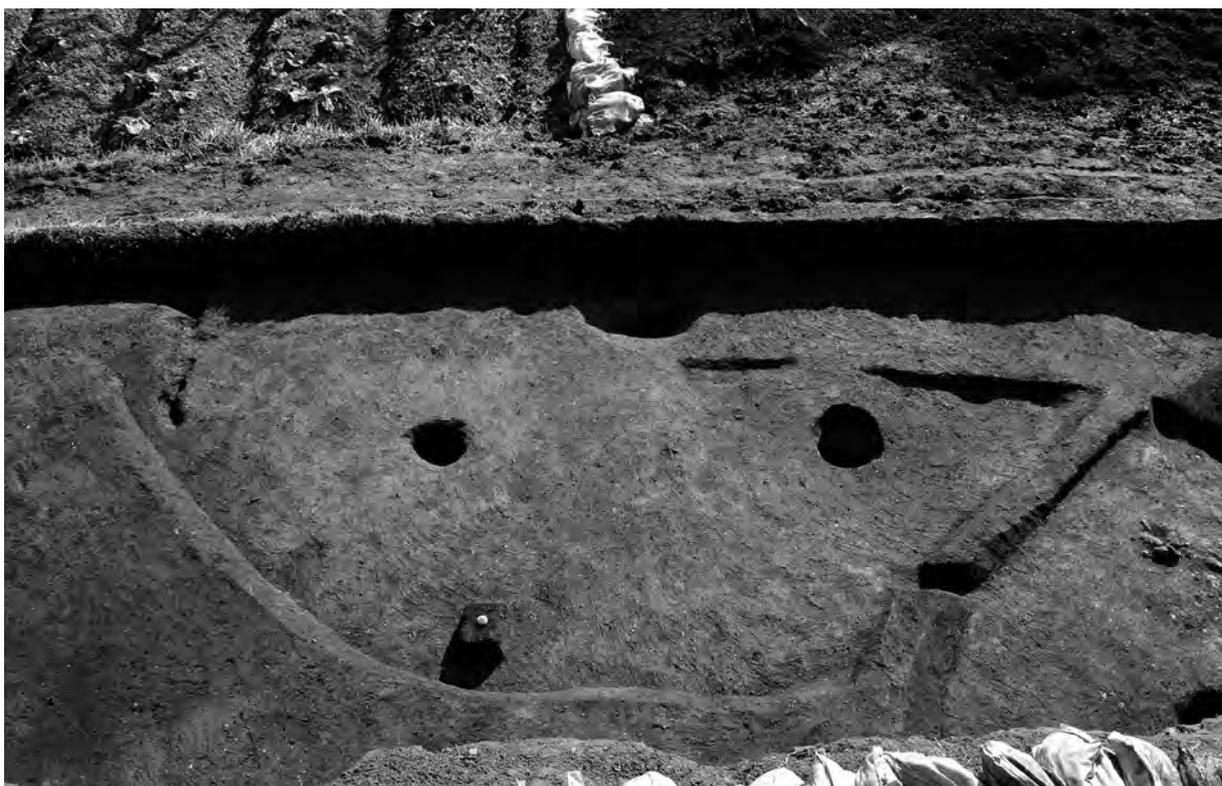
2. C2区SI1 完掘状況(南より)



1. C2区S13・4 遺物出土状況(東より)



2. C2区S13北壁トレンチ分銅形土製品出土状況(南より)



1. C2区SI3完掘状況(北より)



2. C2区SI4完掘状況(北より)



1. C2区SK4遺物出土状況(南より)



2. C2区完掘状況(東より)



1. D区遺構検出状況(西より)



2. D区S11完掘状況(南より)



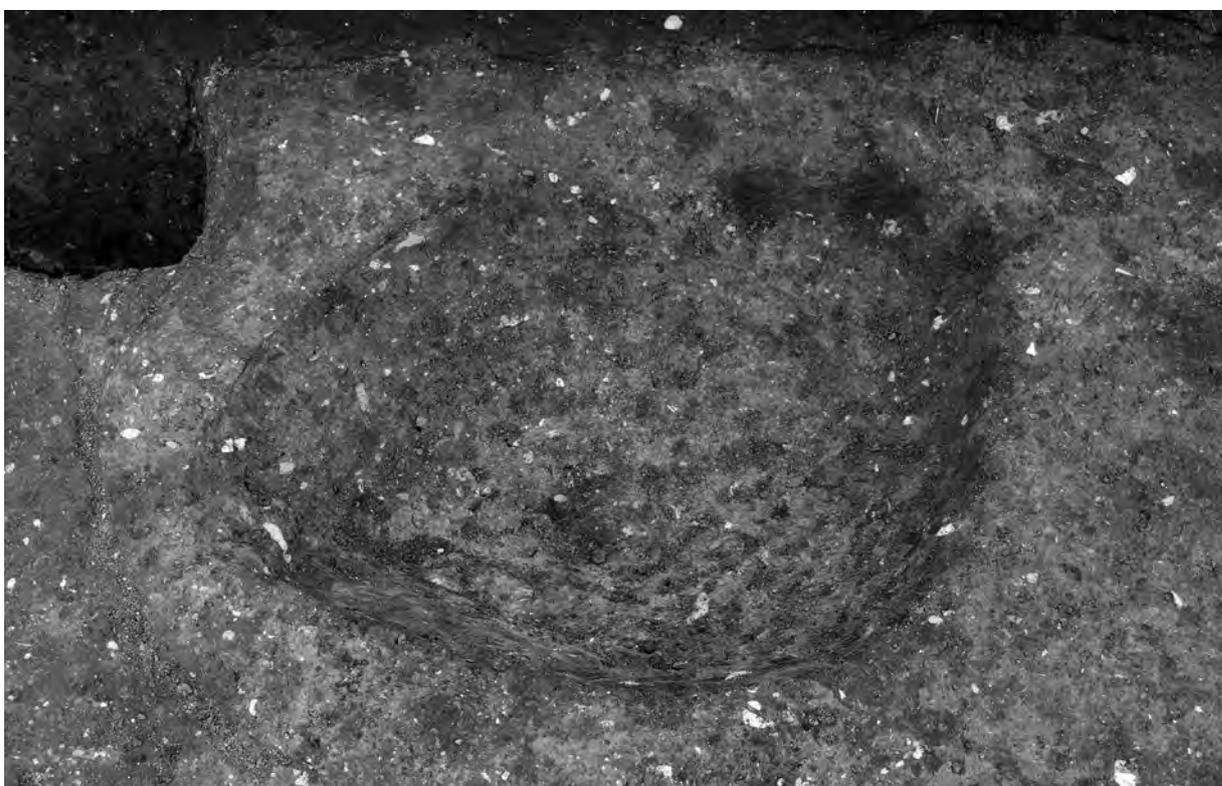
1. D・E区調査前全景(西より)



2. E区遺構検出状況(東より)



1. E区SK1完掘状況(南西より)



2. E区SP1完掘(南より)



1. 東温市文化財審議会委員見学



2. 現地説明会



1. 調査区遺構検出状況(東より)



1. 調査前状況(東より)



2. 遺構検出(東より)



1. SI1検出状況(南西より)



2. SI1床面検出状況(南西より)



1. S11 P5砥石出土状況(南より)



2. S11 焼土検出状況(西より)



1. S11遺物出土状況1(南西より)



2. S11遺物出土状況2(南西より)



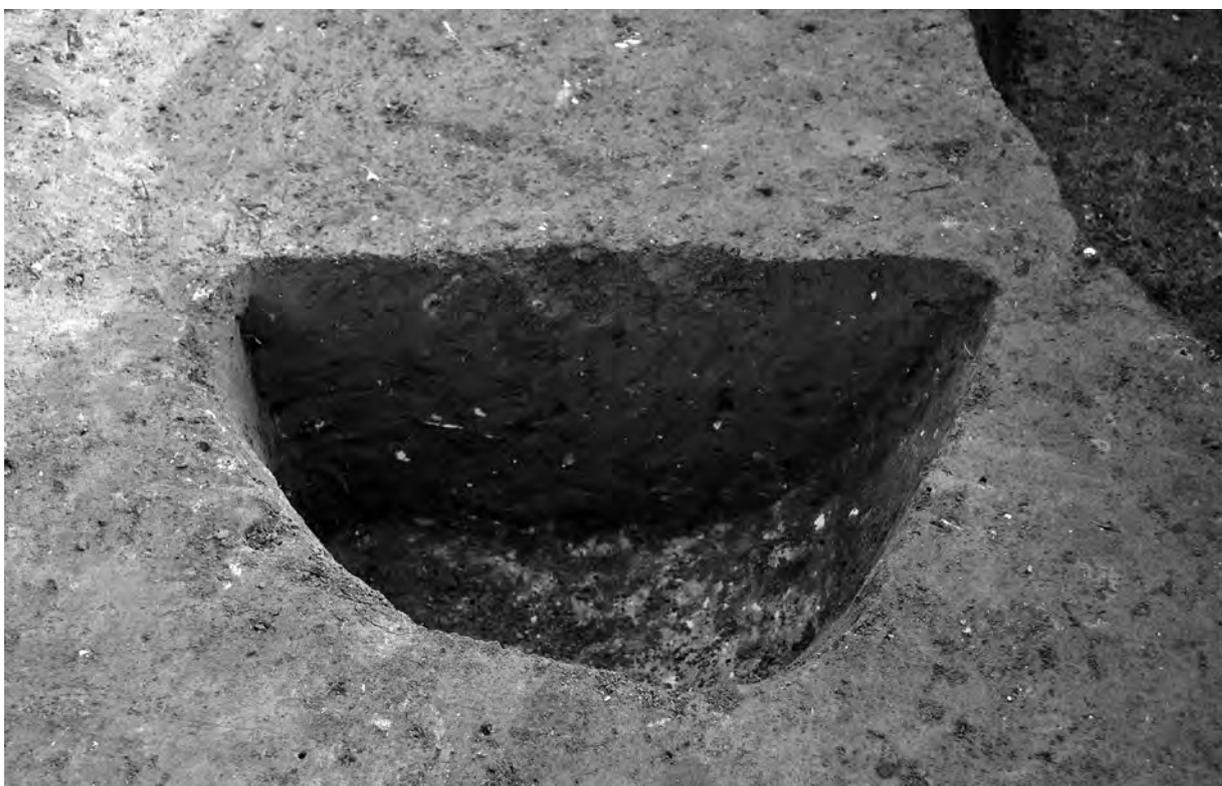
1. S11遺物出土状況3(南西より)



2. S11完掘(南西より)



1. SK1・SK2検出状況(西より)



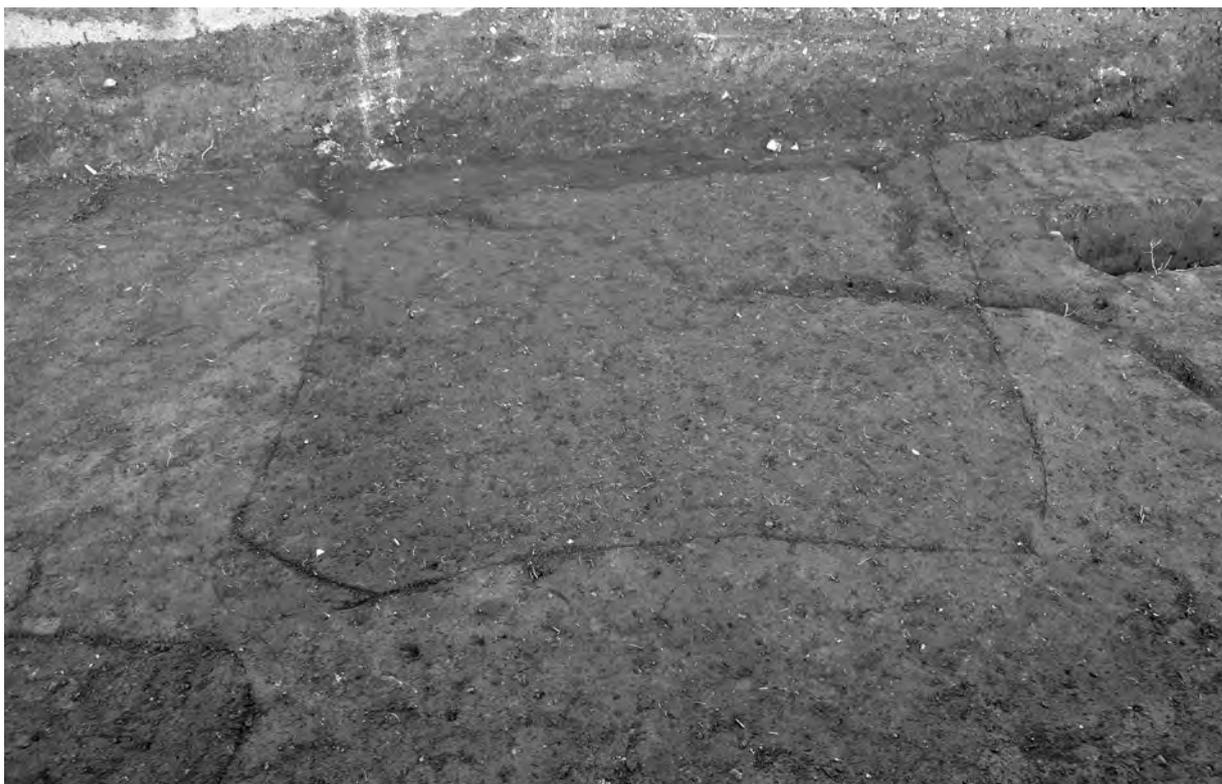
2. SK1断面(西より)



1. SK2断面(北より)



2. SK1・SK2完掘状況(西より)



1. SK3検出状況(南より)



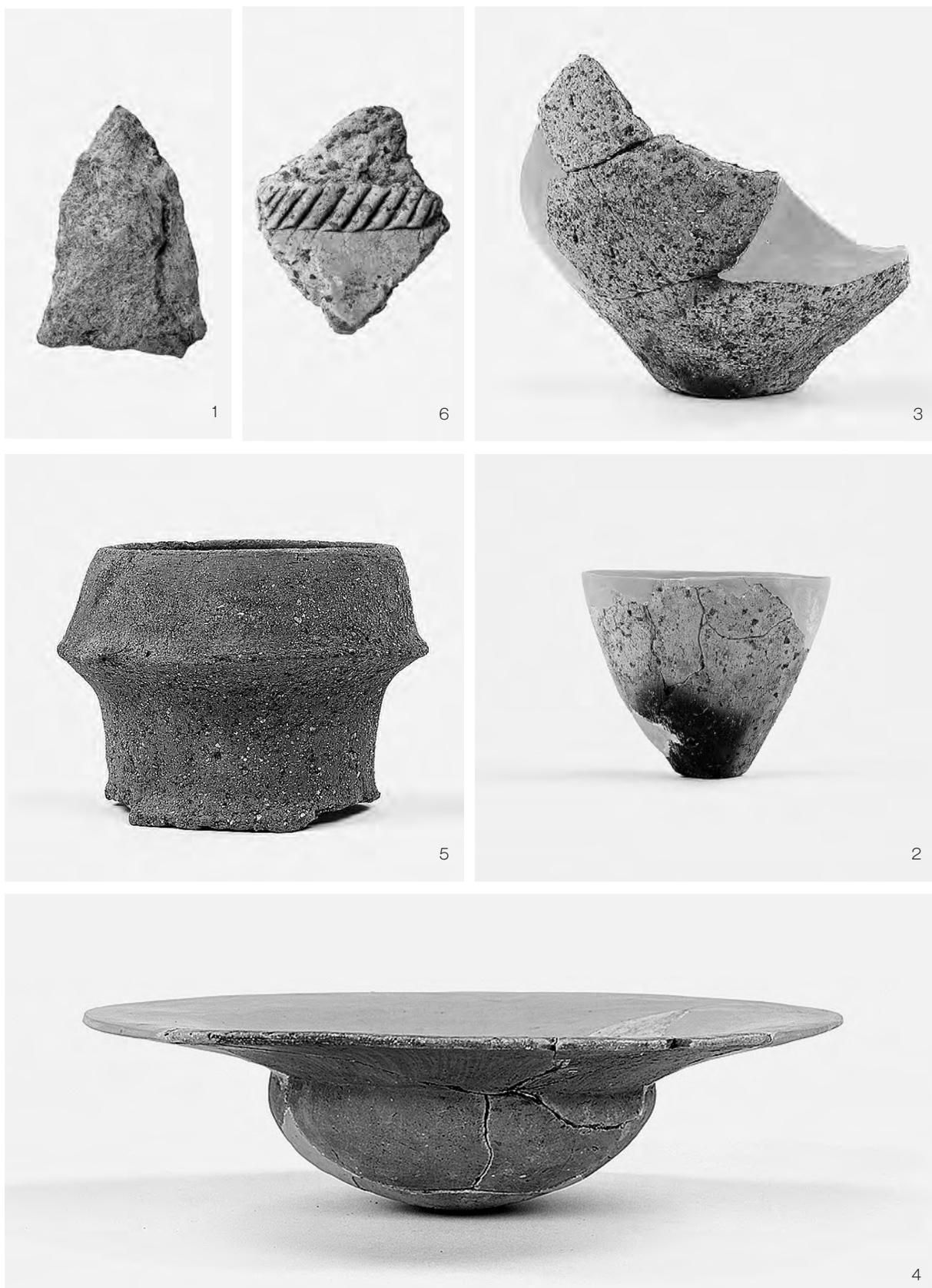
2. SK1断面状況(西より)



1. SK3完掘状況(南より)



2. 調査地完掘全景(東より)



1. A区SI1 出土遺物(1) A区SK2 出土遺物(6、3、5、2、4)



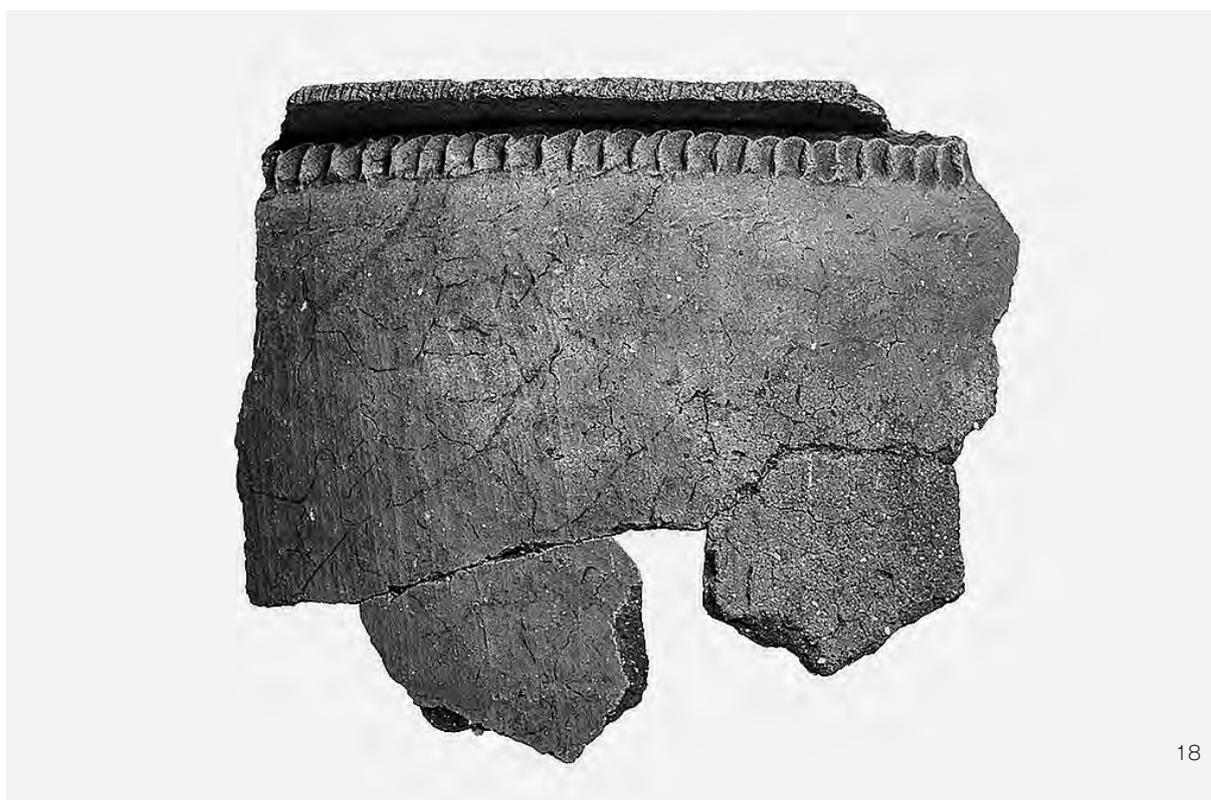
1. A区SK2出土遺物(7) A区SK5出土遺物(8、9、10) A区SP18出土遺物(156)



1. A区SK5出土遺物(11) A区SP13出土遺物(12) A区試掘調査出土遺物(14)



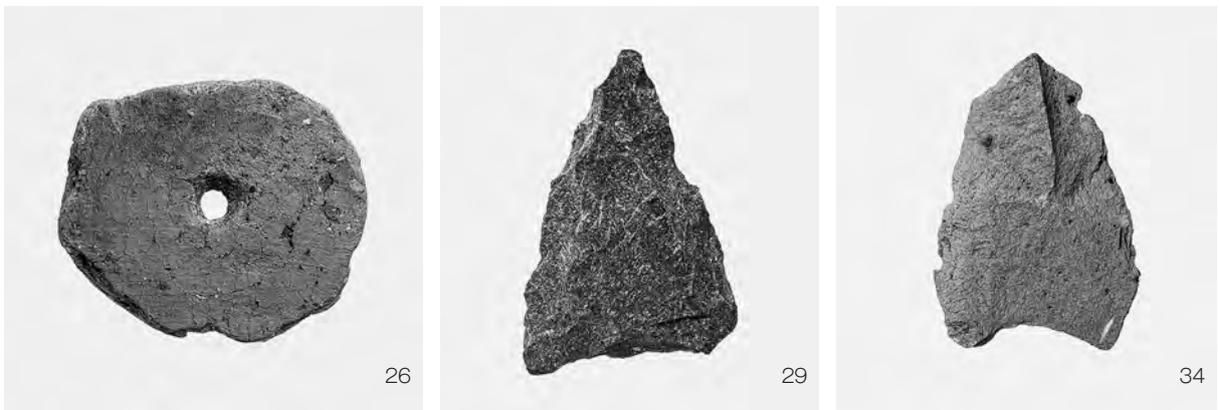
1. B区SK3出土遺物(15) B区SK4出土遺物(17)



1. B区SK4出土遺物(16、18)



1. B区SK4出土遺物(19、20)



1. B区SP8出土遺物(21) B区焼土出土遺物(22) B区包含層出土遺物(23)
C 1区SI1出土遺物(24、26、29、34)



25



27



28



31



35



36



33

1. C 1 区SI1 出土遺物(25、27、28、35、36、33、31)



1. C 1 区SI1出土遺物(32、30) C 1 区SK4出土遺物(37、38、39、41) C 1 区SK5出土遺物(42)



40



43



44



45

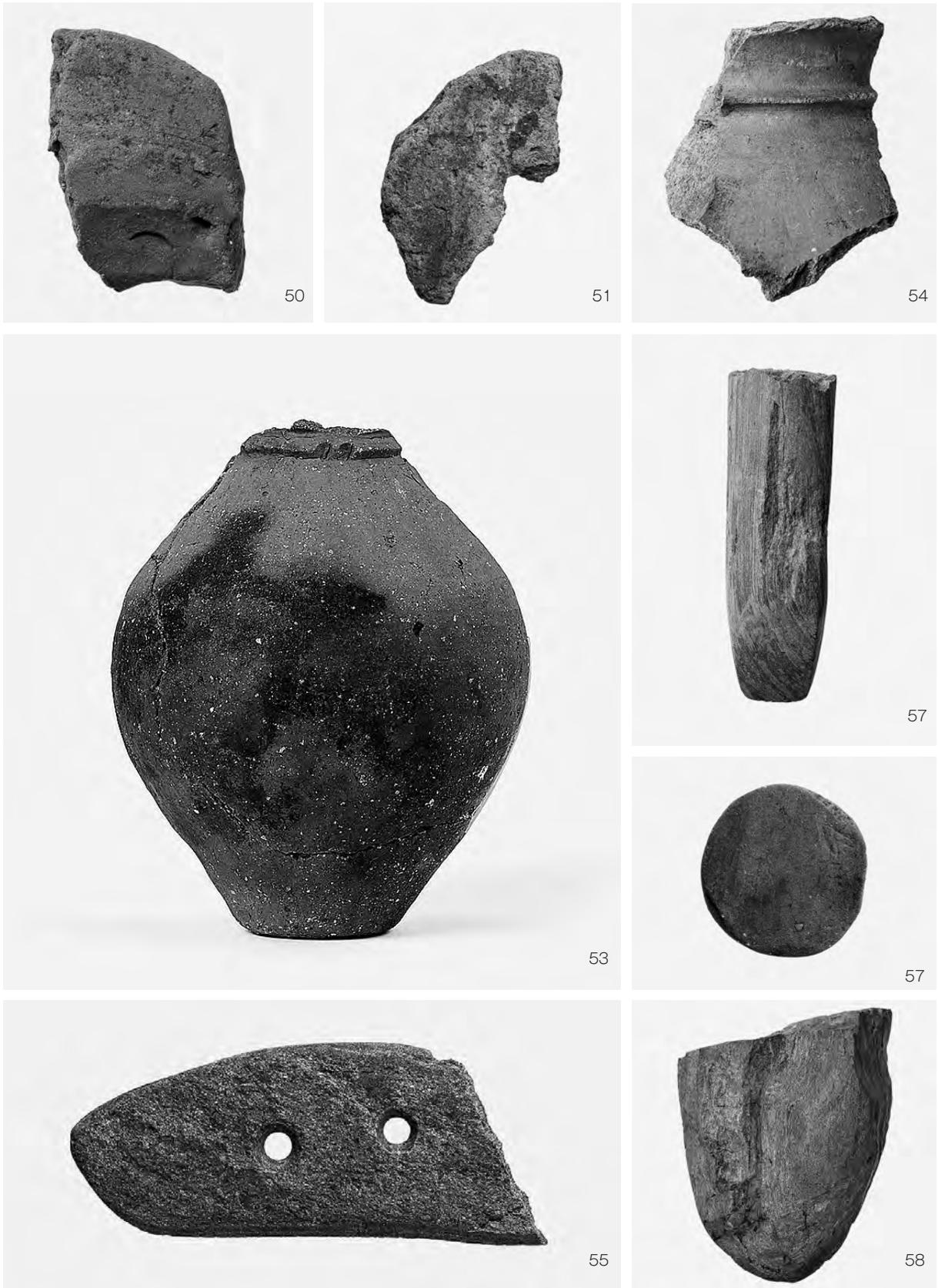
1. C 1 区SK4出土遺物(40) C 1 区包含層出土遺物(43、44、45)



1. C1区試掘調査出土遺物(46) C2区SI3出土遺物(47、48、49)



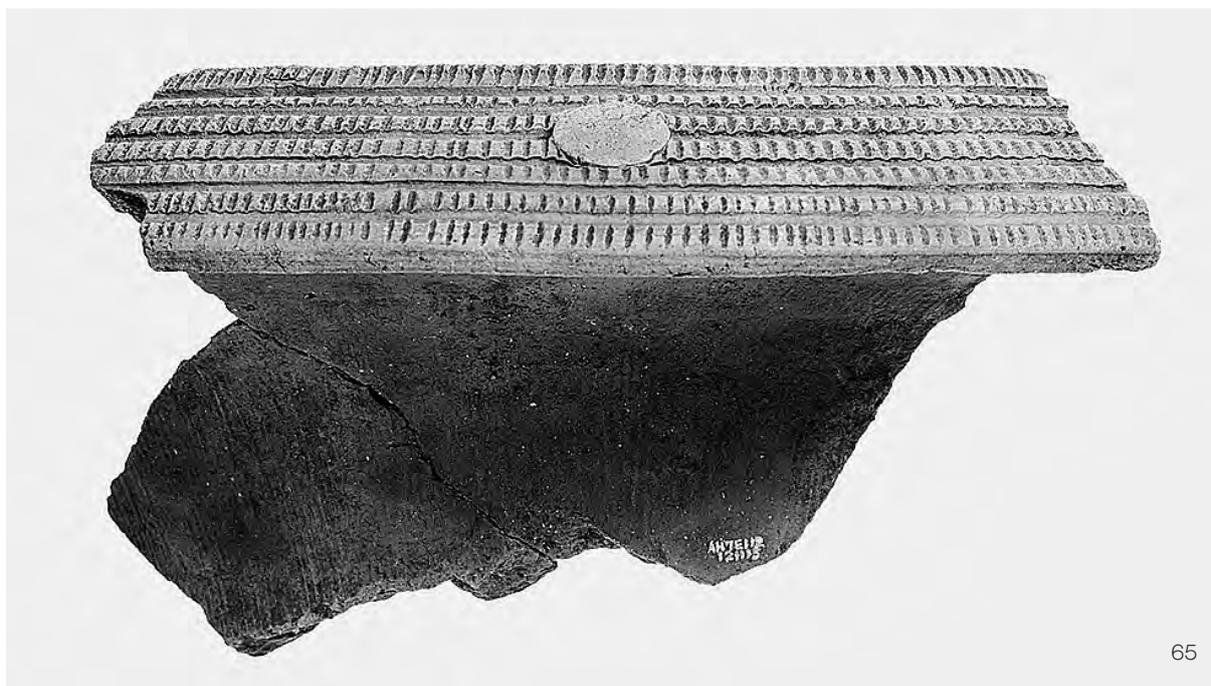
1. C 2区SI4出土遺物(52)



1. C 2区SI4出土遺物(50、51、54、53) C 2区SK4出土遺物(55) C 2区包含層出土遺物(57)
C 2区表土出土遺物(58、59)



1. C 2区SP15出土遺物(56) D区包含層出土遺物(60、61) E区包含層出土遺物(63)



65



62



66



64



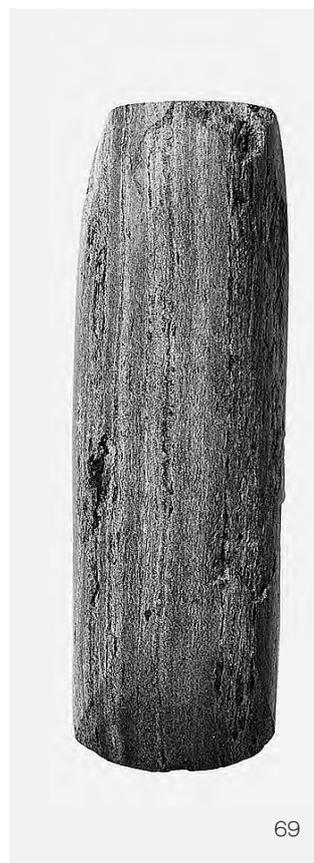
67



68



70



69

1. E区SP1出土遺物(62) E区包含層出土遺物(65、66、67、64、68) E区表土・表採遺物(69、70)



1. 8次調査SI1出土遺物(71、72)



1. 8次調査SK1出土遺物(73、74)



1. 8次調査SK1出土遺物(75、76) 8次調査包含層出土遺物(77)



1. 8次調査包含層出土遺物(78、79、80)



1. 8次調査北壁出土遺物(81、82、83)

報 告 書 抄 録

ふりがな	あがりはいせき7じ・8じちょうさ							
書名	揚り畑遺跡 - 7次・8次調査 -							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東温市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	樋口康裕（東温市教育委員会）、大塚正樹（国際文化財株式会社）							
編集機関	東温市教育委員会 東温市立歴史民俗資料館 国際文化財株式会社							
所在地	〒791-0211 愛媛県東温市見奈良509番地3					TEL 089-964-0701		
	〒102-0085 東京都千代田区六番町2番地					TEL 03-6361-2455		
発行年月日	平成31年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あがり畑遺跡 (第7次)	愛媛県 東温市 北方甲 1977番地2他	38215	川内No.8 川内No.40	33° 48' 10"	132° 54' 45"	20120913 ～ 20130202	1,078.48㎡	集落排水
あがり畑遺跡 (第8次)	愛媛県 東温市 北方甲 2048番地4他	38215	川内No.8 川内No.40	33° 48' 10"	132° 54' 49"	20131031 ～ 20140114	253.48㎡	集落排水
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
揚り畑遺跡	散布地 集落	弥生時代		住居、掘立柱建物、 土坑、柱穴		弥生土器・石斧・石鏃 分銅形土製品 動物形土製品		
要約	<p>7次・8次調査では、弥生時代中期中葉から後期後葉にかけての住居などの集落に関連する遺構や遺物を検出した。7次調査では弥生時代中期後葉の大型住居、多数の弥生土器片のほか、分銅形土製品や動物形土製品なども検出された。</p> <p>本調査では、本遺跡が弥生時代中期には集落が広い範囲で形成されていることが確認されたほか、調査区西側において集落の範囲を把握することができた。</p>							

揚り畑遺跡

－ 7次・8次調査－

平成31年3月

編集・発行 東温市教育委員会 生涯学習課

(東温市立歴史民俗資料館)

〒791-0211 愛媛県東温市見奈良509番地3

電話 089-964-0701

国際文化財株式会社

〒102-0085 東京都千代田区六番町2番地

電話 03-6361-2455 (代)

印刷 有限会社 野口印刷所

